

小さな紅の花

桜田 靖

― 序 章 ―

私は何につけ老いの躁言と揶揄されがちな
齢に至って、なお熟年の婦人達に夜な夜な悩
殺され惑わされるとは、何とも羨ましいでは
ないか、或いは変てことか、へんてこりんな
奴ではないか、とか笑われるかも知れません。
世の中に珍しくないすぐに正義の刃とやらを
大上段に振りかざすような聖人君子然たる人
士からは「いい年をして、その年でまだ女に
迷いうつつを抜かしているのか！」とか「仏
門でも叩いていい加減に煩惱を放念しろ！」
など一喝の太刀で袈裟懸けに切り下される
のが落ちでしょう。それでも世の中とは、そ
んな変てことかいう毒草のようなのが蔓延
った生身の人間が寄り集まったしろものなん
ではないのですか。だってそれが大袈裟に言
うならば、この地球上の万物の運命に、突然
変異とか勘違いの閃きやらが折をつけたり白

黒をつけて、歴史を作って来たのですからね。
変てこなことがない人生なんて空疎で、全く
味付けのない料理を食べているみたいだと思
います。人間、翁や媼になるまで生きなが
がらえても、それだけで君子や聖女になるは
ずもありませんからね。
変てここそが、人生を退屈しない面白いお芝
居にするものと違いますか。だから、そんな
に目の仇にしないで欲しいものです。
人の為にしたことなど、たとえいささかの悪
事くらい、日々の雑事の経過に紛れて知らな
い間に揮発し、薄靄のように漂って夕べには
消えてしまっているものだと思います。良いので
す。
ほとんどどの人間が表だっては真面目なお面
を付けています。が、心の真底ではずいぶんへ
んてこりんな人間だと自覚して生きていると
思っていますよ。私だってサラリーマン時代
の朝は大童で、飯をかき込むと便所へ息子や
娘と競走で駆けこみ、ワイシャツにネクタイ

を締めると、下はステテコ姿のまま背広を着て、齒を磨いたり頭髮にドライヤーの熱風を当てながら櫛目を入れたり腕時計や定期券、それに手帳や家の鍵を探して部屋をウロウロして妻子に冷笑されていたものでした。一度は娘から「パパが、ズボンをはき忘れて背広にステテコ姿のまんまカバンを提げて玄関を出て行った夢を見たわ。」と笑われ「勝手に妙な夢を見るな！」「言い返したことがありました。はじめにズボンをはけば済むことなのに、上衣の方から先に決めないと落ち着かない性分なんで、どうしてそんな格好をしていたのか理由なんか思い当たりません。

それだけではありません。私の父は、『生めよ、増やせよ』の軍国時代のことで、八人の兄弟姉妹の末っ子として北海道の函館からものと奥地に入り込んだ開拓村で生まれ育ったのです。が、末弟の気儘さで早々に生れ故郷を後にして東京へ出て、働кинаがら建築専門学校に学び、建築士となつたのでした。だから

物心ついた時、私はまだ多摩の田舎町だった。東京郊外の三鷹で育ちました。幼稚園のころですが、ずっと年下の男の子を連れて家の近くの小川のそばに植わって、いた桑の実を摘みに行く途上「アッ、お兄ちゃん、今、変なもの出した！」と私の半ズボン、自分の股ボタンのぞき込みました。が、股ボタンを外した覚えは全くないし「エッ！」と、その場合は怪訝な気持ちでその幼児を見返した。ただでした。その子が、そんな自分の思い違いとしか思えない。変てこな幻視をあちこちで言い触らして回ったようで、私は父母からは叱られるし、近隣の住民からは、へんてこりんな子供と陰口を叩かれていました。私が、どうしてその場で即座に否定しなかったのか、そうしていれば、こんな根も葉もない噂は広まらなかったでしょうに、変てこなことですね。でも実は小学校二年生の時に、授業の合間の休み時間にふざけて、隣席の女の子にズボン

の股ボタンを外しパンツの裾からチラリと一物を出して見せたことはあります。その女の子は「キャット」と笑って喜んでいました。その事実とその子の幻視に何か因果があったのでしようか。本当に変てこなことです。亡くなった父は寡黙で無愛想な人でした。建築士で色んな建物に携わっていたと思うのですが、家では仕事の話など一切口にしませませんでした。知らずに育ってしまいました。外観からは謹厳実直という四字熟語がピツタリの父の生き様だったでしょうけど、その父が亡くなっていた私の兄妹らで部屋を掃除し遺品を整理していたら、何と仏壇の裏の狭い隙間から埃まみれの『魅惑の人妻たち』とか数冊の風俗写真集が見つかって、長兄が「親父のこんな煩惱と妄想のお陰で、俺達もこの世に生を享けたんだからなあ。」と妙に得心したようにニヤツくと笑ったものでした。生きものには、子孫を残すための色んな摂理があつて、万物の霊長

と威張っていても、男だって女だって、みんなへんてこりんなものを心に棲息させて生きていて当然なのです。

私の遠祖は明治の初めに、宮城県から北海道の道南の開拓村に移住した、と聞いていました。ある夕飯時に、そんな父がボソッと「うちの苗字は、元々は苗字によくある齋藤の『齋』の字を知っているだろう、その字だったんだ。『齋』と書く方のイツキだったんだぞ。」とわざわざ新聞の広告チラシの端っこに鉛筆で書いて見せ、話を続けました。「曾爺さんか、もっと前の曾々爺さんの時代だったか知らんけど、村役場の木っ端役人が威張りくさって『齋』なんて変てこな姓（かばね）があるか！『五木』の間違いに決まってる、と一喝で弁明や文句の一つも聞く耳もなく苗字の漢字を変えられたのだ。」と教えてくれました。この一言が、今の今でも耳の穴に擦り込まれたように残っています。私の名前は五木弘というのですが、『五木の子守唄』の

里の出身かね、と聞かれたり、「昔、きみのご先祖様の家の周りに五本の木が植えてあったのが苗字になったんだよ。」と物知り顔で語つてくれた上司もいました。明治の昔の滑稽なほど威張った村役場の小役人も、浅学で偏狭な心の持主に相違なく、みすばらしい開拓民の由緒ある苗字の齋を五木に変えたに違いありません。変てこな話だと子供心に感じたものです。父の葬儀の日に集まってきた大叔母と名乗る人から「あんたとこの家系は、開拓で北海道に渡るほど没落していたのだろうけど、昔々は由緒ある神官の家格だったよ。」と聞いた記憶もありますから、元々は私の苗字が『齋』だったことに信憑性があります。でも今に至って、私は北の辺境の地にいた明治の昔の役所の職員 of へんてこりで偏屈そうな顔を勝手に思い浮かべたり、一知半解の頑迷そうな顔付を想像したり、滑稽なほど威張り腐っていた様子を空想して楽しんでおり、姓が五木であつても別にかまいません。

私は還暦をとつくに過ぎた頃、大学時代の美術サークル仲間だった柳田賢治から、唐突に福島の吾妻山の麓の彼の別荘に招かれました。別荘に着いたその夜は昔話に花が咲いて、嬉しく、年令も慢性の胃炎も忘れて散々に飲み明かししました。夜もだいたい更けて寝たのですけれど、泥酔の勢いで一気に短時間熟睡したせい、早曉に目が覚めてしまい、そつと起床するとジャケツを着て別荘を抜け出、近くに見える湖へ散歩に出ました。早朝散歩が健康のために良いと思つたからです。お釜の形をした湖は別荘のある高台の下方に望めるのです。が坂道を曲がりくねつて降りるの、木の間に隠れに姿を消してなかなか辿り着けそうにありません。平地に降りてしまえば、く歩いたら雨風に晒され、字が消えかかった湖畔入口の立看板があり、白樺の森沿いに舗道が続いていました。

朝霧が漂っている芽吹き初めたばかりの白
樺の森を脇目に歩いて湖畔の散策道に出たら、
やけに大きな白い帽子に白装束を身に纏った
妖精みたいな女が向こうからやって来るのが
目に入り内心吃驚しました。女の姿が近づく
とキャスケットというつば広の婦人帽を被っ
ていました。素知らぬ振りをしてすれ違って
も良かったのですが、私は何気なく通りすが
りに首を垂れていました。それが人としての
最低限の作法だと思ったからです。春を迎え
た高原は空一面青く晴れ渡り、東の空はオレ
ンジ色の炎に燃えるように朝雲が陽光に輝い
て、遠く向かいの峰の尾根の上あたりは紺碧
に染まっています。眼下はるかなカルデラ
の湖面は濃紺の絵の具を溶いたように風いで
いて、平穏な心地で湖畔の散策を楽しもうと
している私にとつては、自然なお辞儀だった
のです。

「おはようございます。」
その人が目深にかぶった

帽子のつばをちよつと上げると、漆黒の二重
のつぶらな目とおおどかな真つ白い顔が頭わ
になり、年令は不詳だが私よりずっと若い風
姿に見えました。お釜の底にある青く深い湖
の水面までも、さざめ響くような一点の曇り
もない明鏡のよう、に透き通った声の持主でし
た。私はその人のチンと風鈴の音が響いたよ
うな澄んだ声音に驚いて立ち止まってしま
いました。よく見ると、薄いチェック柄の入っ
た白地の上着を纏い、下はジーパンをはいて
いて、実にチグハグで変てこな格好だと思
いました。もし白地のスカ―トか上下とも白の
ンツルックだったらまるで白い花のようだと
か白衣の女神とか表現してもかまわない女
だと思ひました。――
「えっ、いいえ別に、ただ友人の別荘に野暮
用で転がり込んでいます。――」
私は、妙にあわてて訊問に答えるような卑
屈さで返事をしてしまいました。胸の早鐘を
打つような動悸が相手に聞こえていたのでは

ないかと心配をしたくらいです。私よりずっと年下と思しき品のある顔をした婦人は、丁寧に一礼すると微笑みを見せました。「別荘のお客様は、わたしがこのような身なりをしているているせいか、こちらから挨拶してもろくに挨拶を返されず、迷惑そうな素振りをなさる方が多いですわ。わたしが、ドレスや着物で着飾って歩いていたら、どんな仕草をなさるのかしら。おかしいですわね。」と又もや整った白い歯並びを見せて婉然と微笑まれました。この村の住人でしたら大抵が日焼けで生活染みた皮膚をしているものです。この派手に眉を描いた白樺の樹皮みたいな色合いの肌をした人は、この村人ではないと直感しました。湖面の仄かな朝靄がゆつくりと対岸の尖った峰の頂上の方へと立ち昇っていていました。「お花の手入れをして来ましたの。散歩を兼ねて身体を動かさないと健康に良くないですわ。」

「花畑をお持ちなのですか？」

「あら、畑だなんて、そんな大袈裟なしろも

のじゃないですわ。」と鮮やかに紅をひいた唇

を綻ばせました。私は、改めてまじまじと帽

子の下の婦人の顔を見つめ、若かった頃はさ

ぞ白雪姫みたいな美貌の持主だったろうと察

しました。本当に清々しい白い花のような香

りを漂わせる女人でした。

「夜明け時の空と湖は青くてきれいですね。」

「でも、お魚も泳げない悲しい湖なのです

わ。」

「どうしてですか？」

「さあ、湖水に溶けた鉱物の成分のせいだし

ょうね。」

私には、藍色で深遠な趣きの湖に悲しみの

情など浮かんで来ません。秀麗な峰々を背景

に一望できる湖面の姿をすっかり満喫してい

る私には理解できない、この婦人の心の窓か

らだけ見える悲しみの色ではないかと思いま

した。出合い頭の見知らぬ同士ではあまり長

話になりようもなく、その場はそれで軽く会
釈をして別れました。
私は、湖水の正面に聳え立つ休火山の連峰
を見渡しなが湖畔の小道をゆったりと歩き
ました。その内に、向こう岸に漂っていた乳
のよな色の薄い朝靄もすっかり霄れ上がり、
一面の青い湖となりました。小道の脇の灌木
類の芽吹きも顕著でした。
「長い冬が過ぎたんだなあ。」私が先程の婦人
の気高い容貌を思い浮かべながら、思わず独
り言をした時、それまでの道沿いの灌木の植
込みがほんの数メートル途切れて、そこら一
面に青い苗が頭をもたげているのに気が付き
ました。その付近だけ白樺の森が途切れて一
面の枯れた草原になつていました。
二
私が投宿先の柳田賢治の別荘に戻つたら、
すでに正午近くになつていました。
「ずいぶん長い散歩だったな。相変わらず元
気で羨ましいぜ。」と別荘オ―ナーの柳田がソ

フアにふんぞり返り、寝不足の爛れた赤い目
で新聞を開いていました。小太りで血色の良
い頬つぺたに丸く肉がつき、学生時代の小柄
で細身で繊細な面影はなく、恵比寿様みたい
でいかにも金満家という貫禄です。
「いやあ、夕べはすっかりご馳走になったか
らな。少しは運動して発散しないとか、体に毒
だぜ。それにしても豪勢なケーキタリングデ
ナーにボルドーのワインとは、お陰で久々に
頬つぺたが落ちる程グルメ三昧をしたよ。」
「ベトナムでは、うまい料理を食ったら、机
の脚が折れても気が付かないくらいおいしか
ったと表現するんだぜ。」
「そうか、僕みたいに『うまい』とか『おい
しい』としか言えないのも困ったもんだね。
レトリックが貧弱で悪かったね。しかし人間
年を取ると色んな知識を頭の中に詰め込んで
いるのだね。」
「いや違うよ。単に雑学でね、年寄りになっ
たら色んな知識を智慧に変えないとね。でも

俺なんか生来の凡夫で、凡夫のまま死ぬんだ
ろうね。でもね、レトリックとか言うけど口
先だけが達者な奴は困ったものだよ。舌先三
寸で金儲けを企むからな。その点、五木君の
ような一芸に秀でた者は信用が置けるよ。」
「僕程度の一芸くらいなら、世の中に掃いて
捨てるほどいるよ。」
「とんでもない。俺は五木美術部長には一目
置いていたよ。貴殿にデザインナーの腕前を存
分に發揮してもらうからには、財布の紐を緩
めて奮発するよ。」
「僕みたいなたかだかさラリーマンデザインナ
ーの経歴で良いのかい。確かに中年になつて
からは社命で工業デザインナーとして月給を貰
つて妻子を養つて来たよ。最後は、デザイン
ディレクターなんて仰々しい肩書きを貰つて
名刺交換する時は恥ずかしかったよ。でも会
社をリタイヤーした途端、創造意欲も何もか
も失せてしまい、まるで冷蔵庫の底に忘れら
れた干乾びた菜っ葉だぜ。ひよつとしたら、

もう腐っているかも知れないよ。昔で言う燃え尽き症候群っていう奴だ。」「と私は遣る瀬無く頭髪をかきむしっていました。」「オイ、五木君。そんなに落込んだじゃ男前台無しだぜ。『アラカン』から新しい魅力を發揮しなくや駄目だよ。」「アラカンは良かったなあ。鞍馬天狗の嵐勘壽郎なんて、最高のヒーローだったな。」「と私は子供の昔を懐かしみました。」「あんた、何か勘違いしているよ。アラカンとは『アラウンド還暦』の略だよ。六十代なんて、まだ演垂れ小僧って笑う年配者もいるよ。今からそんなに老け込んだじゃないよ。せっかく昔馴染みの友達の仲に戻ったんだから、あんたの天性の能力を精いっぱい發揮してくれないかね。」「そうか、毎日ボヤッと過ごして時代遅れになっちまったよ。まあ、すっかりご馳走になったから頑張るしかないよ。」「私は自嘲しつつ

少し投げ遣りな言い方をしてしまいました。
私と柳田賢治は大学時代に美術サークルで
一緒に目を皿のようにしてヌードモデルの油
絵を描いたり、伊豆や箱根に合宿して風景画
を描いた仲間でした。彼は勉強と研究を余儀
なくされる薬学部の学生でしたが、私は暢気
な商学部の学生で、四年生になつて美術部長
に祀り上げられました。彼は代々の家業の薬
品店を継ぐために、薬剤師を目指して医薬の
勉強に勤しんでいて、美術の部室にはたまに
顔を出す程度の部員でした。互いに卒業後は
年賀状のやり取りだけの付き合いでした。が、
か細い糸で結ばれたような関係を永年に渡つ
て継続しつつ今日に至つていました。
「あら、お帰りなさい。湖の辺の散歩して気
持ち良かったでしよう。さあ、お昼は私の手
料理ですよ。」と柳田夫人が愛想よくキッチン
の方からやつて来ました。テニスが好きで、
自宅のある目黒にもこここの別荘住人にもテニ
ス仲間の婦人達がいて年がら年中プレーを楽

しんでいるそうで、血色の良い薔薇色の肌の
色合をした社交的な人です。
「朝飯は抜きだったからな。」と柳田がぶつき
らぼうに言ったら、「あら、高いびきで朝寝坊
を決め込んでいらっしやったのは、どのど
なただったかしら。」と夫人から軽くなされ
ました。昼食はトーストとハムエッグとサラ
ダだけの軽いものでした。
「コイツにここに来る前、昔のアルバム帖を
探し出し学生時代の五木君の写真を見せたら
一目惚れだったよ。何しろ、あんたは白晳の
芸術家タイプ、眉秀でたる貴公子というか、
クールな色男だったからなあ。」柳田が自分の
妻ばかりか、私までを冷やかしました。夫人
は手にしたナイフとフォークを皿の上に置く
と「アラ、嫌だわ。そんな話をバラさないで！」
と両手の掌で顔面を覆って俯きました。
「それは大変な光栄だけど、もう青春の昔に
立ち返れなくて残念だね。」私は苦笑するしか
ありませんでした。

「では色んな女性と浮名を流されたのでしょ
う？」
落着きを取り戻して顔を上げた夫人は微笑ん
でいました。
「いや、このお方は生真面目の固まりで、学
校にも外にもガールフレンド一人いなかった
よな。もっとデカダンスな生き方をしたら、
人生変わっていただろうよ。」と柳田は又冷や
かしとも皮肉ともつかない言い様です。私は
社会人になってからも、女性とは縁の薄いぜ
ネコンの現場事務所などの職場を転々としま
した。
「柳田さんが、もし女だったら素敵な『ク
ルビュートイ』だったのかしら？」亭主の後
を継いだ夫人の言葉も私には冷やかに聞こ
えしました。
「えっ、クルビュートイなんて、実態は淫
乱で変態女が多いんだぜ。」と柳田がふざけた
途端、「もう止めて！」と又夫人が顔の前で手
を横に振りながら、恥らうような仕草で亭主

を制しました。柳田は妻が恥ずかしがるのを無視して私に話しかけて来ました。

「今朝は一体どの辺まで行っ来てたんだい？」

「とどころどころにあるベンチで何遍も休み休みしながら、景色を堪能したから距離的にはたいして歩いていないと思うよ。湖面は風いでいて気味が悪いほど静かだったけど、高い空を刻々と雲が動いて形を変えるので見飽きなかったよ。」

「さすがは芸術家で、言うことが違うな。」と柳田がからかうので「おい、おい、昔一緒に絵を描いた仲間だろう。実はねえ、僕は就職した途端に絵心が失せてしまっていたんだよ。」

「絵心ねえ。俺は最初からあったかなあ。」
「美術部に籍を置いていたのだから当然あつただろう！」

「いやね、白状するけどモデルのヌードが見たくて入部していただけだよ。」柳田は目尻を

下げてにやけました。

「女性の裸体を見るだけが目的だったのかね。」

「絵筆と画用紙さえ手にしていたら、女の裸を幾らでも見つめていられるからなあ。」

「全くこの人ったら、ストリップ劇場のヌードダンサーを見物する感覚で美術部員をやっていたのだわ。」夫人があきれたような顔をしました。

私は親戚のコネでゼネコンに入社できたのは幸いだったのですが、すぐにがむしやらかな受注競争の出走馬に仕立てあげられ、営業マンとして駆け回り積算と錢勘定に明け暮れた青年時代でした。ところが、三十代の中頃に本社ビル新築記念事業の一環で社章を改める公募があり、昔とった杵柄という奴で気まぐれに絵心を出して、人と自然の共生を抽象化したデザインを考え応募したら、見事に採用された。五百万円という高額賞金をゲットしたのでした。高度経済成長期にあって、会社も大

変な大盤振舞いをしたものです。私は半ば自慢げに柳田夫妻の前で述懐してみせました。その社章特賞の受賞のことがあって、私は中年近くになってから社命で専門学校の工業デザイン科を専攻することになり、その後はずっとそのゼネコンの土木建設研究所の建築装飾研究員として勤務し定年を迎えたのです。

三

やっと春を迎えた高原の午後の光が、別荘の周辺の木々の芽吹き初めた枝を柔らかに照らしていました。テラスから庭園を眺めながら、三人で食後のコーヒーを嗜んでいました。私はコーヒーの精分のせいか、昨夜来の気だるさがやっと消えて、胸がスツキリと冴えた気がしました。

「この庭の借景に湖があつたら良かったのにね。」と私は率直な感想を述べました。

「湖は北の玄関の方角ですから、お庭の方は南向きで仕方がないですわ。わたしはこのお庭に可愛らしいアトリエを建てようと計画し

ていますのよ。昨年ベルギーに旅行した時に、
ゲントという小さな街の美術館で見た『六月
の私のアトリエ』という作品にすっかり魅せ
られましたたわ。日本の六月はしとの梅雨
時ですけど、ヨーロッパの北の方は春の花が
一斉に開く百花繚乱の季節なのですよ。わた
しも、鬱蒼と青葉が茂る樹木の傍で、赤や黄
色の薔薇の花が咲き乱れるお庭の中に建った
自分の小さなアトリエを絵にしてみたいのが、
当面の夢ですわ。」と柳田夫人は明朗な口調で
した。しかし次の瞬間に亭主が、まるで汚泥
が沈殿したような濁った声音の一言を発した
ら、頬紅をさしている夫人の薔薇色の顔がみ
るみるうちに蒼褪め眉を曇らせたのです。
「これから話しをするけど、この湖には辛
い思い出もあるからね。」
「今になつて思えば、ずいぶん前に喪中葉書
を貰ったね。あの時がそうだったのかね。」私
は察しのつくことがありましたけれど、昨夜
はそのことには何も触れずに、学生時代の思

い 出 話 ば かり に 興 じ て い た の で し た 。
柳 田 か ら 、 別 荘 を 買 っ た か ら 遊 び に 来 な い
か と 誘 い の 電 話 が あ っ た 時 、 定 年 退 職 後 は 日
が な 一 日 雑 誌 類 に 目 を 通 し た り ぼ ん や り テ レ
ビ の 画 面 を 見 流 し た り 、 外 出 と 言 っ て も 精 々
犬 を 近 所 の 自 然 公 園 に 散 歩 に 連 れ 出 し て 気 晴
ら し す る 程 度 の 、 い わ ゆ る 家 で ゴ ロ ゴ ロ の 無
為 な 日 常 を 過 ご し て い た の で 、 私 は 即 座 に
嬉 々 と し て や っ て 来 た の で し た 。 深 夜 バ ス 便
を 使 い 早 朝 の 郡 山 に 降 り た ら 、 約 束 通 り 柳 田
夫 妻 が 車 で 迎 え に 来 て い ま し た 。 夫 人 と 会 う
の は 、 招 待 さ れ た 結 婚 式 の 披 露 宴 以 来 と い う
初 対 面 同 然 で し た 。 ま だ 彼 女 が 大 学 を 出 た て
で 、 薔 薇 の 花 が 香 り 立 つ よ う な 華 や か な 光 輝
に 満 ち て い た 頃 の 着 飾 っ た 花 嫁 姿 し か 覚 え て
い ま せ ん で し た の で 、 実 に 豊 麗 に 年 輪 を 重 ね
て 来 た 女 人 と の 印 象 を 受 け ま し た 。 柳 田 と は
四 十 代 の 中 頃 大 学 時 代 の 美 術 サ ー ク ル の O B
会 で 一 度 会 っ て い ま し た の で 、 別 に ど う と い
う 感 懷 も 湧 き ま せ ん で し た 。

昨日の晩餐の語らいは、久闊を叙する雰
気で和氣藹々と始まったのですが、この
がりの会話は、すぐに重苦しい話題に移
行ったのでした。
私が旧知の柳田賢治から突然別荘に誘
た時は、彼が家業のフ
アーマシーチェーン店の経営を息子に譲
余裕から、長い冬季から明けた春の湖畔
莊を気まぐれに友人に披露してみたくな
からだと思いました。
形式的に年賀状をやり取りする程度の仲
は、お互いの実生活はほとんど見えない
世の常でしょう。年々に決まり切った賀
印刷に、せいぜい形だけでも『元気です
とか』『ご無沙汰しています。』『今年も
くお願い致します。』などの走り書きが
よしとしなければならぬのが、現役の時
賀状の付き合いいろいものです。だから
同士でもとつくに還暦を通り過ぎてしま
頃になつて、初めてお互いの半生の悲喜交

の 真 実 を 知 り 合 う こ と が 往 々 に し て あ る も の
で す 。

柳 田 夫 妻 に 一 男 一 女 が あ っ た の も 知 ら な い
で い て 、 ま し て 女 の 子 が 十 九 の 乙 女 の 花 盛 り
に 他 界 し て い た と は 、 今 頃 に な っ て 話 を 聞 か
さ れ る 私 の 方 が 途 方 に 暮 れ て 言 葉 も な い 息 苦
し さ を 覚 え ま し た 。

「 そ れ は ま あ 、 今 は 昔 の こ と で ご 愁 傷 様 で し
た 。」 と 私 は 辛 う じ て 無 難 に 応 じ ま し た 。 沈 痛
な 表 情 に 豹 変 し た 夫 妻 を 慰 め る 適 切 な 科 白 は
ほ か に あ っ た か も 知 れ ま せ ん が 、 長 い 歳 月 を
経 た 今 に な っ て 、 そ の よ う な 悲 話 を 聞 か さ れ
て も 、 咄 嗟 に 口 か ら 出 る も の で は あ り ま せ ん 。

「 あ ら 、 ご め ん な さ い 。 今 更 何 を 愚 痴 っ て い
る の か し ら 。 永 久 に 亜 希 子 が 帰 っ て 来 る わ け
が な い で す わ 。 死 ん だ 子 の 年 を 数 え る な っ て
言 う 人 も い ま す わ ね 。 で も た ま に 夢 に 現 れ る
亜 希 子 は 十 九 の 若 さ の ま ま な の よ 。 ね え 、 あ
な た 。」

柳 田 夫 人 が 、 殊 勝 に 明 る さ を 装 っ て 、 そ の

場の空気を和めようと夫の顔色を見ました。
「いいえ、お嬢さんのことを、いつも、いつ
いつまでも胸に抱いてやっていて下さい。」
私が一寸気障過ぎる科白かなと内省しながら
口にしたら、彼女の鵯色の瞳がたちまち大粒
の白い涙で潤み、あわててハンカチを当てて
「おい、美代子！とっくに過ぎた昔のことで
泣くなよ。みつともないよ。」と夫は叱りまし
たが、彼もやはりこみ上げて来るものがある
ようで、しきりに眼をしばたたかせていまし
た。
四 昭和が終わり、平成の世もだいたい半数を重ね
た年の夏だったそうです。都内の女子大生に
なっていた柳田夫妻の長女亜希子は高校時代
のテニス部の先輩にオートバイライディング
ツアーに誘われて、東北地方周遊の旅に出て
いました。双方とも親には、大学のテニス仲
間達との合宿に参加するのだと偽っていたそ

うです。ユースホステルを幾つか予約して誤
魔化し、後で内緒でキャンセルしていたよう
です。若さゆえの冒険心で、行き暮れた先々
で民宿やペンションを探して泊まる気ままな
旅を楽しんでいたのでしよう。会津若松の白
虎隊の墓地など歴史名所に長居したこと、
吾妻山麓の鄙びた村のペンションに転がり込
んだ頃は夜もだいたいぶ更けていたと聞きました。
とある湖の辺で一夜を過ごすことを余儀なく
されていたのです。柳田夫妻の娘さんは高校
時代から活発にテニス部で活躍の傍ら、文芸
にも興味が折に触れ詩作をするなど、思
春期の娘にありがちな文学少女でした。彼女
は持参していた手帳に一遍の短詩を書き残し
ていました。

みずうみ

青い空と青い湖（うみ）

白い雲と白い鳥

あなたとわたし

二人はともに鳥になり

るで鬼ヒトデの触手が伸びていました。元来
ーによる食欲な大型リゾート開発という、ま
らんでいた頃、この過疎の地にもデベロッパ
柳田によると、バブル経済がパンパンに膨
しまいました。寄る年波のせいか涙腺もゆるんで
りました。私は不覚にも慈悲心を生じて落涙しそ
うになり
な心気が丸出しの詩の出来映えは別にして、
いありさまでした。が、あどけない乙女チック
鉛筆の文字は走り書きの下書きで判読が難し
の遺品の古ぼけた手帳を見せてもらいました。
私は、夫人が大事に保管していたお嬢さん
くるりと廻って帰りました。
月影浮かぶみずうみを
夜になつたら星の中
夕陽の峰まで翔けましよう
夕べになつたら茜雲
白波立てて騒ぎましよう
岸辺で泳いで遊びましよう

がここは交通不便な辺境の地でしたが知る人がぞ知る景勝の地で、数軒ほど民宿が点在していました。そこへ開発業者の手によって湯量が豊かで良質の源泉が掘り当てられたのが切っ掛けとなり、やがて会津若松方面への道路が整備され、ペンションが次々に建ちました。もちろん高校時代のテニス部の先輩と後輩の間柄で、別々の都内の大学に進学した男の子と女の子は、そんなことに関係なく、ただ風任せのライディングツアーでこの地に辿りついていてペンションに転がり込んでいたようです。「風間洋一君が誘ったのか、亜希子の方が誘ったのか、死人に口無しで結局決着がつかないのか、」

「二人とも一緒に死んだのですから、その話はもう止めましょう。」と言合いながらも夫

の目から又もや涙があふれ出していました。

私には、若い身空の子を亡くした親の気持ち

が推し量りようもなく、黙って話の続きに耳

を傾けていました。

「当時の村役場の職員は冷淡だったね。」立入
禁止の立て札があったでしょう。そこへ入っ
ちやいけないのですよ！』の一点張りで、こ
ちらが迷惑をかけたお詫びをそこそ言う前
に、いきなりピシヤリと鞭で打たれた感じだ
ったね。」
「最後まで心配してくれたのは、駐在のおま
わりさんだったわ。その時もうだいぶご老体
でしたから、とつくに定年でいらっしやらな
いでしようにね。」しんみりとした声になつた夫
人の目に、もう涙はありませんでした。
「日によつては、かつこの暴走族の溜まり
場になつていたんだよ。」
「警察の目の届かないところは不良の巢にな
り易いですわ。でも亜希子達はそんなことは
知らないで、ただ空き地があつたから遊んで
いただけのことで、別に悪いことをしていた
のではないのですよ。」
柳田が喋ると夫人がその後を継ぎ足します。
若い二人は夕涼みに宿から出て、リゾーフト

開 発 の 造 成 地 が バ ブ ル 景 気 が 弾 け て ホ テ ル 建
設 が 沙 汰 止 み で 、 単 な る 広 場 の ま ま 放 置 さ れ
て い た の で 、 そ こ を オ ー ト バ イ で 乗 り 回 し て
遊 ん で い た よ う で す 。 当 時 目 撃 し た 通 り す が
り の 村 の 老 人 に よ る と 、 そ の 日 は 二 人 だ け だ
っ た そ う で す が 、 日 に よ っ て は 大 勢 で 狂 気 じ
み た け た た ま し い 金 属 性 の 爆 音 を 鳴 ら し 夜 中
の 湖 畔 を 駆 け 巡 る 、 会 津 若 松 近 郊 か ら 集 ま っ
て 来 る 暴 走 族 ま が い の 連 中 も 多 か っ た そ う で
す 。 村 人 の 中 に は 、 腐 肉 に た か る 銀 蠅 み た い
に や っ て 来 て 大 騒 ぎ す る 若 者 達 を 苦 々 し く 思
っ て い た 者 も 大 勢 い た で し ょ う 。
一 月 明 り の あ る 晩 だ っ た そ う で ね 、 亜 希 子 達
は ラ イ ト を 消 し て 単 車 を 乗 り 回 し 、 飛 行 機 の
ナ イ ト フ ラ イ の よ う な ス リ ル を 楽 し ん で い た
の か な あ 。」
柳 田 は 、 遠 い 日 の 出 来 事 を 推 察 す る よ う な 夢
い 目 つ き に 見 え ま し た 。 私 も 子 供 の 頃 で す が 、
夜 中 に 自 転 車 で 道 路 を 通 る 際 、 わ ざ と ラ イ ト
を 消 し て ナ イ ト フ ラ イ の ス リ ル を 擬 似 体 験 す

るような味わいをして楽しんだ覚えがあります。オートバイの後部座席の女の子が怖がりながら、カメラで撮影する男の腰に縫いつく、若さゆえの歓楽に耽る二人のライディングの光景を思い描きました。怖いと思う恐怖の感覚が、返って紙一重のところでは、遊園地にあるジェットコースターで遊ぶのと同様で、人間はつくづく変えてこな生き物だと思えます。

五 「あの石の置き方は人為的だったな。」

「もう、忘れましょう。犯人がいたって、人としての良心があつたのなら、陰で反省して、いたと信じるしかないですわ。」

「入っちゃいけないと表示があつたし、立入禁止の造成地じゃ、入った側にも非があるしな。」

オートバイに二人乗りました高校時代のテニス部の先輩風間洋一と一年後輩の柳田亜希子は、月明りのリゾートホテル建設予定の空地

を無灯火で走り戯れているうちに、不意に湖岸のそばの大きな置石に前輪を乗り上げ、その弾みで宙に浮いて運悪く湖岸の絶壁を落下したと推定されたそうです。その湖岸は開発途上のため、まだガードレールやフェンスの敷設もなく、カルデラ湖によくある数十メートルもの断崖絶壁をなしていて、オートバイが落下した先は岩礁のため、翌日村人に見つけられた時は、すでに全身打撲の遺骸となっていて、オートバイもろともあたりに飛散している。たそうです。

「駐在さんが『お嬢さんのお顔は見ない方が：』と気の毒そうな顔をしていたな。」

「ヘルメットは？」私にはちょっと口を挟みました。

「夕涼みがてらの遊びでつけていなかったろうよ。」遠い日の記憶がおもむろに蘇えって来たのか柳田の顔が又曇った気がしました。

「男の子の方の様子はどうな風だったのだろうか？」

「彼氏の方は、後頭部が砕け飛んで即死だったと思うけど、顔面だけはかすり傷程度だったよ。」

「わたし達は、亜希子のきれいな面影を傷つけたくなかったから、駐在さんの言った通りにして、お棺の中は一切見ませんでした。」と夫人も又当時を思い出したようで涙声になりました。

私は、湿っぽい室内の空気にためらいましたが、とつくに過ぎ去った昔のことだからかまわないと思い、意を決して訊いてみました。

「二人の亡骸は離ればなれに散って無惨だったろうね。」

「事故現場での駐在さんの説明では、現場検証の結果では、二人は一体のようになって落下し岩礁に激突したようで、風間君はオートバイの下で即死だったが、亜希子の体は跳ね飛ばされていて、それでも断末魔の気力で何とか彼氏の方へ這い寄ろうとした気配があったそうだよ。」

柳田の言葉で、私は彼の娘さんが虫の息な
がら一心同体のように崖下に激突しつつも、
命の末期まで愛しく慕う男の子のそばへ寄ろ
うとしたけなげな少女の気持ちを思いやりま
した。
「男の子の肉親の者とは話はついたのだろ
うね。」
「可愛い我が子がある日突如失ったのはお互
い様ですわ。表立ってトラブルはありません
でした。やり切れない悲哀感が、毎朝、毎日、
毎晩、高波のように襲って来て、元気だった
娘への追憶ばかりで過ごしました。いがみ合
う暇なんてありませんわ。」
柳田に尋ねたのに、夫人の方が答えました。
「でもな、風間氏の奥さんが、虫も殺さぬ顔
で『お嬢様の方から、わたしども息子の旅
に誘ったのでしよう？』と詰られた時は『そ
んなことは知りません。』とむかついて怒鳴り
返したい心を懸命に堪えたよ。」柳田は無然と
した顔付になっ
ていました。

「わたしもそんなことを言われて無性に腹が立ちましたわ。それでも、たくの主人と風間さんの奥様が、お互いに知らなかったけど、一緒に小学校の出と分かれ吃驚しましたのよ。」

「それに風間の主人は、君と同じ大学の出身だったじゃないか。」

「そうですけど、マンモス大学のうえ学部もキャンパスの場所も別で、しかも相手はずっと先輩で接点なんか何にもないですわ。」

これが田舎の濃密な人間関係の中にいたら、結構太い縁（えにし）の糸になるのでしょうけど、人と人との繋がりが希薄な大都会では、この程度のことは、何ら紡がれるようなものでもありません。事故の事後措置を交渉している段階で、風間夫妻と柳田夫妻にこのようにな言わば四角関係があることが判ったそうです。が、互いに世間は結構狭いものだど悟った程度だったそうです。しかしこの偶然は、示談を幾らかは滑らかにしたようです。都会に

あつても、学校の同窓意識は希薄ながらも存
在しているのです。
結局、警察はオートバイの持主の風間洋一
を、業務上過失傷害致死容疑で被疑者死亡の
書類送検とし、死亡した同乗の柳田亜希子へ
の民事賠償は穏便に示談となり、両家の遺族
に何の遺恨もわだかまりもなかったそうです。
六
「先にここに別荘を建てたのは風間さんだよ。
辛い思い出があると察しはつくけど、やはり
一人息子の終焉の地となったこの湖畔で余生
を過ごそうと選んだのだね。」
「わたし達も息子夫婦に家業のファーマシー
を譲り、時間の余裕ができて別荘でも持とう
と、思った時に、真っ先に亜希子が亡くなつた
この湖の別荘地を思いつきましたのよ。悲し
い思い出ですけど、親の考えることって一緒
なんですわ。」
柳田の言葉を継ぐように夫人がしんみりと喋
りました。柳田がこの湖畔の別荘地を購入し

た後に、管理委託の現地法人から貰った資料
の数々に目を通して、お嬢さんの事故死の一
方の当事者だった風間洋平氏が近隣に別荘を
購入していた事実が分かり、これも両家の運
命かと複雑な気持ちながら、挨拶程度のお付
き合いをしているそうです。
「去年の春、俺達がこの別荘に住みだし夏が
来て、最初の亜希子の命日のことだったな。
早速朝早く事故現場でせめてもの慰めに合掌
しようと思っかけたら、先に風間さん夫婦が来
ていたんだよ。」
「早朝のこと、あちらさんも意外な顔でご
挨拶なさったわ。何しろ真夏のことでして、
外出は朝日が昇る時分でないのと、暑くてかな
いませんわ。」
夫唱婦随とは柳田夫妻のための言葉のようで
す。夫の話の後ろを、
上手に妻が継ぎをあてるのです。考えように
よっては変てこですが理想的な夫婦仲です。
「すでに立派な夏花の花束が、湖岸のフェン

スに括り付けて、手向けてあったんだよ。」
「風間さんご夫婦が手向けたものと思い、『大
変失礼しました。花束のお代金、半分負担さ
せて頂けませんか。』と申しましたわ。」
私は、夫唱婦随の会話を黙って聞いていま
した。その花束は風間夫妻が捧げたものでは
なかった。そうで、その時は事故死した二人の
高校時代のテニス部の友人らが慰霊にやって
来て、供え置いて帰ったものだろう、と両夫
婦で推測したそうです。風間夫人によると、
彼女は前日の朝もその場所へ行つたそうです
が、まだその花束は供えてなかったそうです、
高校時代のテニス仲間が昼間に来て、冥福を
祈って去ったのだろうと考えたそうです。
風間夫人は、息子の慰霊のために村役場と
かけ合い、息子らの死亡事故現場で、すでに
散策道が敷設されていた脇の植込みを二坪ほ
ど刈り取ってもらい花壇としていたのでした。
自分が丹精込めて花を植えているから『もう
花束なんか捧げてくれなくてもいいわ。』と言

っているそうです。そもそも先年に風間夫妻が別荘地を購入した秋口、真っ先に出向いたのも、息子さんらの事故現場だったそうです。その時岸壁のフェンスに、すでに枯れ萎れた花束が、見るも無惨な格好で湖からの風に吹かれていて余計に気が萎えたそうです。すぐに、にゴミ同然になった花束の残骸を取り片付け、その足で村役場に出向き以前の事故の遺族を名乗って、息子らの慰霊のために湖岸の散策道の脇を、ほんの一端で良いから花壇にしたいと頼み込んだそうです。たまたま当時の事故を覚えていた職員がいて『県立公園だから私的な慰霊碑みたいな工作物やお地藏さんのような宗教的なものは困るけど、花壇なら結構でしょう。』と意外にも簡単に黙認のような承諾を貰ったそうです。但し、花の植え付けなど一切の管理は個人的にやるという条件付だったようです。

「風間氏の奥さんは、冬季は積雪も深くとても無理だけど、春先からは菜の花、夏はヒマ

ワリ、ダリア、それにカンナ、サルビア、秋
にはコスモス、菊の花と折々に植え替えるだ
けでなく、傍らに下草みたいに勿忘草、レン
ゲ、スミレ、タンポポ、露草、ドクダミ、野
菊などを器用に生やして、とつてもまめに花
壇の手入れをしているよ。」
柳田が感心したように言いました。
「その奥さんとは、どんな感じの人かね？」
私には、ピンと来るものがあつたので、彼に
念のため、に訊いてみました。
「そりゃ、年なりではあるけど上品なご婦人
だよ。落ち着いた物腰
で、陳腐な言い草だけど、ウグイスが味醂を
舐めたような澄み切った声音だよ。」
私は、今朝の湖岸の散策で出会った婦人が
風間夫人に間違いないと確信し、その時の様
子を柳田夫妻に伝えました。
七
「亜希子の事故死当時は頻繁に折衝したけど
主人の影にいながら、とても芯の強い感じが

したな。まあ、背格好やスタイルは並だった
が、色白の顔がなかなかの栄えのする人だ
ったよ。白い服を着ていたことが多かつたと
覚えていてるよ。頬のあたりがふっくら柔らか
そう。な品があり、昔の宮廷の女官の血筋のよ
うなものを感じたね。事故の後始末の交渉を
しているうちに、さっき言ったけど俺と同じ
目黒の小学校の卒業生と判ったんだよ。」
「あなた、女性の観察眼だけは鋭いのね。確
かに、今はもう年は隠せないけど、あの方に
その頃の片鱗は残っていますわ。」と夫人が亭
主をキツと睨む真似をして言ったので、その
日初めて三人で大笑いをしました。主人の風
間洋平氏はもともと東京の下町で鉄工所をや
っていたいたそうですが、周囲に住宅が建て込
で来て騒音問題が起き、千葉県の内房へ立ち
退きを余儀なくされたそうです。たまたま移
転先に巨大な製鉄コンビナートが出現したの
で、地の利、時の利を掴んで事業が大きく成
長したのでしょ。大きな鉄工所のオーナーナ

となり、今は柳田夫妻と同様に娘婿に経営を
任せこの地で悠々自適の余生を送っているよ
うです。但し、風間夫人には生まれ育った東
京
の地への拘りが強く、長男洋一は都内の実兄
宅に下宿させてまで都立高校に通わせたので
す。

「ところで本題だが、俺は薄幸な娘にしてしま
った亜希子へのせめてもの慰霊に、石碑を建
てたいと思っているよ。金に糸目は毛頭つけ
ないさ。本場のイタリアから大理石を持ち込
んでも良いよ。」

「碑を建てる場所は、目の下に湖が見える玄
関脇の庭が良いですわ。自分の敷地ですから
自由に使ってかまわないでしょう。」と柳田夫
人が言うように別荘地は山を切り拓いた高台
になっっています。

問題は、柳田夫妻の亜希子お嬢さんが一人
ではなく、ボーイフレンドだった風間洋一君
と共々にうら若い命を散らしたところにあっ

たのでした。
「風間さんにいささかも金銭的な負担はかけないよ。自分の資金で娘のために石碑を建て
るのだよ。でも風間さんの息子の肖像を彫り
込んだり、碑文に名前を彫り込みたいのだが、
その辺のことはこちらの勝手にはならないだ
ろう？」
「本当は、二人の事故現場に祈念の石碑を建
てて、これ以上若い人達が無謀な死に方をし
ないよう世の中に警告するような貢献をした
いですわ。」柳田夫妻の夫唱婦随の科白に耳を
傾けていたら、おのずと私の役割も見えて来
ました。私は柳田夫妻の心に突き刺さってい
る棘を抜いてやるのに、あらゆる最善の腕を
振るおうという心構えになりました。しかし
事故現場が風致地区では、県立公園という色
んな法令の縛りで、個人的な工作物は建立を
認められないのが筋です。旧友として、思い
切って柳田賢治に提案しました。
「若い人が無謀に命を粗末にしないように、

と交通安全の願いのこもった公共性があるじやないかね。やはり村役場に駄目元でも相談したらどうかね？」

「もちろん、それも考えているさ。つい先日このとだけど、東京から着いたばかりのその足で、まずは俺のこのアイデアをぶつけに風間さんを訪問したばかりだよ。」

「わたしも一緒でしたわ。奥様もいらっしやうて、四人でお喋りしましたの。」

風間氏は、時々うなずきながら黙って話を聞いていたそうです。ところが、柳田の説明を聞き終えた段階で、おっとりとも静かな風情だった風間夫人が猛烈な反発をしたそうです。

「女神のような外面で、内面は夜叉というのは、あんな女の人のことだね。」柳田が今更思ひ出したようにあきれた顔をしました。

「インドのシバ神の奥方のカーリー女神様つて、ご亭主のシバ神を踏みつけて紅い舌を出して笑った方だそうですね。あの奥様、そん

な お方じやないかしら？ わたし、その妖怪の
よ うな 迫力に負けて、ただただ黙っ
ていまし
たわ。」

「あの庭に赤い祠があつたなあ。」

「お稲荷さんですよ。きつと奥様に狐が憑い
たのだわ。獲物に狙いをつけた狐みたい
に目が
が爛々と赤く光つて怖かつたわ。折角の寿命
が縮まる思いでしたわ。普段は大きな黒い瞳
をなさつているのによ。」

彼女の言い草に、又三人で哄笑しました。

「訪問した日が悪かつたのじゃないかね。赤
口だったたら昼間は凶で鬼が出るという
からね。

大安吉日を選んでいたらどうだったろう
か？」

私も少々悪乗りをして付け加えました。

「さてね。そんなことは、あんまり気にして
生活してないからね。」

「わたしも結婚式の大安とか、お葬式の友引
くらいしか知らないわ。」と夫妻して無然と顔
を見合わせていました。

「僕は建設会社にいたからね。いわゆる縁起を担ぐのだよ。建築作業に事故はつき物で、事務所には神棚があり、神頼みは仕事の一部だったよ。」と私はしたり顔をしていたことでしよう。

風間夫人の言い分は、息子の洋一は自分達の心の中心に生きていて、死んでも人なのだから勝手なことをしないで下さい、それに息子達の慰霊は自分がすでに事故現場に花を咲かせてやっていきます、と凄惨い剣幕で息巻いて怒ったそうです。柳田夫人は面白半分に大袈裟な言い様をしたのでしようが、その時の風間夫人は眉目だけでなく、口元までが裂けるように吊り上って、まるで般若のお面も顔負けに見えたそうです。そこそ背上背もあり、あごがしゃくれ睫毛の長い目力のある気の強そうな柳田夫人を黙らせるとは、今朝方湖岸で出会ったばかりの品の良い女人が風間夫人だったとは、にわかには信じ難いことでした。私は風間夫人を誇り高い女性に違いないと思ひ

ましました。出典は忘れましたがものの本で、気高く知的な女性ほど、心を裏切られると突如夜叉に変身し、その恨みや報復は苛烈を極める、とあったのを思い浮かべました。私は、柳田から頼まれたこの石碑を製作するのを、気楽に引き受ける訳にはいかないと弱気になっ
てしまいい、世の中は変えてここに満ちていると思
いました。――きつと風間の奥さんは、主客転倒だと怒つ
たんだよ。大事な工場の跡取りの一人息子を
亡くしたのは、自分達の方で、石碑を建てる
権利は風間家にあるのだと主張したんだよ。
建てるなら風間家の敷地内にするのが本筋で
しょう、という訳だろうね。」
日本人の社会に延々と根深い、何かと男系優
先の思想が風間夫人の
反発の背景にある、と柳田は解説しました。
「そこで権利という言葉が出るとは予想外で
したわ。こちらだって綺麗で可愛い盛りの娘
を失っているのですから、ここ敷地内に慰

霊碑を建てる権利はありますわよ。本当に腹
が立ちますのよ。あの奥様がテニスをなさる
のでしたら、グーの音も出ない程やつつけて
やりますわ。」柳田夫人は男っぽい性格の女性
のようです。

「六十婆ア同士の喧嘩なんてみつともない
よ。」と柳田がニヤニヤと笑いながら、たしな
めるような口振りをしますと、夫人は色をな
して「まあ！まだ六十まではずいぶん道のり
が残っています。婆アじゃありませんことよ。
女盛りと言い直して下さい！それにレディは
喧嘩なんて端ない真似をしません。わたしは
何か女同士の勝負であの奥様をギャフンと言
わせてやりたいだけよ。」とまくし立てたので
した。

「そうかい。四捨五入して悪かったね。」と柳
田はまだニヤニヤと呟いていました。

「お宅も慰霊碑でも供養塔でも好きなように
建てて下さい。うちも好きなように建てます
からで済む問題と違うのかい？」

私は話を原点に戻して柳田に問い質してみま
した。
「あの奥さんの雰囲気では、風間洋一の名前
や肖像は使うな、という条件で建てることに
なるだろうね。」
「それって寂しいことではありませんか。仲
良しだった亜希子と洋一さんを一緒に慰霊し
てあげたいですわ。」
柳田夫人が涙声で夫の後を継ぎました。
私は、ややこしい問題におのれの首を突っ
込んでいるのが自覚できました。しかし自分
の首根っこにギロチンの刃が落下して来るは
ずもないので、男気を出して何とか柳田夫妻
の願いを叶えてやりたい決心が固まりました。
私自身も物好きで変てこな人間です。結局、
その日の風間夫妻との話し合いは物別れに終
わって、今日に至っていることが分かりまし
た。
八

翌日の朝まだき、私は又黙って柳田の別荘

の坂を降り、湖岸の白樺の森の脇の散策道を歩きました。すぐに小鳥の声がにぎやかになりました。東の白樺の森の梢の上の雲が仄かに紅く、明け初めて夜明けがやって来ました。やがて小道の脇の灌木が途切れて、苗が伸び始めたばかりの小さな花壇がありました。中空には雲一つなく向かいの休火山の頂きが朝日に照らされ、湖水も波一つないほど静まり返っていました。私は昨日の朝の婦人が現れるのを心待ちにしてベンチにじっと座っていました。お節介になるのではとの反省もありましたが、今更引き返さない道だとは思いました。やがて別荘の方角からやって来る人影を目にしました。た。私は殊更のように湖面の遠くへ視線をや

り、人影を無視していました。――あら、おはようございます。このインクを流したような朝方の湖水みたい

に真っ青に澄み切った声でした。私は権謀術数に思いを巡らせ、相手が先に声をかけて来るのを待っていたのです。

「おはようございます。今日も良い天気です
ね。」
つば広帽子を目深く被った婦人は、シャベ
ルを手にしており、昨日と同じ格好でした。
「長い冬がやっと明けたのですよ。わたしの
ような別荘暮らしの者は、良い時季だけやっ
て来るお調子者で、村の方々にお気の毒です
わ。」
「いいえ、村の過疎化防止に貢献しています
よ。」
婦人は黙ってうなずくと、花壇の縁にしゃが
み込みました。私もそばに寄り、しゃがみ込
み視線を同じ位置にしました。
「これから何が咲くのですか？」
「菜の花ですわ。役場の方とお約束しました
から、これから晩秋まで何かお花を咲かせ続
けるのです。本当はお野菜か何か収穫できる
ものにして食卓に載せたいくらいですわ。」と
整った白い歯並びを光らせ上品に微笑まし
た。

「花を植えるには、何か理由があるのでしょうか？」
私が突っ込んだ質問をしたら、さすがに風
間夫人は一気に悟ったようにで顔色が変わりま
した。
「柳田様宅のお客様ですか？」
私はこのような事態になるのは織り込み済
みなもので、やけに落ち着いて答えました。
「えっ、あなたは超能力の持主ですね。そう
なんですけど、どうしてすぐに分かるんです
か？」と素っ惚けてみました。
「もしも偶然でしたら、不思議なご縁ですこ
と！」と彼女も負けずと落ち着いてみせまし
た。
「お互いに腹の探り合いのようなへんてこ
りんなことをする羽目になったものです。
」柳田様のご夫妻は無礼ですわ。この前なん
の前触れもなく突然盛装でお見えになられ、
奥様なんか大きなパールネックレスを首に、
目映いばかりのダイヤモンドを指にキラキラ
嵌めて何が嬉しくていらっしやったのかしら。

ずいぶん尊大なお方になられたとお見受け致
しましたわ。」

私はややこしいことになるのは元より覚悟
のことで、両家の夫妻の仲を上手に取り持ち、
然るべき所に軟着陸させるのが上策だと悟つ
ていました。

「柳田の主人の方と僕は、いわば学友です。
実は彼の招待で滞在しているのです。さつき
のお話ですけど、柳田君と奥さんは、東京か
ら別荘に着いたその足で真っ先にあなた様宅
へご挨拶に伺ったのと違いますか？」

「やはり、そうでいらつしやったのですか。
わたしどもの事情をご承知での暁の待伏せで
いらつしやったのですか？」

風間夫人の上品といえば上品な言い振りかも
知れませんが、丁寧な言葉遣いと全く裏腹の、
花の葉陰に隠れた棘にザツクリと引っ搔かれ
たような痛みを、胸膜にたつぷりと感じまし
た。

「待伏せとおっしゃるのですか？僕は足を休

めていただけですよ。ここは湖一番の絶景ポイントだし、早朝散歩は健康に一番でしょう。違いますか！」

私は故意に不愉快な顔をつくりました。

「いいえ、戯言のつもりですわ。悪意で言つたわけじゃありませんからごめんなさい。」意外なことに風間夫人はあつさりと非を認めるように謝ったのです。何か裏があるかも知れないと思いましたが、

私はこれで話の主導権を取れたように内心で『しめた』と思いました。

「さっきの話の続きになりますけど、柳田君達は別荘に着いて早々に、風間様を表敬訪問したのだと存じます。」

相手の丁寧な口調に自然に波長が合ったように、私も馬鹿丁寧な言葉遣いをしていて真に変てこな気分になりました。

「まあ、やっぱわたしどもの名前まで、とつくにご存知でいらっしゃったのですわね。」

「実は柳田君から慰霊碑の設計を頼まれたの

です。」

「この前、柳田様がお見えになつて、いきなりそんな話をお伺いしています。わたしも若くしてこの世から消え去つた子供の親として、

同じ悲しみを死ぬまで背負つて行くのですよ。」

「お気持ちは痛いほど分かります。」

「本当ですか？この悲しみは体験者でないと分かりませんわ。」

「いや、僕はこれでも芸術家の端くれで、慈悲心などの感性や想像力は並みの人間の数倍はあると自負しています。発言に不快を思し召されたのなら平にご容赦下さい。」

私は心身の動揺を隠し、ポーカーフェイスの澄まし顔で、ちよつと時代がかった言い訳をしていました。

九 私は、この人とは片言隻語、一句たりとも

気をつけて口にしよう、と警戒しました。朝日がだいぶ高く昇り、向かいの峨峨とした山

容が湖面に逆さまに映っていました。この湖
水は鉾物が溶け込んでいて魚も住めず、明る
く日が照るとコバルトブルーに輝くのです。
ここの山々は、郷土研究家の資料によると有
史以前には活発に噴火を繰り返していたそう
ですが、幾つもの尖った峰々が連なつて外輪
山をなし、今は死んだように静寂な山脈です。
「主人とわたしで、この別荘地の下見に来
た時、真っ先にこの息子の事故現場に来てみ
ました。そこで目にしたのは干乾びてしまつ
た花束でしたわ。雨風に晒され見るも哀れで、
すぐに取り片付けましたわ。息子の昔の友達
がお参りしてくれたものだと思ひました。お
聞きかと存知ますが、それでわたしはここ
にお花を植えようと思ひついたのですわ。」
「ええ、そのことは柳田君から聞きました。
ご存知とは思ひますが、柳田君達もお嬢さん
の命日を選んでここにやつて来たなら、すで
に真新しい花束が供えてあり、最初は風間さん
が捧げたものと勘違いしたのでしたね。」

「そうでしたわ。それでお話をしているうちに、高校時代のテニスクラブの有志の人達がお参りにいらっしゃっているのではないかと
いう結論になったのでしたわ。親のわたしどもは事故の後始末以来、辛い思いを避けてそれ
れまで一度もここを訪れていなかったのです
から薄情なことですわ。」
「柳田君夫妻も同じ思いで慰霊碑の建立を思
い付いたのだと言っていました。僕らの時代
はちょうどこの国の高度経済成長期と重なり、
皆が馬車馬のように仕事一筋で過去を振り向
く余裕を失っていたように思うのです。」
「確かに前しか見ていませんでしたわ。仕事
に追いかけるられると言いますか、目標を追い
かけると言いますか、何とも忙しい生活をし
ていましたたわ。まあ、こんなことをいくら愚
痴つても、言い訳にしかありませんわ。」
やっと夫人の表情も和んで来ました。
「一年たった今になって分かるんですが、余
とか余暇とかは自分で率先して作れば良かつ

たと反省しています。黙っていたら仕事とい
う川の流れに浮かんで流されるだけで、誰も
他人の余暇なんかを作ってくれるはずがあり
ませんよね。」
私も自分の若い時分を思い描きながら省みる
ことしきりの心境でした。
「主人は表の仕事一筋に打ち込んでいました
けれども、私は帳簿で売掛金や買掛金の心配ば
かりして、職工さん達のお給料をきちんと支
払えるように銀行に出入りして、大変な資金
繰りの苦勞をしましたのよ。」風間夫人も経営
者の奥方として、なかなかの遣り繰り上手だ
ったようでした。その後、鉄鋼不況の嵐が何
度も日本経済を襲ったのに、自営の鉄工所を
ここまで立派に維持して来られたのは、この
夫人の底力があってこそだ、と私は勝手に考
えていました。
風間夫人は別荘を建てて以後、息子ら二人
の慰霊のため事故現場に花壇を設けさせて貰
い、積雪の厳冬期は不可能だが春、夏、秋の

三季は折々に花々で飾っていると話してくれ
ました。その後、息子の母校に行って同窓会事務局
の人を煩わせて手を尽くして調べたのですが、
誰がここに花束を手向けたのか結局分かりま
せんでしたわ。」
「柳田君も、八方手を尽くして花束を捧げて
くれた者を調べたそうですけど、皆目見当が
ついてないようです。」
「いつの間にか置いてあるのですわ。命日の
前日から、刑事さんのように主人と張り込ん
でいるのですよ。」と風間夫人は紅い唇を綻ば
せ白い歯を見せました。
湖が晴天の朝の陽光の直射を浴びる直前の
瞬時のこと、この深い紺色の湖面はまるで死
のような静けさを漲らせているように見えま
した。
「ご息達に不慮の事故がなかったら、風間
さんの家と柳田君の家は親戚の間柄になつた
かも知れませんね。」

「そうかも知れません。でも人生に『たら』と『れば』を言えば、きりがありませんわ。柳田様の奥様と親戚なんて真つ平御免ですわ。」

風間夫人は顔を少し顰めたように見えました。

どうして両夫人の間柄がここまでこじれて陰悪なのか、私には理解不能な部分が大きく思われしました。柳田夫人は聡明で勝気な感じはしますが、こんなひどい言われようをする恨みを、いつ風間夫人からかつたのでしょうか。

風間夫人も慈母という言葉がぴつたりと似合った感じの人なのに、どうしてこんなに柳田夫人を心底から罵倒するのか、私の頭の中はすっかり混乱していました。

「柳田様は、お嬢さんだけの慰霊の石碑を建てれば良いのです。うちの息子のことは切り離せば良いことだと思いますせんか？」

「えっ、どうですか？」

「だってお嬢さんへの思いで石碑を建てるのでしょ。わたしどもの息子への哀悼の心が

ございませんわ。それだけではありません。
息子の洋一は風間家の長男で跡取りだったの
です。他家（よそ）様で祀られる身分と違いま
すのよ。このことはお分かり頂けるでしょ
う。」

「ええ、まあ：。」

私は夫人の剣幕に咂然として言葉を詰まらせ
てしまいました。

「他にもまだ言いたいことがありますわ。柳
田様は事故の後始末が済んでしまつたら、そ
の後一度も息子の墓前にお参りさえなさつて
ないのですよ。わたしは、たくは別にしてい
人でお嬢さんのお墓参りをしていましたわ。」

やつと私に風間夫人の内心の不服が、湖面
に映る尖がつた峰々の姿のように見えて来ま
した。この辺りの根っ子の治療からしないと、
両家の関係改善は無理だと分かつただけでも、
今朝の散歩は収穫がありました。仮に風間氏
の方から息子らの慰霊碑を建てる話を持ちか
けていたら、ことはもつとスムーズに進捗し

たようにも思えました。しかし男女同権なんて言われて何十年も経つのに、こんな男系優先の潜在意識を明白に口にされ、それが実社会に脈々と生きている人間模様を実感させられて、少々変てこなものを覚えめました。私はまだこれから散歩を続ける旨を告げて、そそくさとその場を離れました。

十 その日は早めに柳田の別荘に戻りました。別荘の窓から見える湖の景色は、四角い窓を額縁に見立てると、そのまま一枚の風景画でしただけならば、彼らには絶好の別荘地だったでがなければ、彼らには絶好の別荘地だったでしように。

「ブランチをご用意しておきましたわ。わたし達も朝寝坊を楽しんで、さつき食事を済ませたばかりですよ。」と柳田夫人がほんのりと頬紅を塗り、口唇に鮮やかな紅のラインを引いた化粧顔で、明るく話しかけてきました。

濃く描いた眉とアイラインに、俗言で諸国諸

大名は弓矢で殺す、糸屋の娘は目で殺す、と
伝わるような、この女人の若い時分の目力の
魅力に柳田はコロッと参ったのかも知れませ
ん。彼女の鼻筋の通った面長な容貌に柳田は
惚れたのでしよう。かつてヨロツパの王家
の美人画が好みだった柳田の心を見事に射止
めた夫人の顔だと思いました。
「散歩で風間夫人に会ったよ。」私は開口一番
彼らに報告しました。
「僕の考えを言うよ。お嬢さんの石碑を建て
るには大きなハドルが二つあるよ。」
私は、風間夫妻は跡取りの息子を亡くした
のに、相方のお嬢さんの敷地内に二人の慰霊
碑が建つというところに、寂然としないこだわ
りがあること、もう一つは柳田夫人の面前で
は躊躇しました。が、事実らしいので敢えて言
いました。
「風間氏の奥さんは、毎年かどうかは聞かな
かったけど、お嬢さんの命日には、以前から
墓前にお参りしているそうだよ。」

「えっ、それは初耳だな。確か三回忌まではお互いの寺に出向いて花や線香を手向けたはずだがね。俺の勘違いかな。」

「それは吃驚ですわ。わたし達って無精者で、特に信心深い質（たち）ではありませんから、うつかりしていましたわ。二人して商売にかまけてよそ様のお墓参りまでは気がつきませんでした。」柳田夫人はすっかり困惑した表情になったていました。

「あんたの言う二つ目のハードルは、これまでの非礼をお詫びすれば何とか解決の道筋は見えようけど、うちの娘だけの慰霊碑を建ててるって、ちよつと淋しくないかい。風間さんは、息子が死んだのだから、自分の敷地内に二人の慰霊碑を建てるのが筋だというのかな？男系優先の思想みたいなものが、まだ社会に根深いんだなあ。」柳田は困り果てた情けない顔になりました。

私は、ともかく偶然ですけど風間夫人と顔見知りになったのだから、両家の緩衝物のよ

うになつて仲を取り持つしかないと考えまし
た。ここは、サラリーマンで営業経験のある
私の方が、柳田よりも一日の長があると読み
ました。
「柳田君、道は幾つもあるよ。例えば、あん
たと風間の主人だけが男同士で話し合つてみ
ること、又は奥さんが女同士で風間夫人と会
つてみる、それとも僕を入れて両夫婦で会つ
てみるなんてどうだい。」
「わたし一人で風間の奥さんに会うなんて嫌
ですわ。お話をしているうちに、奥さんの額
の脇からニョキニョキと角が生えて来るみた
いで怖いですわ。」と早くも柳田夫人が尻尾を
巻きました。柳田は「あれこれ男同士で話し
合つて決着がつく時代じゃないよ。」と言つて、
結局近いうちに私を入れて両家で考えをぶつ
け合おうという結論になりました。『案ずるよ
り産むが易し』の古人の知恵に縋る方に、私
も異存はありません。
「何かうまい手があるかい？ 作戦を練つてこ

ちらのペースでことを運びたいよ。是非そう
しようよ。」
「しかし、大切な子供を失ったという点では
お互いに対等ですわ。まして、あちらさんは
大事な跡取り息子を亡くしたと主張している
のでしよう。こちらのペースだけで進めるっ
て、無理ですわよ。あなた！」
夫の言葉を継いだ柳田夫人は、ますます弱気
になっっていました。
私は、その場の息苦しさを変えるために話題
を唐突に変えました。
「このあたりに、蝶々や蜻蛉が飛び回るのは
いつ頃だろうか？」
「一年によつて違うだろうが、大体梅雨明けの
七月の中頃じゃないか。標高が千メートル近
い高原だから平地とは様子が違うよ。去年の
夏の終わりに蜻蛉のアカカネの大群に出く
わしたよ。」
「この蜻蛉は帽子や伸ばした指先に平気で
止まるのよ。人を怖がることを知らなくて可

愛らしいわ。」

「ずっと奥の縦の樹林に入ると、もうすぐ春

蟬が鳴きだすよ。蝦夷蟬の仲間だろうが、ガ

ラガラジージー鳴いて声は良くないがね。」

夫人の愁い顔も和やかになったところで、私

は自分のアイディアを開陳することにした。

「ここにいつまで滞在するのかね？」私は念

のため柳田に確かめました。

「せっかく来たから、入梅まではここにいろ

予定だがね。五月の高原暮らしは爽快だよ。」

「村の有志の人達が移植された水芭蕉の花が、

ここ数年の努力でやつと咲き始めたので楽し

みね。景色を眺めながらのハイキングも身体

に良いわね。」

「山の湿地に入るとエンレイソウの群落があ

るそうだよ。見たことないが小さな紅の花だそ

うだよ。」

「素敵だよ。行って見ましようよ。どんな字

を書くのかしら。」

「齢を延ばす草と書くのさ。寿命が伸びるよ

うで縁起が良いね。」

私は、夫妻の会話が途切れた際に話を切り出した。――

「今年のお嬢さんの命日にお墓に参るのは当然として、風間家の息子さんの墓前にも花と線香を手向けて出直したらどうかね？」

「そうか、襟を正して真摯に石碑のことを持ち出すのだね。」

「それがよろしいですわ。こちらにも負い目なくお話できますわよ。」

柳田夫妻は意外とあっさり私の提案を受け入れてくれました。一つ目のハ―ドルについて、話は、話の進展具合によって柔軟に交渉する以外、私にもこれと言った妙案は浮かばず、先送りすることになりました。

私は少し眠気を催したので、夫妻に断って自分にあてがわれた二階の部屋に戻って横になろうと思いましたが、ここは天候や時刻によつて色を変えるのでした。午睡の前にちよつと部屋の窓から、翡翠色に変わった春の

午後の湖面に顔を向けていると、
『風が立ち、浪が騒ぎ、無限の前に腕を振る。
その間、小さな紅（くれない）の花が見えはす
るが、それもやがては潰されてしまふ。』
と若き日に愛唱した中原中也の詩の一節を、
私は何気なく口ずさんでいました。夭逝した
青年と乙女は無限の彼方に去って戻らないで
しょう。残された遺族が小さな紅の火花を散
らし合っている事態の周辺に私自身も立って
いるのをひしひしと覚えめました。私が次の機
会にこの湖畔の別荘に来る日は夏雲の下にな
るだろう。きつと風間夫人が植えたカンナの花
が紅蓮の炎のように燃えて咲いているだろう
う。床に横臥し、あれこれうたかたのようにに
思案しているうちに、いつしか眠りに陥ちて
いました。私の眠りは浅かったよう、魚も
住めない無機質の青い水の中を無限に漂って
いるような物悲しい夢をずっと見続けている
ような不思議な感覚の午睡でした。

季節は梅雨の真っ最中でした。私は柳田賢治の別荘から戻って一ヶ月も経ってしまいました。が、別段何の用事もなく一日一日ブラブラと過ごしているにもかかわらず、頼まれた石碑のアイディアの一つも浮かばず、鬱々と暮らしている。家内は、私を無視して勝手に粗大ゴミでしよ。のアイディアの一つも浮かばず、鬱々と暮らしている。仲間の女友達らと好き放題に出かけまわっている。うじて犬の散歩のお供ぐらいが仕事と言えましょう。犬です。犬に歩くのに付き合っているありさまです。気分転換に柳田夫妻に会えば、気が変わり何か気の利いたアイデアの一つや二つは浮かび上がるだろうと考えました。それに、アルバム帖を見せてもらって柳田亜希子と風間洋一の顔のスケッチをしておく必要もありまし

た。梅雨時は東京の家に帰っているはずだから電話をしてみました。もつと早く連絡するのにはやぶさかではなかったのです、石碑に關して何のアイデアもなく柳田に会うのも気が引けて遠慮していたです。どうしようもなくなつて、進退窮まつてからようやく動くいてみるなんて、子供の頃から変わらない私の変てこな人間性を改めて自覚しました。思い起こしてみれば、小学校、中学校、高校、大学といずれの時代も宿題なんか翌朝学校に行つてから手を付けてみたり、友達の手紙を写させてもらつたり、試験などは前夜になつていわゆる一夜漬けの勉強をしたり、夏休みや冬休みの宿題も最後の一週間くらいから一心不乱で取り組み、親から笑われたり叱られたりの懲りない性分でした。思い出しませんでした。大学の卒業論文なんて締め切りの翌日に持参して、教授から留年を覚悟しておけ、と大目玉を喰らい脅かされたものです。すみません。就職先が決まっていますのでよろしく

お願いします。」と先生に神妙な顔をつくり、
卑屈にペコペコ頭をさげてみっともない格好
でした。

柳田は東京の目黒は柿の木坂という、いわ
ば山手の高級住宅地に
住んでいます。私も息子夫婦と二世帯暮らし
ですが、柳田も二階建ての洋館で上を自分達
夫婦が使い、地下室を含む下の階で息子夫婦
が暮らしている。と聞いていました。普段の家
の出入りは庭から外階段を使っているようにで
す。

久々に梅雨の晴れ間の日となった朝、目黒
の柳田宅に電話すると本人が出て、今日あた
り自分の方から電話をかけようと思ってい
たと少し恐縮した口振りでした。

「昼飯を一緒にしようぜ。東横線の『都立大
学』で降りたら電話をくれないか。柿の木坂
の交番の前まで出迎えに出るからな。」

「住所は分かっているから出迎えには及ばな

「いよ。」
「いや、結構奥まった所なものでね、それに
一階は息子達が使っているから玄関を勝手に
開けられないよ。」と柳田は言い訳をしました。
柳田が電話で指示した通り、お昼前に『都
立大学駅』から連絡を入れたら、都立大学駅
前交番の前を通って目黒通りを突っ切り、だ
んだら坂道を上って来た所の交差点にある柿
の木坂交番の前で待っているよ。」とくどくど
指図されました。
坂の入口あたりで商店街は切れて、所どこ
ろの民家の植込みに紫陽花が盛りでした。紫
色、青色、その中間色、或いはアジサイ色と
しか言い様のない微妙な色合いと様々に咲い
ています。花を目の保養に歩いていたら、意
外と早く交番前の交差点で待っている柳田の
姿が目に入りました。車の流れは途切れてい
ましたがお巡りさんがきちんとして見張
りをしていたので、信号が赤から青に変わる
のを律儀に待って柳田のいる場所に渡りまし

た。

「わざわざお出迎えを受けて申し訳ないよ。」

「珍しく今日は青空が出たね。これは駒沢通り

りだけど、一步脇道に入ると道を聞く人も歩

いてないしね。それに家を訊いたって、この

あたりではお互いに名前も知らないよ。犬に

吠えられても気の毒だから、こうして迎えに

来ただけさ。」

柳田は久しぶりに会ったせいか機嫌よく話し

かけてきました。駒沢通りを学芸大学駅方向

に二、三分向かい、左側の路地へ案内されま

した。車の往来のある通りと感じが一変し、

あたりは樹木の多いお屋敷町でひっそりと静

まり返っていました。表通りから百メートル

入っただけで、こんなに喧騒と無縁な地域に

なるとは改めて驚きました。

「『都立大学』って、もうここにはないのだろ

う。」

「そうだよ。だいぶ前に八王子の郊外にキャ

ンパスを移転したね。それに名称も何年か前

に『首都大学東京』って変更しているよ。」
「もうキャンパスもないのに、東急東横線の
駅名だけが、『都立大学』って変てこだな。」
「隣の駅の『学芸大学』も、駅名だけでご本
尊の東京学芸大学はとつくの昔に郊外に引つ
越しているさ。」と他愛ない会話をしているう
ちに柳田の邸宅に着きました。芝の手入れの
行き届いた洋式庭園で近隣と競いあっている
ような見栄えでした。
「この辺りは有名人も多く住んでいるのだろ
う。」
「そうだけど、みんな車で動くから顔を見た
ことはないよ。」
柳田に先導されて門扉から庭の裏手に回り、
外階段から室内に入りました。
十二
広いリビングルームに通されましたが、人
つ子一人いる気配がありません。
「奥方様はお出かけかい？」
私は夫人の姿がないので聞いてみました。

「もう帰って来ると思うよ。あいつ、今朝、五木君が来ると分かったら、いそいそと美容院におめかしに出かけたよ。君に気があるみたいだよ。」と柳田は無邪気に私を冷やかしました。「そんなことはないさ。ただ客が突然来るので、女性の条件反射で髪の手入れに行つたのだよ。女ってそんなもんだろう？」「私は満更でもない。なく目尻を下げていたかも知れませんが、腹の中と違う否定文をあわてて口にしました。」「腹減つたろう。家内が帰って来たら、近くの中華飯店に行こうよ。ちよつと待ってくれないか。タバコは吸わないよな。」

柳田は私の前のソファに座りました。テーブルにはステンドグラスのように豪華な光彩を放つ灰皿が載っていました。

「だいぶ前に止めたよ。もともと営業の付き合いで、相手につられて吸っていただけだな。タバコが旨いなんて一度も思つたことはない。ね。今はただ煙たいだけで、本当に嫌な臭い

「だなぁ。」

「俺は薬剤師だから、若い時からタバコの有害性は知っていたよ。何しろ五千種類もの有害物質を体内に吸い込むなんて狂気の沙汰だね。生まれてこの方一本たりとも吸ったことはないね。ただね、お客さんに、たまにタバコの味がいるよ。こっちが吸わないと分かると遠慮する者も増えた気がするな。」と柳田は灰皿を手に取り顔を歪めて複雑な表情を作りました。

「元はと言えば、喫煙は西インド諸島の土民の嗜好で、コロंबスが本国に持ち帰ったもののだったね。」

私は常識的な知識を彼に確認しました。

「そうなんだ。それが今や全世界を席卷し、人類全体の健康問題となったため、国連主導で禁煙運動が拡大しているのは承知の通りさ。」

「でも何で人間はタバコを吸うのだろう？」

私は薬剤師の彼に質問してみました。

「さあね、俺に言わせると頭の中が空っぽだからさ。棺桶に片足突っ込んだみたいな年寄りだが、古いぼれてヨボヨボ道を歩きながらタバコの煙を吐いて、汚い臭いを付近にばら撒いているのを見たら、怒りを乗り越えて哀れさを覚えるから変てこなもんだよ。」と柳田の目に諦観のような光りがありました。僕も頭の中が空っぽだよ。でもタバコは嫌いだよ。」と私は彼をからかうように反論しました。そうだね。絵描きや小説家なんか、よくタバコを吸うみたいだよ。タバコの煙の毒が絵心、歌心なんかを刺激するんだよ。あんなも研究所で、同僚の吐くタバコの伏流煙を散々吸ったのじゃないか？それが刺激でデザイナとしてのアイデアを掴んでいたのと違うかい。」「と、いう柳田の言い草に私は苦笑するしかありませんでした。」「百害あって一利なしって、昔から言っている。他人のことでだからどうでも良いけど、

公園で若い母親が乳母車のそばにしゃがみ、
赤ん坊の顔のそばでタバコの煙を吐いていた
のを見たよ。無知つていうか、阿呆つていう
か、どうしようもないね。」私も以前に見た
苦々しい光景を思い出しました。
「若い女が街中を歩行喫煙つていう、いわゆ
るくわえタバコで歩くのをよく見かけるよう
になつたが、何とかならんもんかね。そんな
女は大方が厚化粧で、狸か猿みたいな間抜け
面をしてているね。妊娠していたらお腹の胎児
に凄く悪いんだぜ。それでいて道端にぽいと
吸殻を棄てて、赤信号でも無視して道を渡つ
た女も見たことあるし頭も性根も悪いよ。」
「吐き出した煙で周囲の者の健康まで害する
のだから、タバコを吸う奴は場所をわきまえ
て欲しいのだが、もともと鈍感な人間が多い
ようだから平気でどこでも喫煙しようとし、
全く迷惑千万だね。」
「薬剤師の立場で言うのだけど、何が悲しく
て汚い煙をわざわざ吸うんだろうね。折角の

朝の新鮮な空気を汚しながら駅に向かう通勤客なんて変てこで漫画にもならないよ。」と彼も憤懣やるかたない形相をし、私とのタバコ談義はボルテージが上がりました。

「そうだ、風間の旦那さんも喫煙者だったよ。あんたが別荘から帰ってから急に病気になつてな、あの奥さんに頼まれて会津若松の病院まで何度か送り迎えしてあげたが、診療の合間に奥さんの目を盗んで、外へ出て吸うのだからね。」

柳田はあきれたような口振りでした。

「それは相当なヘビースモーカーだね。喫煙と発病は関係あるのと違うか？」

「さあね。でも病気の治療に良くないよな。」

私達は禁煙者同士だから、タバコの悪口で盛り上がりがつていました。

「ようこそ、いらっしやいませ。お賑やかで何の話題かしら？ ドアの外まで聞こえましたわ。」

そこへ柳田夫人が帰宅しました。季節柄、水

玉模様のワンピース姿が似合っていました。
薔薇色の頬を輝かせ、程よく七三に分けカー
ルさせた長い髪から芳香が漂って来ました。
彼女の腰の位置の高さと伸びやかな肢体を久
し振りに目にして、私は若干ながら胸の動悸
が高鳴るのを覚えました。
「久しぶりですね。お邪魔しています。」
私は現役の営業マン時代の癖が出たのか、無
意識に立ち上がって深々と腰を折っていまし
た。
「まあ、そんな大袈裟なこととはなさらない
で！」
夫人は手の平を差し伸べて着席を促す仕草を
しました。首を垂れた時、視野に入った夫人
の紅いマニキュアの爪先が、一瞬小さな紅の
花に見えました。頭を上げた時に、私の視界
に入ったこの家の庭の芝生が青く目に沁みま
したので、「お庭の手入れ、大変ですね。」と
愛想を言ってみました。
「いいえ、一階は庭も含めてお嫁さんの仕事

ですわ。でも実際は仕事と保育もあり、忙しいから造園業者に丸投げみたいですよ。」と彼女が年令不詳の婉然たる微笑を返しました。

「飯に行こうよ。」柳田が立ち上がり、つられるように私もソファから立ちました。

「ああ、そうだよ。美容院でさっき聞いたばかりだけど、あの中華飯店は、今日は夕方までどなたの家かの婚礼披露宴で貸切だよ。」

「何だよ、久しぶりに鯉の唐揚げを食おうと楽しみにしていたのになあ。こんな梅雨の最中に結婚式かよ。物好きな奴もいるもんだな。それとも値引値段の挙式かい。」

柳田は無然と口をへの字に結びました。「あら、良いじゃないこと。ジューンプライドって素敵だよ。」

夫人は新婚時代を思い出したような口振りでした。

「ヨーロッパの六月は日本と違い、一年で一番快適な百花繚乱の季節ですね。」と私は蒨蓄

を垂れました。

「その通りですわ。だから今の若い方、新婚旅行は梅雨のない海外に出かけて、雨は関係ないですわ。ジューンプライドって、経済的で頭脳的ではありませんか。五木さんのおっしゃるように、新婚旅行はきつとイン格蘭と夫人は亭主の顔を見つめました。」

「そうかい。君は五木君と気が合うのだね。」

柳田は、皮肉とも本気ともつかない目で夫人を見つめ返し、私はあわてて、「柳田君、おか

しなことを言うなよ。」と夫人と会った胸のと

きめきを抑えるように、柳田を真顔でたしな

めました。私が子供の頃の流行語『老いらく

の恋』が一瞬脳裏を過ぎりました。柳田は照

れ笑いのような顔をすると、「人間も腹が減る

と不機嫌になるよ。」と変てこな言い訳をし

した。

十三

久しぶりの晴れ間で、散策を兼ねて何処か

近くの料理屋に飛び込むことになり、三人で柳田邸を出ました。屋敷町の小路を歩きながら、私は柳田に話しかけました。

「♪柿の木坂は、駅まで三里♪って歌が流行ったのはいつの頃だったかね。」

「あの『柿の木坂』は、東北地方か何処かの田舎村のことさ。」

「わたし、亡くなったお義父さんから教えてもらったわ。その昔はこの一帯も畑ばかりで、乗合馬車で目黒駅まで出て電車に乗っていたそうだわ。銀座や浅草で遊ぶには一日がかりだったそうよ。」相変わらず夫人が絶妙のタイミングで後を継ぎます。

「何かちよつとした買物があつたら、『東京に行く』と言っていた時代だろうね。J Rの前が国鉄で、その前の鉄道省の省線電車の頃のことでだよ。」

「だから東北の田舎の『柿の木坂』を、そうそう馬鹿に出来ないわ。」

環状七号線を信号で横断し、学芸大学駅方

向へ小路を進みました。
電柱の地番表示が碑文谷と変わりました。
「ひもんやと読むのだったね。」私は柳田に確
かめました。
「hibunやと読む者も結構いるな。碑文石が
発見されたのが地名の由来で、原始時代には
深い溪谷をなしていた人間が狩とか食い物を
採集の生活をしていたと郷土史に書いてあつ
たね。何しろ、この先は鷹番という町名だか
ら、江戸時代でも將軍様が鷹狩りをした森と
か藪とか原野ばかりだったろうよ。」目黒の
さんま『って落語のネタになるくらいだから、
当時は海から遠い草深い土地だったのだね。」
「昭和一桁の頃、目黒区となるまでは、ずつ
と世田谷の先まで荏原郡という田舎の地名だ
ったのって、今は昔の信じられない変わり様
ですわ。」と夫人が又後を継ぎました。

柳田夫人はちよつと足を止め、学芸大学駅
の商店街まで行けば店が一杯あるけど、お客
様を大衆食堂なんか案内できない旨を亭主

に告げて、行先を目黒通り方向へ変更させま
した。
「もう皆亡くなっただけ、この辺りには渥美
清やいかりや長介、それにコロンビアトップ
なんて有名な人が住んでいたよ。まあ、顔を見
ることはなかったがね。」
「柿の木坂も芸能人が多いわね。お付き合
いはありませんけど、タモリさんや明石家さん
まさんの住まいもありますのよ。」
「お笑い系ばかりじゃないですか。」
私がちよつと茶化した応答をしたら、夫人は
むきになったように、「そうじゃありませんわ
よ。とつくに故人だけど宇野重吉さんもいた
し、今は息子の寺田農さんがいますわよ。昔
は松島トモ子さんも住んでいたのよ。」と私の
顔を見つめて反論しました。
ゴルフの練習場があり、カーンと乾いた
球の響きを耳にしながら住宅地をぶらぶらと
歩いていたら大通りへ出ました。
「目黒通りだよ。あのスーパ―の付近にウナ

ギの蒸籠蒸しの店があったな。行ってみようぜ。」と柳田が一際高い大型ビルを指差しました。た。お中元セール中と大きな垂幕が久し振りの青空に映えて鮮やかでした。ビルの中なら、暖簾をくぐると柱や壁や障子窓など純和風造りに設えられた料理屋に入りました。小さな人口池があり、緋鯉や真鯉が照明の下をゆったりと泳いでいます。昼時は過ぎており、すぐに和服姿の仲居さんに個室に通されました。小さな床の間の花瓶に大振りの紫陽花が生けてあるのが、梅雨の最中であることを教えていました。ウナギは大丈夫だろう。」と柳田が氣遣ってくれまして。私が返答をしようとしたら、夫人がすかさず口を挟みました。本当に夫唱婦随の仲の二人だと改めて感心しました。「わたし、関西の育ちだから、ウナギは『まむし』と言って、直火で焼いた脂の乗りが良いい井に味が慣れていますわ。」

「関東では、一度蒸して脂を落としてから、

その店ごとの秘伝のタレをつけて焼いて、ウナ井やウナ重にするんだ。そうだよなあ、五木君。」と柳田から話を振られたので、やっとな私は自分なりのウナギの蒔蓄を自慢そうに披露することにした。ちょうど注文したビールが届いた時で、三人で軽くコップをチンと合わせ乾杯した後で口を開きました。「関東は背開き、関西は腹開きだね。江戸は武士が多かったから、腹開きは切腹を連想し、忌み嫌われたんだよ。僕の親父は終戦直後の頃の話だけど、狛江あたりまでウナギ捕りに行ったそうだよ。当時の狛江は農家がポツンポツンと点在する田畑ばかりの村落で、ウナギは滅多に捕れなかったけど、小川にはフナやラドジョウやラウジャウジャいて、それにシジミやタニシをバケツいっぱい捕って帰って、良い蛋白源だったと聞いたよ。」

「まさに今は昔の今昔物語だね。農薬で川が汚染されたり、都市化で川は暗渠になったり、人が川を死滅させたのが高度経済成長期だった

たな。」

「そうだけど、公害が深刻になり自然保護が喧しく言われて、ようやく上下水道などのインフラの整備が進み、少しずつ自然が蘇って来たよ。でも都市近郊ではほとんど絶滅したけど、最近ずいぶん復活させた地域があるね。人間、やろうと思えば出来るもので捨てたものじゃないね。」

私と柳田がとりとめもない雑談をしている最中に、柳田夫人にオーダーをお任せした茶碗蒸しやテンプラや刺身や煮物などのご馳走が次々に運ばれて来て、皿が卓上に所狭しと並べられました。

十四

「アイデアが浮かばないよ。」

私は茶碗蒸しをサジで掬いながら、柳田夫妻

に助けを求めるように口を利きました。

「毎日暇を持て余していてもかい？」

「あなた、五木さんに失礼だわ。素晴らしい

デザインを考えてくれていらっしゃるから、

なかなかな浮かんで来ないのですわ。そうでい
らっしゃるのでしょう？」
私に相槌を求め、夫人の目が心なしか媚びて
いるように思えて妙に胸騒ぎを覚えまして。
私が夫人に惚れているわけでもないのに変て
こなことに頬の火照りを感じました。
「小人閑居して碌なことをしないって、言う
でしよう。人間、暇だと返って芸術的センス
は萎えるんですよ。」
私は夫人から目を逸らすと、視線のやり場を
失ったかのよう、に茶碗蒸しの容器の花柄に見
入りました。
「苦勞をかけて悪いな。ウナギで精をつけた
らアイデアが浮かぶよ。」
「まあ、あなたったら、芸術って、そんなも
のではないでしょう。」
夫人は口を半開きにしたまま、あきれたよう
に亭主の横顔を凝視していました。
「そうだ。お嬢さんと風間さんの息子の写真
を見せてもらいに来たんだったよ。」

私は今日の訪問の目的を今になって思い出し
ました。とうに亡くなった二人の面差しを見
れば、何かヒントになってデザインが閃く
気がしたのです。
「そりや、そうだね。帰りに寄ってお茶でも
飲んで行きなよ。アルバムからはがして写真
を預けるから、あんたが家に持って帰ってゆ
つくりと眺めれば、何かアイデアが浮かぶ
よ。」

「あなただったら、そんな気楽なことをおっし
やって、五木さんに失礼でしょう。」

夫人が一旦箸でつまんだマグロの刺身を皿に
戻し、険しい目付きで夫を見つめました。

「何か君に良いアイデアがあるなら五木君に
言いなよ。」と柳田はすまして箸にしたイカの
煮付けにかぶり付きました。

「そうだわ。亜希子と洋一さんが二人一緒に
テニスコートに立った写真があったわ。あの
構図が良いわ。仲良くて最高じゃないかし
ら。」

夫人の切れ長の目が輝きました。
「二人の顔をじっくりと眺めれば、良いアイ
デアを思い付きますよ。夏になる前に構図を
考えておきますから任せて下さい。」
私は、夫人を安心させるため、とにかく引き
受けてしまった約束を果たす決心を新たにし
ました。
「五木さんって、誠実な方で頼もしいわ。」
長い睫毛の夫人の瞳が私の真正面に輝いてい
て、アルコールの作用と併せて頬の火照りを
カッカッと覚えました。
「お待ちどう様！」
そこへ、仲居さんでなくこの店の主人みずか
ら、ウナギの蒸籠蒸しを運んで来ました。店
主の額を覆った日本タオルに年季を感じまし
た。
「商売繁盛でしょう？」
「と柳田が定番の愛想
を言いました。」
「有り難うございます。お客様のお陰で何と
かやっています。」と中年の店主は静かな笑み

を見せました。
「店を開いて五年くらいになるのかな。」前に
も何度か来たと言う柳田が確認しました。
「はい、ご存知とは思いますが、九州の柳川
から出て来ました。北原白秋で有名な水郷の
町で、親父のウナギ屋の暖簾分けみたいな格
好で東京に店を出しました。商売が駄目だっ
たら又柳川に帰ろうという甘い気持ちでした
から、運が良かったと思つています。」
「この店は、確か雑誌で紹介されたよな。」
「さようございます。大川出身の大手の会
社の社長さんが碑文谷に住んでいらつしやっ
て、ウナギの蒸籠蒸しを気に入つて下さつて
週刊誌のグルメ欄に紹介して頂いてから軌道
に乗りました。どうぞ、暖かいうちにお召し
あがり下さい。」
主人は深々と我々に一礼すると、そそくさと
厨房へ戻りました。
私はウナ重やウナ井しか食べたことがなく、
米粒にまでしつかりとウナギの味が沁みつい

て いる 蒸 籠 蒸 し を 美 味 い と 思 い ま し た が 、 レ
デ イ の 前 で パ ク パ ク 食 べ る の も 品 が な い の で 、
少 量 ず つ ゆ っ く り と 口 に 運 び ま し た 。
「 五 木 君 、 ず い ぶ ん 慎 重 に 飯 を 食 う の だ ね 。 」
と 柳 田 が ビ ー ル の 泡 を 口 を つ け た ま ま 笑 う ほ
ど 、 私 は 真 正 面 の 夫 人 を 意 識 し 、 緊 張 し て 食
事 を し て い ま し た 。 ア ル コ ー ル を あ ま り 嗜 ま
な い 夫 人 は 食 事 の ペ ー ス が 早 く 、 私 が 蒸 籠 蒸
し を 未 だ 半 分 も 食 べ て な い う ち に 、 す っ か り
料 理 を 平 ら げ て し ま っ て い ま し た 。 ビ ー ル に
続 い て 日 本 酒 を チ ビ リ チ ビ リ と や っ て い た 柳
田 は 未 だ 蒸 籠 蒸 し に 箸 を つ け て い ま せ ん で し
た 。
「 主 人 っ た ら お 人 好 し な の よ 。 あ れ か ら 何 度
も 風 間 さ ん の 主 人 の 病 院 通 い を お 手 伝 い し た
の よ 。 風 間 さ ん っ た ら 、 千 葉 の 身 内 に 頼 む べ
き こ と で し ょ う に 。 」
夫 人 が 食 後 の お 茶 を 飲 み な が ら 不 満 そ う に 話
題 に し ま し た 。
「 う ん 、 で も 情 け は 人 の た め な ら ず っ て 言 う

じゃないかよ。俺なりに冷静な計算もあって、
ここで風間夫妻に恩を売って、後々のことを
有利に運ぼうと思ったのだよ。」

「辺境の地での急病って困り果てるでしょう
よ。ご近所同士の助け合いって、相互扶助の
精神で良いじゃないですか。」と私も柳田を援
護射撃するように口を差し挟みました。
「あの奥様、そんな生やさしいタマじゃない
ですわ。きつと、それとこれとは別とはつき
りおっしやる性質（たち）ですわ。」と夫人は細
く描いた柳眉を逆立て不機嫌な様子で、私は
黙ってしまいました。

「あなた、確か会津若松の病院まで、うちの
車で三回も送り迎えたでしょう。一度は風
間のご主人、そのまま検査入院なさったから、
その帰り道と退院のお迎えは奥様と仲良くド
ライブでしたわね。」

「ただの運転手、いわゆるアツシー君だよ。
妬くことないじゃないか。」

酒で上気した柳田は若干色をなして弁解して

いました。

「あら、そうですね。途中の五色沼に二人で降りて喫茶店でお喋りをしたそうで、幸せ一杯という顔付で帰って来たじゃありませんか。」

「あの人とは同じ小学校の出だから、ちよつと子供の頃の昔話をしただけで、そんなニヤけた顔をして帰った覚えはないよ。」

柳田は珍妙なほど、むきになって抗弁しているように見えました。

「折角の機会だから、風間さんの奥様に慰霊碑を建てるお話を説得してくれたのかと期待していました。のよ。」と首を曲げて主人の顔色を窺う夫人の目の色には訝しげな光り様がありました。

「それも考えたよ。でも旦那さんが入院したばかりの、その帰りの足でいきなり相手が嫌がっているそんな懸案事項は話題にできないさ。奥様の心中を察してやれよ。」柳田は少し落ち着いたのか、しばらくくくれたすまし顔の

様子でした。

「あなたには風間さんの奥様の味方をなさるの
ですか？」

夫人の声が尖がり、風雲急を告げるような座

の趣に、私は夫妻の会話がエスカレートしま

すます泥まみれになっでしまいうような危うさ

を感じ、助け舟を出すべく咄嗟に間に入り話

題の転換を図りました。

十五

「柳田君、仕事はもう完全に息子さんに譲つ

たのかい。」

「いや、いや、とても任せられたもんじやな

いよ。別荘にいる時もパソコンに各店舗の経

理を送信させてチェックしているし、帰京中

も週に二、三回は渋谷の本店に顔を出して書

類に目を通しているよ。」

「いつまで経つても親から見れば、子供は子

供でしかないのですわ。」と例によって夫唱婦

随が始まりました。

「創業者は祖父の代だけど、ここまでの大き

なチェーン店にしたのは俺の力だからね。本
屋にゴチャゴチャ詰まれた企業経営のハウツ
ウ本なんて気の抜けた清酒のなれの果て、酔
みたいなものでね、殊更役に立つもんでもな
いよ。毒にも薬にもならず読んでも無駄だっ
たね。やはり、商売の基本は商法の信義誠実
の原則で、誠心誠意お客様のニーズに応える
気合だと悟っているよ。それと情報収集のた
めの人脈づくりは大切だね。製薬業界や販売
協同組合の会合は当然として、政治資金パー
ティーから同窓会、町会でも何でも日程の許
す限り顔を出したね。息子には、まだ教える
ことだらけで経営を任せる段階にないよ。」
柳田は、自分が事業を大きくした中興の祖と
しての自負心からか、鼻の穴をふくらませ、
したり顔でした。
「でも時の運もありましたわ。高度成長はも
ちろん、国民の長寿化という時代の追い風が
後押しをしてくれましたわ。長生きする人は、
お薬を沢山飲んでくれますからね。それに私

の内助の功も忘れないでね。」と夫人が皮肉そうに顔を水をさしました。先ほどの風間夫人と夫の仲のことをまだ引きずっているのに相違ありません。

「やっぱり長年社長だった俺が店に顔を出す」と、従業員の顔が和むんだよ。きっと安心感を覚えるのだね。夏が来たからといって、すぐさま商売を放り投げて別荘へ行けないよ。」

「わたし、夏が来たら早く暑い東京を離れたいわ。」

「そうも行かないだろう。命日に風間さんの息子の墓参りをしないと具合が悪いじゃないか。」

「仕方がないわね。土用の猛暑も間近い頃ですわね。でも亜希子の墓参りもあるし我慢しますわ。」と夫人はうんざりした表情でした。

私は折角話題を変えた積りでしたが、また話が風間家の方に近づいているようで内心あわてました。

「奥様の日常はどんな風ですか？」と話を向

けました。
「私ですか？」と夫人は鳶色の瞳を輝かせて
嬉しそうに話をしてくれました。
「テニス仲間とお付き合いにお絵描き倶楽
部通い、それに合唱クラブ、社交ダンスの会、
たまに昔からの仲間とカラオケ、それに旅行
とスケジュールはびっしりと詰まっています
わ。そうだわ。七月の初めに軽井沢のホテル
で定例のお絵描き倶楽部のパーティーがある
のよ。主人じゃなくてボーイフレンドを連れ
て集まっても良いのだわ。」
夫人は私の顔を見つめて婉然と微笑んでいま
す。
「五木君、俺に遠慮は無用だよ。あんな芸術
家気取りの連中の高尚な談話は苦手だなあ。
あんななら色男で芸術論でも何でも遜色ない
だろうよ。」と柳田までがニタニタと本気とも
冗談ともつかぬ笑顔を見せました。
「あら、本職の画家の先生も大勢いらっしや
るのよ。とつても勉強になりますわ。五木さ

んがご一緒して下さったらしいわ。」と夫人
があっけらかんと駄目を押すように言うので
私も何か返答せざるを得ません。夫人がこん
なに無邪気に亭主の面前で私を誘うとは、柳
田はすでに不能（インポ）になつているのでは
ないか、と私は変てこな妄想に捉われていま
した。
「奥様とご一緒できたら光栄です。しかし僕
はもう芸術に見切りをつけた身ですから、今
更未練がましく他人と芸術談義をしたくない
です。」
「まあ、口惜しいですわ！ 見事に振られまし
たわ。」
夫人はおどけて赤い舌をペロリと出しました。
「学生時代の美術サークルの縁で、柳田君の
たつての頼みだから、非力ながら知恵を絞り
出して慰霊碑のデザインだけは責任を持つて
創作するよ。」私が宣言すると、夫人はふざけ
たようにパチパチパチと拍手し、うなづきな
がらにつこりと変てこな笑まいをしたように

見えまして。
私には自惚れかも知れませんが、軽井沢に一
緒でできなかった夫人の口惜しさの裏返しの笑
顔に思えました。
やっと柳田がウナギの蒸籠蒸しを食べ終えた
ので店を出ることになりました。
「腹いっぱい歩いて歩かさないな。タクシー
で帰ろうよ。五木君にアルバムを見せて写真
を選んでもらうよ。」
「お腹いっぱいって、あなたはビールでお腹
いっぱいいなだけだわ。本当は歩いた方が健康
に良いのよ。」
「そうだな。小便を出したら元通りだよな。
ミルク飲み人形と変わらないな。」
「まあ、お下劣で嫌だわ！」
「そうだ。もうちよつと先にレーズサンド
のクッキーの店があるから歩こうよ。お土産
にしよう。」と酔っ払った柳田は怪しい足取り
で目黒駅の方角へ歩きました。
私は小さい瀟洒な洋菓子店で目黒名物とい

うレーズンサンドのお土産を貰いました。何
でも生クリームにギツシリこれでもか、これ
でもか、とレーズンが挟まったクッキーで、
知る人ぞ知るこの辺りの名物だと言われ、甘
党の家内の喜ぶ顔が目に見え、嬉しかった。家
の顔を思うと変てこなことに里心のよう
に帰宅したく気持ち持ちが変わりました。もう一度柳
田邸へ戻るのが面倒臭くなっ
てしまおうとは不思議な心理とい
うか、どちらかというと言えば生
現象だったのかも知れ
ません。柳田君、今日はご馳走にな
った上、お土産まで頂いて申し
訳ないよ。写真は何枚か見繕
って郵送してくれないかい？
今日は、ちよつと野暮用がある
んだよ。」と最後の方の嘘は小
声になりました。私は、素直に家
に帰りたいたい、と告白もでき
ず弱りました。弱りました。弱
りました。弱りました。弱りました。
「そうかい。出来たらあんたが
直接アルバム帖から写真を選
んで欲しいけど。何か用事
があるなら引き留めもできない
けど。」

「あら、ごゆつくりしていった下さい。五木
さんともつとお喋りしたいわ。」と夫唱婦随で
家に寄るように説得されました。
私は渋谷で買物があるという虚偽の言い草を
作って柳田夫妻と別れることにしました。や
つと彼らは説得をあきらめ、私を都立大学駅
で降ろすことにして、目黒駅方向からやって
来た空車のタクシーを拾いました。駅で一人
降りて改札口に向かう時に、一度振り返って
妖艶な夫人の微笑みの見送りを受けると、夫
人と二人だけだったら家まで付いて行きたい
という気持ちたちが勃然と起こり人間とは勝手
でこの生き物だと思いました。結局、渋谷
での買物もせずに井の頭線に乗換えて、終点
吉祥寺から歩いて玉川上水沿いの道を真っ直
ぐに帰宅しました。
十六
柳田邸を訪問した日を境に又梅雨の気候に
戻り、ほとんど一日中お日様が顔をみせず、
雨がしとしと若葉を叩く日が続きました。白

雨という言葉がありますが、こう毎日雨を見ていると、雨に色があるなんてどうでもよい
気になります。霧を帯びて白いから、白い雨
と表現するのでしょいか。水色とは一般に薄
いブルー系の色彩を言いますが、実際の水の
色は無色透明なはずで変てこなことです。
三日後に柳田から手紙が着きました。差出
人は柳田賢治内ですから夫人が代わって写真
を送ってくれたのでしよう。溪谷の清水の流
れのように流麗な女文字の宛名書きです。封
書のインクの文字が少し滲んだところもあり、
雨降りの中、ポストに投函した様子が目に見
かびます。封書を開きました。事故死した柳
田亜希子と風間洋一の高校時代のツウショッ
ト写真三葉の在中は先日頼んだ通りです。た
だ四つ折の便箋一枚の中に、小振りのポルト
レイトが隠されていたのには吃驚しました。
柳田夫人の学生時代のものとかわれ、どこか
高原の湖を背景に白樺の幹に寄り添うように
夢見る乙女といたった風情で写っています。こ

の年頃は女性の美貌が生涯で一番輝く時期で
す。娘の亜希子さんは、母親の柳田夫人に生
き写しだと思いましたが。手紙文は今時珍しい
ペン書きでした。私は又写真より何より便箋
の終わりの欄に小さな紅の花がひとつ描かれ、
その塗り絵の材質が絵の具や色鉛筆やインク
類でなく、口紅らしいことに意味深長なるも
のを覚えまして。口紅で描かれた小さな紅の
花に、柳田夫人の情念のようなものを手
感じ、胸のときめきを覚えまして。
柳田夫人の真意がなへんにあるのか変てこ
な気持ちになりました。便箋の文面は何の変
哲もない挨拶を兼ねた添え書きだけです。
『拝啓 庭の紫陽花の花に降る雨が白く煙
つていて、つゆの風情を感じる毎日でござい
ます。先日は柿の木坂までお越しただきま
したのに、たいしたおもてなしも致さずに相
済みませんでした。早速ではございますが、
ご要望の娘達の写真を見繕ってお送り致しま
す。何卒よしなにお願ひ致します。かしこ』

娘さんとその男友達の写った三葉の写真は、
いずれも高校生の時代のもので、制服姿の二人
がやや距離をおいてはにかみの残る表情で緑
滴る青葉の林をバックに撮られたもの、テニ
スコートネットを背にラケットを手にした
テニスウエア姿で照れたような笑みを浮かべ
て寄り添い立ったもの、三葉目は、風間洋一
が卒業間近い日々の頃であろか、二人とも
ちょつと緊張したすまし顔の制服姿で学校
正門脇の松の枝の下で撮られたものでした。
二人の男女関係がどの程度のものだったか知
るよしもないのですが、純心でプラトニック
な愛情で結ばれていたのではなにか、と感じ
ました。
この手紙を頂いた翌日、又梅雨前線が後退
したとかで雲は多いが久し振りの梅雨の晴れ
間に誘われて、昨日までの陰鬱な日常の気晴
らしに当てもなく中央線の下り電車に乗り込
みました。身体を動かすと精神も活性化し、
絵心も浮かぶものかと単純に考えたわけでは

ありません。柳田夫人のポートレートが手紙に忍び込ませてあったこと、いわば、小さな秘密が何を意味しているものか、情性で牧場の家畜さながらに時間を消費している私の日常を殊のほか刺激し、戸惑わせ錯綜させるものがあつたからです。家内にはちよつと遠くまで散歩をするから昼飯はいらないよ、と告げて家を出しました。人間仕事をしなくなると、変てこなことに三度の食事が日常生活の中核のリズムとして定着するものです。先年の夏のこと、会社の研究所時代の同僚の親類が経営する北浅間の牧場に誘われ、泊りがけで酪農の真似事を体験して遊びました。牧場には牛や羊の群れがいました。が、家畜の一日は食べているか、満腹で休んでいるかの繰り返し、夜には寝るだけの穏やかなものでした。何もしない人間もいささか家畜の生活に似通つているように、柳田からもらった宿題はそんな私の生活の心の池に一石の波紋を生じさせるもので有り難いものでした。だが、それが大

きな渦を巻き起こす大風に遭遇しないとも限らない、などとは考えも及ばないことでした。当然でもなく乗った普通電車でした。ぼんやりと車内の客が携帯の画面に見入っていたり、座席で化粧に夢中の若い女の様子などを眺めながら時代がすっかり変化した感慨に耽っていました。が、「次は国立！」という車内放送を耳にした途端、何かがインスピレーションのように関き、降りてみることにしました。私がゼネコンの営業マンをやっていた中年の頃、晴天の霹靂さながら社命でデザイン研究員に身を振り替えられた際の、派遣された専門学校の研修の記憶が脳裏を稲光りのように駆け巡ったのかも知れません。近代建築学の大御所、伊東忠太の言葉『建築は芸術であり、芸術はオリジナルテイーである。』は忘れていません。国立の一橋大学の兼松講堂は彼の代表作として有名です。その折に見学したきりの講堂を無性に懐かしく覚え、大学通りの並木道に自然と足が向かい

ま
し
た
。
確
か
小
さ
な
ピ
ラ
ミ
ッ
ド
形
の
屋
根
だ
っ
た
国
立
の
駅
舎
が
す
っ
か
り
改
築
で
様
変
わ
り
し
て
い
た
だ
け
で
な
く
、
低
か
っ
た
街
並
も
高
層
化
が
進
み
、
い
っ
の
間
に
国
立
の
街
が
こ
ん
な
に
変
わ
っ
た
の
か
、
否
、
進
化
し
た
の
か
と
表
現
す
る
の
が
正
し
い
の
か
、
私
は
時
の
流
れ
に
全
く
つ
い
て
行
っ
て
い
な
い
自
分
の
不
甲
斐
無
さ
を
十
分
に
覚
え
ま
し
た
。
さ
ほ
ど
遠
く
な
い
三
鷹
に
住
み
な
が
ら
今
更
出
不
精
の
自
分
を
改
め
よ
う
、
と
思
う
な
ん
て
変
て
こ
な
こ
と
で
す
。
大
学
の
門
を
入
る
と
左
手
に
ロ
マ
ネ
ス
ク
様
式
の
瀟
洒
な
講
堂
が
、
か
つ
て
と
何
ら
の
変
容
も
な
く
あ
り
ま
し
た
。
ド
イ
ツ
辺
り
で
見
た
宮
殿
の
よ
う
で
も
あ
り
ま
し
、
も
し
屋
根
に
十
字
架
を
載
せ
れ
ば
大
寺
院
に
も
様
変
わ
り
す
る
よ
う
な
感
覚
も
変
わ
り
ま
せ
ん
。
こ
の
歳
月
の
間
の
街
の
変
貌
を
思
う
と
、
こ
こ
は
嘘
の
よ
う
に
静
ま
り
返
っ
た
空
間
に
見
え
ま
し
た
。
西
洋
式
の
周
辺
の
植
栽
も
当
時
の
記
憶
の
ま
ま
で
、
懐
か
し
く
て
涙
が
こ
ぼ
れ
そ
う
に
な
り
ま
し
た
。
人
も
人
の
世
も
又
移
ろ
い
易
い
も
の
で
す
が
、
芸

術度の高いものには不易の要素があることに
気が付きました。柳田亜希子と風間洋一のこ
の世における一瞬の愛と命を具象化し、永遠
性を顕正することだが、我が子より長生きした
柳田夫妻の哀切な願いだ、それが自分に託さ
れたのだ、おのれが恃（たの）みとされたから
には、全身全霊をかけて慰霊碑建立の実現に
立ち向かう、と兼松講堂を凝視しながら誓
いました。
今の今まで私の心のどこかに、俗世で功な
り名を遂げた柳田賢治への嫉みが潜んでいて、
慰霊碑建立が金満家の似非なる所為に思えて
いたのかも知れませんか。花は咲いた数だけ散
ると言いますが、愛娘に先立たれた親の気持
ちを理解しえていなかった自分の不明を畏友
の彼に心の奥で詫びながら兼松講堂のそばか
ら立ち去りました。
十七
定年後、私は時間と遊ぶだけなら未だ良か
ったのですが、時間と一緒に自我まで没却し、

ただひたすら怠惰に生きていたのです。また、馬齢を重ねるという奴です。それが一変したのが、柳田から夭折した娘とその男友達の慰霊碑建立に手を貸すように重ねて頼まれ、何か神の啓示のようにつながれ、一橋大学、兼松講堂の姿に再会してからです。私は突如芸術の神に胸を揺さぶられ、真剣に生甲斐を覚えたのです。

あの国立へ行つた日の帰路、私は吉祥寺の文房具屋で画用紙を買つて帰宅しました。久しぶりの外出で疲れたせいかもしれませんが正体なく午睡をし込んでいたベランダに出てまっさらな画用紙を長いこと見つめていました。何処へ出かけていたのか、帰宅したばかりの家内が「何をしていたのか！」と訝るようにチラリと目を向けたので、手を振つて応えました。長いこと夫婦をやつていると、私の心が分かったよううで、それ以上彼女には気にもかけずダイニングループに向かいました。これが以心伝心と

言うものか、夫婦関係が枯れて没干渉になっ
てしまったのか、変てこな気分ではありまし
た。夏至を過ぎたばかりの頃で、時刻は夕刻
の七時に近かったと思います。私の目は画用
紙の白い画面、手入れの悪い庭の隅の露草や
白い十字のドクダミの花から西空の薄赤い夕
焼け雲へくるくると猫の目のように移りまし
た。それからは具体的ヒントは浮かびませ
んでしたが、まずは柳田夫人が送って来た写
真が空白の画用紙に浮かびました。テニスの
ラケットを持った二人が花咲く高原に立つイ
メージを具象しました。女の子の方が片膝を
ましました。次には、柳田亜希子が作った詩の一
節が思われました。『夕べになったら茜雲　夕
陽の峰まで翔けましよう』
玄宗皇帝と楊貴妃の熱愛の具象、比翼の鳥を
二人の顔にしてみよう、と思いつきました。
決意が固まったから仕事は進捗するものでは
私はい、戸棚の中から現役時代の手記用工具箱を

退職後はじめて取り出し、デッサン用鉛筆でその夜半までかかって二枚の『慰霊碑完成図』を仕上げました。思えばこの春、柳田の吾妻山麓の別荘に招待されて以来の懸案が、一気に出来上がるもので変てこなことでした。この二枚の構図から柳田夫妻、それに風間夫妻の賛同を経て気に入った一枚が選ばれたら、大きさや素材などの希望を聞いて設計をするので、道のりはまだ遠いのですが、一先ず安堵しただけです。何といても風間夫妻の意向が全く不透明で、慰霊碑建立の日取りが現実感を帯びないので、もどかしい限りでした。風間の主人はある程度の理解者だが、奥さんの方は分らず屋と聞いていて一抹の不安は消えません。柳田夫人に言わせたら、風間夫人は、言い出したら後に引かない性格だそうです。そうなるとお先真っ暗の暗雲が立ち込めているようにで、私はその晩青い湖水に頭を浸けているようにに冴えて仕方がなかったの

で、真夜中ながらウイスキーをたつぷりと寝酒にして何とか眠り込みました。「あなた、何をうなされているの。」

明け方家内から突如揺り起こされました。枕もとの時計の針は寝入ってから二時間位しか経っていないのを自覚できましたので、一瞬やや正気に戻っていたことに相違ありません。

私は「うん、いいや、何でもないよ。」と寝惚けた頭脳で変てこな返事をしながら体の向きを変えて又寝込みました。

確かに家内に起こされる直前の、女の声の幻聴が耳の中でこだまのように反響していった。眠りこけるには至らない身体が宙に浮遊しているような感覚の、いわば夢の又夢の境域で、アルトの優美な声とソプラノの甲高い声が絡み合い、周りで大勢の僧侶の読経のようなくぐもった響きがしていました。

「首を絞めてもいいですか！」
「やれるものなら、やってごらんなさい。」

「頬を張り倒しますわよ。」

「その前に、足を掛けられ、押し倒されないよう、お気をつけなさいませ。」

「テニスで鍛えた脚は、そんなに柔（やわ）ではありませんわ。わたしと戦うつもりなの？」

「ずっと男衆と仕事していたから、わたしは喧嘩が強いのだよ。」

「この辺で降参した方が、あなたの身のためになりますことよ。」

私は「二人とも止めなさい。」と声を出そうとして声にならず、やっとなんか発声した時に、家内に揺り起こされていたのでした。

ようやく慰霊碑の図案を完成した夜の枕頭で変てこな夢の体験をしたものでした。

翌朝は寝坊して昼前に起床しました。窓外に梅雨晴れの空が広がり、家内の姿はあります。せん。テーブルには家内の置き書きがあります。した。

『ひろ殿折り紙サークル仲間と新宿で映画を観て来ます。カレーライスを作っておきましたから、お昼は軽く暖めて食べて下さい。』

夕方方帰ります。加奈子『
いつもものように几帳面な文字で
広告の裏紙を
使っているいます。ひろ殿とは、
もちろん私の名
前『弘』のことで、新婚時代から
家内だけが
使う愛称でした。
昼食を口に
する前に柳田宅に電話を
しました。
た。あいにく柳田は会社へ出
かけていて、電
話の受話口にはくすぐったい
ような夫人の
ルトの声が弾んでいました。
夕べの幻聴の
方の女の声に間違いなく、一瞬
複雑な心境に
なりました。が、なにわぬ素
振りです話を
しました。何とか夜を徹して慰
霊碑の完成図
を作
成したのでご披露したい、と
少々勿体な
つけ
て伝言を頼みました。夫人は、
夏が来たら早
く別荘に行きたい口振りで
した。そして、午
前中は二日続きで梅雨の晴れ
間が出たので、
久しぶりにテニスコートで一
汗流し、試
合で
若手のテニス仲間を負かして
やったと機嫌が
良かったのですが、相手が風
間の奥様だった
良かったのです。が、相手が風
間の奥様だった
らもつと嬉しかった、と陽気
にお喋りを
する

ので又昨夜の幻聴が私の脳裏を掠めました。
十八
七月一日、カレンダーをめくったら海とヨ
ットと島影の絵柄でした。今年の梅雨明けは
平年より早めになるでしょう、とテレビの朝
のニュースがアナウンスしていました。六月
から七月に入っても霧雨が断続的に続く鬱陶
しい日々ですが、徐々に梅雨前線は海の彼方
に後退し夏空も近いでしょう、と気象予報士
のお天気お姉さんが天気図で説明をするシー
ンをぼんやりと見つめていたら、柳田さんか
らお電話よ。」と家内が取り次ぎました。柳田
賢治は、風間洋平に電話して七月二〇日の風
間洋一と柳田亜希子の命日に双方の墓に線香
と花を手向ける旨、仁義を切ったと教えてく
れました。柳田家の墓所は目黒にあります、
風間家も家屋敷や工場は千葉の房総に移して
も菩提寺は東京の墨田区のままだそうです。
私が風間氏の方は何か言わなかったかと尋ね
ましたら、「いいや、会津若松の病院まで何回

も車で送って面倒見てやった俺に恩義があるから、それは恐れ多いことで、と平身低頭のような感じだったよ。」と笑っていました。風間夫妻は間もなく別荘に出発することでした。柳田夫妻の別荘行きは両家の墓参りを済ませ、息子のフアーマシー経営をチェックしてからにするので、土用の最中になるが、日時は追って沙汰するから、と一方的に言つて電話を切りました。

しかし、七月二十日の亡き娘とそのボーイフレンドの命日、この夏一番の猛暑の中を二つの寺の墓参りを駆け回った夫妻は、コンクリートジャングルの東京の酷暑に懲りたらし、急にその日の夕刻「商売のチェックは涼しい別荘に行つて、パソコンでやることにしたよ。」明日、早々に福島に行くことにしたから、突然で悪いけど付き合ってくれないか？」と柳田が電話してきました。結局、私達は命日の翌日、七月二一日に柳田の別荘へと出發しました。暦の上では土用の入りで、暑中

の真っ盛りを迎える頃です。夏休みのバカンス客で北の行楽地へ向かう車で高速道路が渋滞するのには自明のこと、それを避けるためにに暁の出発となり、私は目黒の柳田邸に前泊しました。その折に、先日郵送してもらった娘さんとボーイフレンドの写真三葉は返却しました。ただ同封の白樺の幹のそばで撮った若き日の夫人のポートレートは、便箋の謎めいた口紅塗りの小さな紅の花のこともあり、彼女が内密に私に進呈したものと解釈し、黙って貰っていました。その日、夜明前の激しい風雨の中を、彼の吾妻山麓の別荘へと車で向かいました。」「

私は街路の並木の葉っぱが揺れ騒ぐのを見ながら不安な心地でした。」「

「な、あに予報では、北関東を出たらまずまずの天気らしいぜ。」

「局地的な悪天候ですわ。福島地方は晴マークですわ。」助手席の夫人は朝刊を手にしてい

ました。夫唱婦随は相変わらずです。福島県
の天気予報は海沿いの浜通り、県央の中通り、
山地の会津と三つに分けて発表されるほど異
なるのです。私がそのことを質すと、夫人は
綺麗に化粧した薔薇色の顔で振り向き、「イン
ターネットで調べましたのよ。」と自信満々に
答えました。
東北道的那須高原サーブスエリアで一息入
れた時は、東京の悪天候が嘘だったように、
晴天に向かって那須岳が煙を噴き上げており、
はるかな東京の方角には入道雲が湧いていま
した。私達は朝食とも昼食ともつかぬ食事を
終えて、コーヒ―を嗜んでいました。
「風間家の墓参を済ませたら、清々しい気分
になったよ。今更形式的だったかも知れない
けど、死んだ息子さんの冥福を祈っただけで
心が落ち着くのだから、人間ってへんてこり
んなもんだよ。」
「死者を哀れ悼む感情は、宗教から来るもの
かしら？まだ宗教がない大昔の洞窟に住んで

いた人類は仲間の死をどんな風に受け止めていたのかしら？」と夫人が真剣に口にしました。た。さあね。肉は貴重な蛋白質だから喰ってしまったんじゃないか。」と柳田は平然とした顔をまったんじやないか。」と柳田は平然とした顔ををしていました。夫の横顔を一瞥すると、私に相槌を求めるように颯め面を見せました。長い髪に濃いアイメイクが勝気な彼女によく似合っているかと思いました。私もカラッとした性格の夫人を知らなくてみたくなり、有史時代になつてからでも人肉を食べた話は山ほどありますよ。ずつと前に南米のアンデス山中に飛行機が墜落した時、救援隊が来るまで生存者は死んだ旅客の肉を食べながら待っていた話は有名ですよ。スライスし、お日様の光りに炙つただけで、咀嚼して味わうことはしなかつたそうです。古代中国にも、不意の客人をもてなすのに食

い物がなくて、自分の女房を殺してその肉料
理を供した説話が残っていますよ。外国人の
噛み付き合うようなヘビーキッスなんて、人
がまだ類人猿だった頃に仲間の肉を食った名
残だという学者もいますよ。」と真顔で言った
ら、「まあ、五木さんまでお食事後にそんなこ
とを言つて。もう嫌！」と自分の両耳の穴を
指で塞ぐ仕草の前に、一瞬、彼女の紅い爪が
獲物を狙った猫の手のように素早く伸びて来
て、私の手の甲を引っ搔いたのには驚きまし
た。そんなことを知ってか知らずか柳田は「女
のお尻の肉は柔らかそうで美味かつたろう
な。」と呑気に笑っていました。

ある程度高等な哺乳類など、知能がある生
き物でないと、同類仲間の死を意識しないで
しようし、ほかは安全本能により危険を察知
して、必死で天敵に抗うか遁走するのが関の
山でしよう。人間の弔いの心も宗教という慧
智ができてからのことだと思います。宗教心
を没却したら、万物の霊長と言えども、人間

は実に残酷なことを平然とするものでしょう。
山の煙はもくもくと昇り蒼天の中に溶け込
んでいました。
「この噴煙は、いつの頃から立ち、いつまで
も続くものかな？」柳田が真剣な表情で口に
しました。夫人は呆れたように「そんなこと、
火山の研究者に訊いてみないと判りませんよ
ね。」と私の顔を見つめました。
「玉手箱の煙だよ。見ているうちに年をとっ
てしまうよ。」と私は冗談を口にしました。
「子供の頃は宿題が嫌で、日にちがどんどん
過ぎて早く大人になりたいと思っていたけど、
この年になると逆に日にちに止まって欲しい
と思うのだから、人生って変てこだよな。」と
柳田は真顔で無常の話を続けました。
日月とは誰が身の上にも等しく降りかかるも
のだと判っているのでしょうか、人間とは甚
だ勝手な思考をするものです。心の深層の一
隅に、おのれだけは死を免れ得る例外だとの
願望意識を無意識に皆が持っているのかも知

れません。山の煙を見つめていたら、時間が刻々と過ぎて去って行くのを如実に見ているように覚えました。

私はこの機会に持参している画用紙に描いた慰霊の石碑の完成イメージ図を筒から取り出して、翌朝の出発が早いので早く就寝しようということでも披露していません。仲睦まじく花咲く高原でテニスラケットを手には微笑み合う風間洋一と柳田亜希子、中国の伝説に拠ってこの二人が比翼の鳥となつて、山の峰のはるかな上空を飛翔するイメージのもの、二枚を広げて見せました。お嬢さんの形見のアルバム帖から送つてもらつた写真の風間洋一と柳田亜希子の顔を模写したものだとして説明しました。

「どっちも良いね。石碑のデザイン、どっちにしようかな？」柳田は満足そうな顔でした。

「わたしは、絶対にこのテニスラケット姿の方よ。でも安心するのは、まだ早過ぎるわよ。女狐退治の話になさつていたのは、どこのど

なたかしら。」

と夫人が皮肉な笑みをしました。

私は、昨晚柳田邸に着いた時に、懸案の石碑の完成予想イメージをデッサンに描いて来たことを告げました。その時、柳田は風間夫人の同意を得られるかどうかをまだ心配していました。しかし、寝酒でいささか酔っ払った柳田は「女狐を退治して、有無を言わさず建ててやるぞ！」と威勢よく寢床に向かいました。風間氏の別荘の庭に赤い祠があるから、風間夫人は女狐呼ばわりされるのでしょうか。私には、風間夫人は目が大きく色白の頬のふつくらしした上品な女性で、狐には似ても似つかない方です。

いずれにしても、風間洋一のイメージを使用するには、遺族感情を共有する風間夫妻の了承を得ないと、後味が悪いものになります。

もちろん柳田の私有地である別荘の敷地に建てる石碑で、風間夫妻が不承知でも法的に建立に問題はないと思います。敢えて言えば、

事故から十五年も経ったのに死者の肖像権と
いうものがその遺族にあるかという裁判沙汰
でしよう。こんなことにまで法律が入って来
るものかと複雑な心持になります。
磐越自動車道に入ったら貸切状態でした。
たまに車が見えたら覆面パトカーかな、と柳
田は笑ってスピードを落としていました。前
方には、宝の山よ、と唄われる会津磐梯山が
盛夏の空の下に大きく立ちはだかっていまし
た。
十九
別荘には午後の意外と早い時間に到着しま
した。
一朝早かったから昼寝とするか。」と柳田は本
当に眠いらしく目をこすりながらソファに横
臥しました。が、逆に夫人は窓を開けて風を入
れたり「雑草が伸びて庭の手入れが大変だわ。
あら、いつの間にか紅薔薇の花がこんなに沢
山咲いていますわ。」と眩きながら、雑巾を手
に慌ただしく動き回っていました。私は紅薔

薇の繁茂した庭をしばらく眺めていましたが、
やはり所在無くあてがわれた二階の自室へ入
り持参した荷を解きました。朝昼晩の三食す
べてを柳田の世話になるのも気が重く、乾麵
類やインスタントのつけ汁などを広げてはみ
たものの、近隣農家の朝市やコンビニエンス
ストアが近くにあったことに今頃になって気
が付いて、無駄骨を折った変てこな気分にな
りました。

高原とはいえ真夏の直射日光は強烈で外出
の気分にはなりません。早朝からの長旅の疲
れは覚えましたが睡魔は襲って来ません。ぼ
んやりと窓際の椅子から真昼のルリ色に光る
湖面を見やりつつ、持参した中原中也詩集の
ページをペラペラとめくりました。風がある
ようで、湖の対岸の方は白波が立っていました
た。たまたま開いたページに目を落としたら、
これがどうなろうと、あれがどうなろうと、
そんなことはどうでもいいのだ。

とか、

人には自恃があればよい！
その余はすべてなるままだ：
とか、
平気で、陽気で、藁束のようにしんみりと
朝霧を煮釜に蒔めて、跳起きられればよい
い！
の『盲目の秋』の第二章のフリーズが目に沁
み込んで来ました。偶然ですけど、先日湖
面を眺めながら不意に口をついて出た第一章
の
風が立ち、浪が騒ぎ、無限の前に腕を振る。
その間、小さな紅の花が見えはするが、
それもやがては潰されてしまう。
に続く部分です。柳田夫妻も私も、この詩文
を、今こそ肝に銘じておくべきことのよう
に感じました。
「お部屋の埃を払いましょう。」その時頬かむ
りをした夫人が濃いアイラインを引いた目力
のある薔薇色の肌の顔に笑みを浮かべ、ハタ
キと掃除機を手に部屋に入って来ました。私

も笑みを返しながら廊下に出て清掃が済むのを待ちました。柳田夫人の上背があり胴がくびれ肉の熟れた腰回りの肢体は、風に揺れる樹木の梢のようになり、わざと見せ付けているのではないでしょうが、膝を大胆に開いて大きな腰を沈めて床を撫で、スカートの太ももの奥の細く白い下穿きまで覗かせ、次の瞬間には胸元がのぞく程に高く手を伸ばして棚をハタキで叩いたり、まるで女郎蜘蛛が巢を張るような敏捷な所作をしてみせ、私は女性の働く姿態に色香を感じてしまい変てこなことでした。

夫人は掃除機のスイッチを切ると「お茶にしましうか。」と台所に行つて日本茶の缶を二本手にして戻つて来しました。

「疲れましたわ。大雑把だけど室内のお掃除は終わりにしましう。明日からはお庭の手入れが大変ですわ。」

「僕も手伝いますよ。」

「いいえ、お客様は、ごゆつくりお寛ぎ下さ

いませ。主人がやりますわ。機械が草刈りし
ますからご心配なさらないで下さいね。」
「では、お言葉に甘えて湖の早朝散策でもし
ていますよ。」
「では風間さんの奥様とお会いなさるのです
か？」と突然上目遣いに私を見つめた柳田夫
人の鵯色の眼に何かしら不安の色が宿ってい
ました。
「会ってみたいような、会いたくないような
複雑な気持ちです。」と私が正直に心境を告白
しますと「それはへんてこりんですわ。」と
笑われました。
その日の夕飯は近くのペンションが経営す
るプチレストランで外食することになりました
た。柳田は熟睡したようで、浚刺と「前途を
祝いワインで乾杯といこうや。」と嬉しそうで
した。
夕刻、ガラス工芸品のコレクションのデイス
プレイで装飾を凝らした店内に入りました。
間接照明を駆使して豪華な都心のレストラン

の 雰 囲 気 を 醸 し 出 し て い ま す 。
「 カ レ ー ラ イ ス と か チ ャ ー ハ ン は メ ニ ュ ー に
無 さ そ う だ な 。」 と 私 が 軽 口 を た た き 、 三 人 で
空 い て い た 四 人 掛 け の テ ー ブ ル に 着 く と 、 経
営 者 兼 店 員 と い っ た 風 の 中 年 男 性 が 店 の 奥 か
ら 「 い ら っ し ゃ い ま せ 。」 と 本 日 の コ ー ス は あ ち
ら に な り ま す 。」 と コ ッ プ の 水 を 置 い て 壁 掛 け
の 黒 板 を 指 差 し ま し た 。 前 菜 、 グ リ ー ン ア ス
パ ラ ガ ス ホ ワ イ ト ソ ー ス 、 パ ム プ キ ン ス ー
プ 、 ニ ジ マ ス の 包 み 焼 き 、 牛 肉 の ブ ル ー チ ー
ズ 炙 り 焼 、 冷 ス イ カ 。 私 は 、 都 会 に い る よ う
な 結 構 な デ イ ナ ー コ ー ス 料 理 が 丸 文 字 で 記 載
さ れ て い る の を 目 に し て 、 こ の よ う な 僻 地 に
来 て こ そ の 郷 土 料 理 を 食 べ た い の に 変 て こ な
気 持 ち で し た 。 ク ラ ッ シ ッ ク の B G M が 流 れ 、
宿 泊 客 ら し い 若 者 ら が 静 か に 談 笑 し 食 事 を 楽
し ん で い ま し た 。
「 俺 達 で ず い ぶ ん と 平 均 年 齢 を 上 げ て い る よ 。
亜 希 子 達 も 、 こ ん な 風 に 食 事 を し て い た の か
な あ 。」 と 柳 田 が 侘 し そ う な 顔 を し た 時 「 あ

ら！風間さんだわ。」と呟いた柳田夫人の目の色に緊張が走っていました。私が夫人の視線の先を追って振り向くと、何と白のジャケットに黒のスカート姿で盛装した風間夫人が玄関先に立ち、戸惑った様子で店内を眺めていたのです。プチレストランで、すでに他のテーブルは塞がっていて空いているのは、柳田夫妻と向かい合っていて座っている私の隣だけでしただけ。私が気を利かせて風間夫人を迎えに出て、はじめて彼女が小さな紅の髪飾りを留めているのに気がつきました。『もう少し経って出直しますわ。』と遠慮する彼女を説得し、合席させるのに苦労しました。私の向かいには柳田が座っていましたので、否応なく柳田夫人と風間夫人は対面して座りました。『これも何かのご縁、この春に湖の辺でお会いしたのもご縁があつたからだと存じます。』折角の神様か仏様の思し召しですからご一緒

しましようによ。」と柳田夫妻の前に案内したの
ですが、双方ともよそよそしく大袈裟に恐縮
していました。髪を華やかに外巻きにカール
させた風間夫人は、この店の常連客のようで、
「このペンションのご夫妻は、この夏からレ
ストランをオープンになさったのです。道路
が便利になってお客様が増えたからですよ。
ご夫婦とも脱サラで、お二人で料理専門学校
に通って習って来たそうです。奥様の方が
良い腕をなさっていて、専ら厨房にいらっし
やいますのよ。オホホホ：「ナプキンで口元
を覆い、オーダーしたロゼのグラスワインで
陽気になっていました。
「ご主人とご一緒かと思いましたが探りを入れました。
「それが又体調を崩しまして、会津若松の病
院に入院中ですわ。」娘婿夫婦を呼んで看病し
てもらっているとのことでした。
「それはご心配ですわ。」天敵に遭遇したよう
に寡黙になつていた柳田夫人が、やつと口を

開きました。――心配ばかりしても仕方がないですわ。先程、娘からの携帯電話で退院の目星はつきましたわ。」「丁寧に眉を描き、つぶらな瞳の二重の上瞼と下瞼に濃いアイラインを引き派手なメイクをした風間夫人の顔は、照明のせいで妖艷に華やいで、柳田夫人の顔を正面から見据えてピシヤリと鞭打つように返した感じがしました。柳田夫人は、相手の目線から逃げるように、脇の夫の方に顔を向け小声で何事か囁いていました。何かの弾みで拗れて仕舞った目力のある女同士が狭いテーブルを挟んで向き合っているのが、私には壁の小さな紅のランプの照明のせいか、真ん中で小さな紅の花が咲いては火花みたいに千々に碎け散る睨み合いをしているように見えました。同年輩の女二人の関係を修復する手立てはないものかと思案しているとおのずと寡黙に食事をすすめることになり、変てこなことです。柳田だけは商売人らしく、上辺だけのお愛想話をしています。

いるようでした。

彼は恩着せがましくなるせいか、遠慮して風
間家の菩提寺に出向き息子さんの墓前に掌を
合わせて来たことは言い出しませんでした。
第三者の私が気を利かせて教えてあげべき
ことでしたが、夫人同士の葛藤ばかりを慮つ
て口にせず、実に変てこなことでした。
その席で話の花が咲きようもなく、食事が終
わると柳田夫人が「わたし達お先に失礼しま
すわ。」とそそくさと席を立ち、レジに向かい
ました。その後姿を凝視する風間夫人の濃厚
な目付きは、一瞬、鋭く光ったようで、確か
に獲物に狙いをつけた獣の眼のようでした。
二十
「全く香水の匂いが鼻について、折角のお料
理の味が台無しでしたわ。こちらは普段着な
のにお綺麗な洋服を召されてチャラチャラ
とお話なさって、五木さん、どう思われま
す？」
店を出ると即座に柳田夫人が私に寄って来ま

した。そう問いかける彼女の薔薇の香りの香
水もかなり鼻腔を刺激するものでした。別荘
に戻るには、凡そ五分の道のりの林道を歩き
ます。夏の高原の夜空には煌々と星が瞬いて
いました。――
――まあ、奥さん、僕が風間さんを合席させた
張本人ですから御免なさい。だけど仲良くす
る良い機会と閃いたものですから許して下さ
いよ。」
――美代子、もう良いよ。機嫌を直して星空を
見てごらん。亜希子も風間の息子さんも星に
なつて光つていると思おうよ。」
――そんな気休めをおっしやつて！――
――でも、風間の奥さんを納得させないと、慰
霊の石碑を建てる話が進まないのですよ。」
私は、一寸論すような語気で柳田夫人の顔を
見つめました。夜目、遠目と言いますが、彼
女の横顔には婚礼の花嫁姿を眺めた残像のよ
うな、若い日の名残を感じさせる豊かな色香
がまだありました。

「自分の敷地に自分の資金で石碑を建てて何処が悪いのかしら。あんな方の了承なんて必要ないでしょう。ねえ、あなた！」と夫人は焦れたように柳田のヒジのあたりを掴んで揺すりました。」「そうかな。でも事故の当事者の納得を得てから建てるのが筋だよ。仏様でも神様でも他人様を勝手に祀り上げて良いものかな？」柳田の思案は当然だと私も思いました。自分が良かれという思い上がりでなすことは、往々にして偽善であることもあるからです。いずれにしても、私は自分が巻き込まれたこの問題に解決の糸口を見つけないと立つ瀬がありません。」「明朝、湖の花壇まで散歩して来るよ。僕も何か役に立ちたいよ。」と私は重苦しい空気を打ち払うように柳田夫妻に言いました。別荘の玄関先に立ち止まり、改めて三人で夜空を見上げました。夏木立の上は降るような星屑でした。

「まあ、北斗七星だわ！」と夫人は北の空を
見つめて七つの星を数えていました。
「あ、このダヴリュウがカシオペアだよ。」と
柳田が中天をしたり顔で指差しました。「私が
目を凝らすと灰白く天の川が流れていました。
私はかつてデザインに係わった職業柄、星座
の知識は人並み以上にありました。早速、さ
そり座の尾っぽの赤いアンタレスを見つけて、
先程の夫人同士の睨み合いの真ん中で光って
いた小さな紅の花のごとき豆ランプを連想し、
ひとりで変てこな気持ちになりましたが、も
ちろんそんなことは口に出来ませんでした。
その夜は早起きと長旅とワインの酔いでたち
まち熟睡してしまいました。
早寝早起きで寝覚めた私は、そっと別荘を
抜け出し湖に向かいました。夜明けの湖面は
藍色と表現するのでしょうか、陽が昇ってか
らとは趣が違います。私は花壇のそばのベン
チで、風間夫人がきつとやって来ると信じ、
おもむろに明るみを増していく湖面の遥かを

眺めやりながら待っていました。つい、つい、
刻々と色を変える湖に氣をとられて見落として
ていました。が、フェンスに花束が括り付けて
あるのに、やっと氣が付きました。これが命
日になると、誰かがいつの間にか捧げている
ものかと近づいてまじまじと観察しました。
夏花ばかりを大雑把に束ね、包み紙も家中の
間に合わせのものらしく、とても花屋に頼ん
だものには見えません。朝日がだいぶ昇り、
私は夏帽子を被って来なかったことを悔やみ
ました。高原の朝とは言え、真夏の日差しは
ジリジリと皮膚を刺すようでした。花壇では
ヒマワリがあたりを睥睨するように咲き誇り、
その下のサルビアやカンナのは赤が目には沁みま
した。そこには夏草が一本も生えていないの
で、夫人は毎朝来るとは限らないのかと半ば
あきらめて立ち上がった時、遠くに小さな白
い影がようやく見えしました。近づくにっれ洒
落た白のパンツルックの風間夫人の姿が明瞭
になつて、ほっと一息つきました。

「奥様、おはようございます。昨晚は失礼しました。」と私は慇懃に立礼しました。

「いいえ、こちらこそ奇遇でしたわ。」

「ご主人のご様子は大丈夫ですか？」

「ええ、昨夜の娘婿の電話では一過性の腎臓結石と分かり、この村の診療所の通院でも治るそうで、やっと安心しました。」

風間夫人の声は湖面の小波に共鳴するように、

あたりの空気を震わせました。

「毎朝、花の様子を見回りに来るだけで、特にやることはないですわ。自分で育てた花は可愛くて、眺めるだけで満足していますの。」

と湖に向かってベンチに座ったので私も並んで再び座りました。

「今年も花束が捧げられていますね。」

「ええ、本当にお礼を申し上げますのですね。ど、どなたがなさっているのか皆目分からな

いのです。」と困惑顔でした。

「柳田君にも分からないそうです。」

「夕べの柳田さんの奥様って怖かったわ。わ

たしの目と鼻の先で、お肉を噛み付くように
お召し上がりになられるのです。わたし
は噛み付かれるような悪い夢を見そうで心配
でしたわ。」私は笑う訳にもいかず黙って聞い
ていました。
「わたし、石なんて嫌いですわ。」
風間夫人の口から唐突に出た言葉に驚いて、
思わず彼女の白い横顔を凝視して質問しまし
た。
「石がどうかしたのですか？」
「わたし、石が憎らしいのです。息子のオ
トバイは置石に乗り上げてからこの湖の絶壁
を落下したのです。柳田さんのおっしやる慰
霊碑だって所詮は石で作るものでしょう。」
「石碑だそうです。最高級のイタリアの大理
石の石材を輸入してでも作りたい、と言っ
ています。」
「偶像崇拜はわたしの趣味にありません。」と
彼女が吐き棄てるような金切り声を上げたの
で私はあわてました。私の緊張で血走った素

っ 頓 狂 な 顔 を 見 て 風 間 夫 人 は 話 題 を 変 え た よ
う で す 。
「 わ た し っ て 、 憎 悪 剥 き 出 し か し ら 。 変 て こ
で す わ ね 。 柳 田 さ ん の ご 夫 妻 に 以 前 、 お 嬢 さ
ん の 方 か ら ツ ア ー に 誘 っ た の で し ょ う 、 と わ
た し が 口 走 っ た こ と が 、 互 い の 心 の 行 き 違 い
に な っ た の か し ら 、 お 互 い に す っ か り 険 悪 な
仲 に な っ て し ま い ま し た わ 。 」 と い つ も の も の
静 か な 口 振 り に な っ て い ま し た 。
朝 と は 言 え 、 真 夏 の 日 差 し は ま す ま す 強 烈
に な り ま し た 。 ど こ か 遠 く で ガ ラ ガ ラ ジ ー ジ
ー と 山 蟬 の 声 が し て い る 以 外 他 に 物 音 は し ま
せ ン 。
「 帽 子 は ど う な さ っ た の で す か ? 」 と 私 が 夏
陽 の 直 射 を 浴 び て い る の を 風 間 夫 人 は 気 遣 っ
て く れ ま し た 。
「 え え 、 も っ と 早 く 戻 る 積 も り で し た か ら 部
屋 に 置 い て 来 ま し た 。 」
「 そ れ は い け ま せ ン わ 。 高 地 の 紫 外 線 は お 肌
に 良 く ご ざ い ま せ ン か ら 早 く 戻 り ま し ょ う 。 」

今朝は花壇の手入れも要らないようですわ。」
と立ち上がって背伸びをしました。腰伸ばし
のストレッチでしょう。私も思わず彼女の動
作の真似をして顔を見合わせたら、夫人は可
笑しそうに声を立てて笑ったのです。
「若い時分、あなたの回りは女性で賑やかだ
ったでしょう。わたし達がずっと若かったら、
きっとわたし、あなたのお嫁さんに立候補し
ていましたことよ。」

「えっ、ご冗談でしょう。」

「ええ、もちろんですわ。」風間夫人は赤い唇
を綻ばせ白い歯をこぼし満面の笑みを見せま
した。その折の頬の深い笑窪は、今なお残像
として、私の瞼の裏に焼き付いています。
「僕の青春時代は仕事一本槍で、女の子と浮
ついた思い出なんか何もないですね。仕事の
憂さは、大衆キャバレーでホステスと踊った
り、卑猥な笑い話をして晴らしましたよ。」
「どんなお仕事をなさっていらっしやっただ
ですか？」

「いわゆる3Kの建設業界一筋で定年ですよ。
きつい、汚い、危険、それに臭いを入れたら
4Kになりますね。」

散策道の処々には紅や白の夏花をつけた灌
木がありました。

「あら、たくも鉄工所ですから同じようなも
のですね。主人が娘婿に経営を譲るまで、わ

たしも男衆と一緒に汗水流して働いたのです
よ。主人ったら、昔の国民は国のために血を

流した、今時の者はせめて社会のために汗を
流せって、よく朝礼で工員達を叱っていまし

たわ。」

湖はいつの間にか日が昇ってしまい、真昼
と変わらぬ夏の陽のせいであメラルドグリッ

に色を変え輝いていました。湖畔の散策道か
ら、緑深い別荘の丘へと直線を描く舗道に曲

がった時には、私達の肩は軽くぶつかり合
う程に接近していました。

「あなたは柳田様宅にいらっしゃるのですか
ら、どうしても最真目になるでしようけど、

あ の 奥 様 と わ た し の ど ち ら が お 好 き で す か ？ ー

私 は 唾 然 と し て 唾 を 飲 み 込 む と 、 し ば し 言 葉 を 失 い 無 言 の 態 を 余 儀 な く さ れ ま し た 。 こ の 白 樺 の 肌 合 い を し た 婦 人 は 美 声 で も あ り 、 出 合 っ た 当 初 か ら 魅 力 的 に 感 じ て い ま し た 。 柳 田 の 奥 さ ん と は 、 私 が 還 暦 を 過 ぎ て か ら 知 り 合 っ た の も 同 然 で あ り 、 個 人 的 に 特 に 親 密 な 話 も し て い な い の で す が 、 二 重 瞼 で 切 れ 長 の 濃 い 目 鼻 立 ち を し た 情 熱 的 な 感 じ の 女 性 で 、 遠 目 に は 近 世 ヨ ー ロ ッ パ の 王 家 の 肖 像 画 に 描 か れ た 貴 婦 人 の よ う な 気 品 が あ り ま す の で 、 即 答 に 窮 し て し ま い ま し た 。 道 端 に は 黄 や 紫 の 名 も 知 ら ぬ 草 草 の 花 が 咲 い て い ま し た 。 高 原 の 花 々 は 、 平 地 よ り も 一 際 色 彩 が 鮮 や か な も の で す 。 私 は 腰 を 屈 め て そ ん な 花 々 の 頭 を 撫 で な が ら 「 す み ま せ ん 。 他 人 (へ よ そ) さ ま の 奥 様 を 見 較 べ る 趣 味 は あ り ま せ ん の で : 」 と 苦 笑 交 じ り に 辛 う じ て 答 え ま し た 。 日 常 、 鉄 工 所 で 男 達 を 指 図 し て 過 ぎ し て い た 女 性 の 凄

さに感じ入ってしまいました。
「それは失礼を申し上げました。殿方は美人
コンテストがお好きだから訊いてみただけで
すわ。お氣になさらないで下さいませ。」と微
笑んだ彼女の白い顔に、私は艶やかな色香を
感じてしまいました。
湖岸からだいぶ奥まった緑濃い木立の中に、
風間氏の白亜の壁の別荘が山蟬の声で囲まれ
てありました。私は朝の散歩を風間夫人と一
緒した延長で、誘われるまま朝食に招き入れ
られました。帽子を脱いで化粧を直した彼女
は、豊富な黒髪に小さな紅の髪飾りを留めて
現れ、私はその鮮やかさに目を奪われそうで
した。今、この山荘に二人きりだと思ったら、
夫人が背後から食卓に腰を屈めて皿を置く際
の、目の間に迫った彼女の透き通るように
白く豊かな胸元に気もそぞろになり、思わず
下半身に充血を覚えるなど、変てこな気分
なるのを懸命に堪えて平静を装いました。
「娘からメールが入っていますわ。主人は明

日にでも退院できるみたいですね。一つ位病氣持ちの
「一病息災と言いますね。一つ位病氣持ちの
方が健康に気を付けますよ。」
ダイニングルームでサンドイッチとサラダの
朝食を済ませると、一面の緑の庭に面したり
ビングルームに案内され、食後の紅茶を飲み
ました。庭の真ん中に樅の木が聳え立ち、緑
陰に白い机と椅子が揃っています。芝生の庭
の周囲には白樺や楓などが緑の枝葉を伸び伸
びと茂らせていました。一本の喬木を中央に
据えるだけで広々とした西洋庭園を演出する
とは、腕の良い庭師を雇ったと感心して眺め
ていました。ただ庭の一隅に赤いお稲荷さん
の祠が祀ってあるのには違和感を覚えました。
もちろん、そんなことは口にしません。
「お稲荷さんは、元々東京のお家にあつたも
のを千葉に遷し、別荘を建てた時にこちらに
又遷したものですわ。リngoが大好きなんで
すよ。」と笑った。何か狸などの小動物が夜中
に食べに来ているに決まっていますと思いまし

たが黙って聞き流しました。
「樹木で囲まれた生活って美しいものです
ね。」と私が世辞を口にしたら、風間夫人はち
よっと中座し年季の入ったアルバム帳を二冊
抱えて戻って来ました。若い頃の風間夫妻の
写真、例の物故した長男を始め子供達や親族
縁者、友人らの記録がびっしりと詰まったも
のです。想像した通り、写真で見る若い日の
風間夫人は、絵本にある白雪姫みたいな新雪
のように輝く美貌をしていました。写真の脇
のペン字の小さなキャプションで、この夫人
の名前が『麗子』と知りました。本当に名前
通りの麗人だと思いました。が、口にはしませ
んでした。これが夫人の自慢でこのアルバム
帖を出して見せたのかも知れませんか。風間氏
も頑丈な偉丈夫そのもので似合いの夫婦と思
いました。私の傍に寄って来た夫人のくちな
しの白い花のような甘い香りを嗅ぎつつ、一
枚一枚の写真への思い入れを聞き流してペー
ジをめくっているうちに、時間がどんどんと

過ぎてしまいましたが、鳴りました。私は夫人の白い顔がみるみる蒼ざめるのを見つめて、誰から一体何の電話だろう、とそばで緊張して耳を敬てていました。た。二一

その日の昼食時、私は柳田夫妻に風間夫人から朝食を頂いたと告げました。柳田の顔色には何の変化もありませんでした。しかし午前中テニス仲間と一汗かいて来たという夫人は、シャワーを浴び化粧を直して綺麗に描いた眉を顰めると、「五木さんほどの年になっても、やっぱり紳士は淑女がお好みなんですわね。」と私には皮肉たつぷりに聞こえる言い方をしました。

「なあに、男というものは年をとるほど、年増女、いや熟女に興味を惹かれるものさ。五木君は芸術を解するから、殊更その傾向が強いと思うよ。」と柳田が茶化しました。私は「今更この年で、誰が誰を好きになってもどうな

るものでもないでしよう。』と相槌を求めるように夫人の顔を見つめました。五木さんの顔「あら、女の勘違って怖いわよ。」「に、風間さんの奥様が好きって書いてありますわ。』と夫人が面白がって冗談を続けたのが、逆に私を冷静にさせ、真顔で「実は大事な情報」を耳にしたんですよ。』と二人に諭すように、今朝方村役場から風間夫人に架かって来た電話の内容を切り出しました。別荘地の近くを走る街道に『道の駅』が建つことが本決りになり、そこで地場産業として村ブランドの蕎麦や山菜やヤマメ、イワナなどの甘露煮などの加工品などを特売するのは勿論のこと、観光の目玉として『道の駅』から湖岸まで森を拓いて白樺の並木路を敷き、かつてのリゾートホテル誘致先の造成地がバブル崩壊で草原となっていている場所に、別荘管理会社と役場と県が資金を融通し、第三セクタ―経営のホテル設置の計画がある旨をかいつまんで、深刻な表情で耳を傾けている夫妻に

説明しました。「おい、それって事故現場じゃないかよ。」と柳田が大声を上げました。「それで風間夫人が息子の慰霊のために作った花壇の場所には時計台みたいな鐘楼が出来るようだよ。」

「村役場の事業かい。この別荘地のキャッチフレーズは『日本のスコットランド』だったよ。湖水地方として本格的な村起こしをする気かな。」寝耳に水のように柳田の声がうわずっていました。

「並木路の敷設など土木は村の事業だろうが、ホテルの建設や経営は、ほとんどこの別荘開発会社がやるとのことだったよ。」

「鐘楼を建てる位置が風間の奥さんに花壇を提供している所とは一悶着ありそうだな。」と柳田は、自分の娘の事故現場でもあることを失念したのか他人事（ひとごと）のような口振りでした。

「あの奥様、何とご返事なさるのかしら。」

柳田夫人に、風間夫人への同情心は微塵もないと思いますすが、真剣な眼差しで私の顔を見つめて問いかけました。

「ええ、風間さんの主人が間もなく退院して戻って来るそうで、一緒に村役場の担当者を訪ねると思います。」

「その場所は、亜希子の事故現場でもあるから、我が方の問題でもあるよ。」やつと柳田は我に返ったようにで憚然とした顔をしていました。

私は、明日にでも主人の風間洋平氏が別荘に戻るはずだから、両家で役場の関係者と会うように、先ずは男親同士で交渉したらどうかと忠告しました。できることなら何かとわだかまりを持つ両家の奥様方は交渉の場から外れた方が良いかと思いました。が、さすがにそれには口にできません。

「俺が風間の主人に話しをつけるよ。明日にはここに帰っているのだろう。」

柳田は落着きを取り戻し、何か一気にこの間

題に決着をつけたいような思い詰めた表情に見えました。私は午後の睡魔に襲われたので、ごろ寝でもしようと二階の自室に入りました。窓から望む湖面には大きな白雲が映っていました。雲の姿は刻々と移り上空は風が騒いでいるように思いました。デザイナーとしての知識から今の湖の色は琥珀色だと納得すると、枕を引っ張り出して床の絨毯に倒れこむように横たわれました。夢うつつにどこか遠くで女同士が言い争いをしているようでした。「あなた、今、馬鹿とおっしゃったわね。」「おたくは、もう年のせいで耳がおかしいのと違いますか。わたしは馬鹿げた、と言っただけですよ。」

「馬鹿なんてお下劣な言葉、東京の人は使わないのよ。あなた、田舎の育ちでしょう。」

「東京が何ですか。ついこの間まで武蔵野とかいう野っ原で、猪とか狸とか貉（むじな）の棲家だった寒村でしゅう。いにしえの奈良の

都や京の都の方が本当の都というものですわ。
よおく覚えていらつしやい。」

「今は、政治も経済も文化も東京が発信地で
す。花の都とは東京にだけ使える言葉ですよ。

この国では、東京以外は全部田舎と呼ぶので
す。あなたこそ、よおく覚えていらつしやい。」

口喧嘩のような声は次第に遠くなって聞こえ
なくなりました。そのうちに私は身体の熱つ
ぽさを覚えてふと目覚めると、ピツタリと柳
田夫人が添寝していたのには驚きました。膚
の触れ合った部分が汗でじつとりと湿り、オ
ーデコロンと汗の混じった刺激臭に思わず咽
返りました。私が身を動かしたら彼女も目を
覚まし「午前中、お庭のお掃除をサボって久
し振りにテニスコートで体を動かしたら、昼
からもお客さんが見えて、もう疲労困憊です
わ。」と耳もとで囁かれました。

「柳田君は？」私は内心穏やかでなく反射的
に訊いたら、夕方までゴルフの練習場に出か
けて帰って来ないそうです。

「たくとはもう長年のご無沙汰なのですよ。」
と突如上から首つ玉に嚙り付かれ、私もとっ
さに男の本能で彼女の唇を探り当てるとかぶ
り付くように舌を吸い込みました。しかしも
う壮年の肉体の衰亡は顕著でセックスのプロ
セスは淡泊なもので、それ以上の進展は全く
ありません。私の股間の一物もなまはんかで
覇気も精気もなく情けない限りでした。私達
は長いことトリモチでくっ付いたように身体
を重ね合わせ、チロチロと舌を這わせ絡ませ
合って、交互に唾液を啜ったりするだけでし
た。人間も官能の精が枯渇して来たら、まる
で童子と少女に立ち返ったように他愛もない
戯れの性愛をするものです。ようやく、気だ
るそうに口を離すと夫人の声が涙声のよう
に、
「五月に体調を崩された風間さんのご主人を、
たくが車で会津若松の病院に何遍も送り迎え
してあげましたのよ。ご主人が入院なさった
時は、たくとあの奥様の二人っきりのドライ

ブで戻って来るのですから、途中二人で何を
しでかしていたのか分かったものではありま
せんわ。」

「奥さん、それは邪推ですよ。」

「あら、たくの車の助手席にあの奥様の何の
香水か分からないいきつい匂いが滲みついて、
消臭剤で消すのに往生しましたわ。今日だっ
て、本当にゴルフかどうか怪しいものですわ。

今頃はあの奥様と湖水めぐりのドライブ中か
も知れないですわ。」と口を尖らせて亭主を疑
うとは、女の嫉妬心を越えて滑稽さを覚えま
したが、私は笑うわけにもいかず表情を崩さ
ないで黙っているしかありませんでした。
「お食事の準備がありますわ。」

やがて夫人は立ち上がり部屋から出て行こう
としました。私は、まだ頭の芯のどこかが紅
薔薇の色香に酔い痺れた気がして、眼をこす
って陶酔を打ち払うように首を左右に揺すり
ながら辛うじて正気になりました。私が緩慢
な動作で半身を起こすと、寝乱れた長い髪を

細い指先で整えている柳田夫人の陰影が逆光のせいか黄金色の色つぼさを帯びていて、伝説のローレライを連想してしまいました。彼女には、陶然と床にしゃがんだままの私に、薔薇色の肌の色を自慢するようになんかさんみたい。白い塗りのお化粧と違うでしょう。」とおどけました。夕刻近いのに窓の外はまだ明るく、湖水はルリ色に変化し、斜光に青く光つていました。この空は当分暮れそうにないと思います。――

私は、傍でワインの晩酌をする柳田に軽い背信の後ろめたさを感じ、黙っておれず真つ先に口を開きました。

――この辺のゴルフ場って、急に行ってもプレーできるものかね？」

――それ位マネージャーが面倒見ってくれるよ。適当なメンバーに混ぜ込ませてくれるよ。」と教えてくれました。夫人にも何か話しかけな

いと心が落ち着きません。

「奥さん、昼下がりにどなたか見えていませ
んでしたか？」私は夕飯の準備をしている夫
人にすっ呆けて尋ねました。
「テニス仲間の奥さんとずっとお喋りしてい
ましたわ。わたしが、今日試合してコテンパ
ンにやつつけたから、きつと今後お手やわら
かにと挨拶にいらっしやつたのよ。寝入りば
なでうるさかったでしょう。」と自慢そうに腕
をさすつて笑いました。
その時にクサヤのお裾分けがあつたそうで
す。親の仕事の関係で子供の頃を関西で過ご
した柳田夫人は京風の薄味に舌が慣れていて、
強烈な発酵臭のあるクサヤみたいな魚の干物
は反吐が出そうに苦手だそうですが、折角の
好意を無にするわけにもいかず「主人の大好
物ですから。」と受け取つたと今度は大笑い
をしました。
「俺もこの魚の腐った味は分らないよ。だ
が食べ物にもフェチがあるよ。君が好みの納
豆だつて、大方の外国人には、ただ臭いだけ

の変な食い物だよ。」と柳田は夫人に蒔蓄を垂れました。

「フェチって、エッチな人のことでしょう？」

と夫人は不思議そうな顔をしました。

「一般的にはフェチズムって、女のお尻とか

オッパイ或いはパンティや靴みたいなパーツ

に異常な性欲を刺激される奴や、偏愛者をい

うのだね、幼女しか愛せなかったり、中には

お婆さんが好みの性愛があったり、肥った女

体にしか興味がなかったり、と変態的なこと

を広く指す言葉だね。酷いことになると死体の

姦淫にしか性欲が湧かないというから驚きだ

よ。これは犯罪だね。」と柳田がやけに詳しく

解説しました。

「老人同士のセックスもフェチかね。」と私は

柳田に内心の後ろめたい動揺を誤魔化すよう

に訊いてみました。

「俺達夫婦と風間夫婦に五木君が加われば男

女の五角関係だね。」

「男と女の五角関係って、どういう意味だ

よ。」

「五角形って、神秘的だわ。」と夫人までが意味不明なことを口走りました。

「五木君はデザイナ―で飯を食っていたのだから、その辺は詳しいだろう。」

「まあね。子供の頃、指なんかで地べたに『空の星！』と唱えながら、棒切れみたいなもので線引きし星形を描いたことがないかね。五

芒星と言いい、円に内接するように正確に書いてその頂点を結ぶと正五角形だよ。五弁の花

びらの模様にもなるんだよ。ペンタゴンと言ってる、アメリカの国防総省の庁舎がこの形なのは有名だよ。奥さんが言った神秘的とは、

二つの正三角形を逆さまに書いたらできるダビデの星の六角形でしょう。」

「そうか、イスラエルの国旗の紋章だね。」

「ダビデの星に神秘的な力があるって聞いたことがあるわ。でも五角形にも、きつと神秘的な力があるわよ。だって、似たようなものだもの。」と夫人が真剣な眼差しになりました。

「何で食い物のことから変態やらオカルトの話題になるのだよ。」

私は、そもそもその食べ物 of 話題に戻しました。

「クサヤの味覚のことから話が脱線したんだったな。」と柳田が笑ったのにつられて三人で大笑いしました。

「味覚って、生来のものですわ。今日の午後は、新潟生まれの奥様と関東風と関西風のお味の違いについて長談義をしてしまいました

わ。」と夫人は愉快そうでした。私は午睡中で、二人の婦人の話し声が夢うつつに、柳田と風間氏の夫人同士が口喧嘩しているように聞こ

えたのだと思ひ、変てこな気分になりました。

「五木君、この貰ったクサヤいらなにかね。」

「さあ、僕もいっぱしのグルメを気取って、たまに青かびチーズくらいは口にするけど、クサヤだけはその臭さに馴染めないのだよ。

言っちゃ悪いけど肥やしみたいな味だな。こっそりどこかで猫にやることだね。猫だってまたぐかも知れないよ。」と私は遠慮しました。

柳田の奥さんがクサヤの始末で困っているのをからかって、私と柳田は明日の風間洋平氏との駆け引きや村役場との交渉の成行きも忘れ、その後もフェチの話しに戻り、人糞愛好のスカトロジョーとクサヤ好みは似通っているなど下劣なネタを面白可笑しく繰り返し、その後もホモやレズなど同性愛のエロティシズム談義に夢中になり、無駄に夜更かしをして過ぎすなんて変てこなことです。

二二

風間洋平氏は鷹揚な人柄のようでした。柳田が翌朝電話をしたら即座に村役場に両方の家族らが一緒に出かけることで話が一致しました。よそ者の私が加わることに何の拘りもないのです。

「今日の午後一番で村と開発会社の関係者が待っているそうだよ。」

「お洋服、何を着て行きましたようか。慰霊碑の企画をしている遺族らしい礼装にしますわ。」と夫人はそわそわと立ち回りました。柳

田はスーツにループタイをするようにでしたが、
私は遊びがてらで衣装は持参していませんの
で、せめて真新しい開襟シャツを着て末席に
いることにしました。念のため慰霊碑の完成
予想図のデッサンも持参することになりました。
かいましました。柳田夫人は風間夫人に張り合っ
ているようで、普段より濃いアイラインに付
け睫毛を加え細く眉を描き、まさに唐詩にあ
る後宮の青蛾の女官もかくなるものかという
感じでした。彼女 ide たちは黒いセミロン
グドレスに大粒の真珠のネックレスで首元を
装い、胸に娘の形見という小さな紅の薔薇の
花のブローチを付け、指先の大きなダイヤの
指輪が夏の陽光に乱反射していました。
午後一時前、小さな木造の役場の玄関を入
ると、すでに狭いロビーに風間夫妻の姿があ
り、私の視野の中で反射的に風間夫人の姿が
クローズアップされました。彼女白い地肌
が更に白粉の上塗りです。真っ白くなってい
て妖

精のようでした。装いは黒地のツープースで
首元に大きなフリルの飾りがあり、お洒落で
増毛しているのか分かりませんが、豊富に盛
り上がった黒髪をカールさせ、例によって小
さな紅の花の髪飾りを留めているのが私の目
を惹きました。紅珊瑚が素材のケシの花の髪
飾りだと思いました。
柳田と風間氏が型通りの挨拶をしている背
後で、両夫人は案の定互いにソッポを向いて
視線を合わせません。私は柳田からごく簡単
に、「たまたま遊びに来ている友人の五木君で
す。」と紹介されました。すると風間夫人は「わ
たし、お顔だけは存じていましたわ。芸術家
でいらつしやるそうよ。」と夫に囁いていまし
た。そうこうしていると、役場の窓口にいた
年配の女子職員から二階に会議室に入って待
つよう告げられました。
「ここは標高が高いから部屋にクーラーは不
要ですなあ。」と顔色が蒼く冴えない風間洋平
氏が室内を見回して言いました。開いた窓の

そばまで緑の楓の枝が伸びていました。コの
字形に長机があったので、自然と上席に近い
方から風間夫妻、柳田夫妻、末席に私と一列
に並んで着席しました。これで両夫人が正面
から顔を合わせることはありません。
「会津若松は暑かったでしょう。」
「ええ、盆地ですからねえ、でもこっちは入
院の身で冷房の病室住まいでして、暑さ知ら
ずで過ごしましたよ。ハハハ。」と風間洋平
氏は心なしか力なく笑いしました。ぎこちなく
両家の主人が訥々と会話していると「お待た
せしました。」と五人の男が入室して来ました。
年二人が私達と真向かいの席に着きました。
先頭から三人が上席に座り、スーツ姿の青
だのは、真ん中が痩身で端正な顔付の村役場
の振興課長、右に課長と同年輩で中年の愛嬌
のある丸顔の観光係長、左には定年まで残り
数年かという感じの酒焼け或いはゴルフ焼け
かというエネルギッシュな風情の土木課長の

三人で、私達の正面の席に着いたのは別荘開発会社からやって来た二人の若手の営業マンでした。振興課長は、県庁からの出向者で着任して日も浅いとのことでしたが、観光係長はこの役場の生抜きで、二十代半ばの頃に風間洋一と柳田亜希子の事故死に立ち会っていて、何より自分の一存で、風間夫人に湖畔の花壇の場所を提供している張本人でした。まるで天井から鉛の塊が押し掛かって来るように重苦しい会議室の空気でした。最初にボソと喋り始めた土木課長の濁声がひび割れた。では皆さん、私の方から説明させて頂きます。風間さんの方には電話で連絡しましたが、この辺境の地にも交通のアクセスが良くなつて『道の駅』が出来ることになりました。別荘にお住まいの方々には村の発展のために大変お世話になっていました。足に向けて寝ないほど感謝しております。しかし村と致しました

ては、独自に予算を確保していかないと、今後は国からの財政援助が厳しいものと予想されまして、何としても財政破綻だけは絶対に避けないと村が消滅してしまいます。何卒、ご理解をお願い致します。それで、『道の駅』を活用してこの湖水地方を大いにキャンペーンし、日本のスコットランドとして売り出しをしたたいのです。この風光明媚な湖畔にホテルを建てます。今こそ、この豊富で良質な出湯を利用してホテルを建て、秘湯として旅行ブームの全国に宣伝し、村の発展を考える時期なんです。基幹産業の目玉は豊富な地場の山菜です。テンプラでも和え物でも漬物でも何にでも加工しお客様に食して頂けるのです。何と言っても春は、露の臺、川の芹、アケビの芽、コゴミ、カタクリの花、行者にんにく、山ウド、ゼンマイ、ワラビ、それに竹の子、夏になると、キクラゲ、イワブキ、ジュンサイ、ハナビラダケなど夏茸類、秋ともなれば、ナラタケ、ハリガネダケに山ブド

ウ、アケビ、マタタビ、山栗、ブナの実、それ
れに皆様お馴染みのシイタケ、シメジ、ナメ
コ、マイタケ、マツタケです。冬場でも、百
合の根、寒ワカエ、ムキタケの珍味が楽しめ
るのです。これらに高原野菜を入れて朝市を
立てるのです。又これらの素材を生かした料
理や菓子や加工品も売ります。山菜だけでな
くマスやイワナやヤマメの養殖場もあり、甘
露煮など加工品の販売も促進します。これか
ら地ビールや地ワインの開発にも取り組みま
す。それからから大手のレストランチェーンのオ
ーナールに呼びかけて郷土料理店の経営者の誘
致も計画しています。私は、原稿を読まれて
いるようで睡魔と懸命に戦っています。上
席の三人を眠気覚ましに見ると、真ん中の振
興課長はきりつとした視線で前方の壁を睨み、
観光係長は、なぜか俯き加減で力ない視線が
斜め下の床の木目でも数えている様子でした。
私の眠そうな眼を意識したのか、土木課長の
声が突然割鐘のようにボルテージを上げまし

た。観光係長の顔がピクツと真正面を向きま
した。した。何と言ってもお客様を惹き付けるには観光
の目玉がいります。そうです、鐘楼を建てる
のです。湖には釣鐘が似合うのです。愛です。
希望です。平和です。日本は世界で唯一の被
爆国なのです。そうです。老若男女、夢が一
杯の若い人達にも、秋霜烈日の人生の時を刻
んだ実年の人達にも、湖に向かって愛と希望
と平和の鐘を撞いて祈ってもらうのです。永
久に変わらぬ誓いを立ててもらうのです。後
は観光係長が説明します。」と言い終わると先
程の受付の女性が話の途中に置いていった湯
飲みのお茶をグイっと飲み干し手元の資料に
眼を落としました。この人は労働運動のアジ
テーターの経験者かと思いました。
土木課長は座ったままで話を終えました。が、
観光係長は律儀に立ち上がり緊張した顔で
我々の方に一礼すると小さな声で喋り出しま
した。

「土木課長からの話を補足させて頂きます。」
『道の駅』に休憩で寄られた観光客の皆さん
に湖畔の展望台まで脚を伸ばしてもらい、絶
景の湖面や山々の眺めを楽しんで頂くのです
が、そこで一番喜んでもらえるのが、とんが
り帽子の時計台みたいな洒落た建物があつて、
湖上に響き渡る清々しくも神々しい鐘の音を
撞けることだと考えました。『道の駅』から森
を切り拓いて歩行者やレンタサイクル向けの
白樺の並木道を通します。途中には名産品店
も計画しています。」
風間洋平氏は病み上がりのせいか精彩のな
い背中を丸めた姿勢で、淡々と観光係長の小
さな声に耳を傾けている様子でした。しかし
風間夫人の態度にはさつきから首を振ったり、
揉手をしたり、膝を組み替えたりと、明らか
に苛立ちを示していました。
「ちよつとご質問してよろしゅうございま
すか。展望台や時計台にはどこを予定されて
いるのですか？」と観光係長の小声を気にして

いた様子の風間夫人が淑やかな仕草で挙手し、
くだんの鈴虫のように高い澄んだ声で彼の説
明を遮りました。
「ええ、ご承知だと思いますが、奥様が花を
植えられている場所です。」
「そこは人が不慮の事故で亡くなった現場で
すわ。わたし達はその遺族です。先程から愛
とか平和とかおっしゃいますが、そんな不吉
な場所は相応しくないかと存じます。」と憤然た
る口調でした。
「それは、ええ：「ますます冴えない表情に
なった観光係長は、助けを求めるように端正
な顔で真正面を凝視している振興課長の横顔
を見つめました。自分の出番を察した振興課
長は座ったまま、能面のように表情も変えず
風間夫人の方を向いて口を開きました。
「いつも綺麗に花を咲かせていらっしま
すね。感心して眺めています。正直に申しま
すけど私の個人的心情としては、ずっと花壇
としておきたいくらいです。しかしそこは県

の管理地で、個人に無償貸与を続けることは不適切な行政になることをご理解いただけた。」「では、わたしは不適切なことをしているのですか？」「風間夫人の甲高い声が更に一オクターブ上がりました。」「前に、子供さんを亡くされた奥様に同情した。しかし今後は正規に行政として地域振興事業を立ち上げるわけですから、何卒、花壇の土地の使用中止をご理解して下さい。」と振興課長は頭を垂れました。」「一事故はもう昔のことですからねえ。お気の毒様ですが事故は風化してしまい、もう村民でも知っていない人は少なくなっただけだと思います。」「今は草原ですが、元々リゾートホテルが建つ予定だった造成地でして、今度新しくホテルを建てますので、その傍に土木課長が申し上げた展望台をかねた鐘楼を建てたいので

す。」先程から立ったままの観光係長も愛想笑
いを浮かべながらペコリと頭を下げました。
二三
風間夫人の声音がうわづったことで、私の
睡魔もぶっ飛び、思わず首を伸ばして彼女の
横顔を見ました。白い頬が更に蒼白さを帯び
陰しさを露わにしていた。
「この十五年、死んだ息子達のことを一日た
りとも忘れたことはありません。それが子を
亡くした親の気持ちというものでしょう。わ
たしはずっとそれ以来、この紅い珊瑚のケシ
の花の髪飾りを付けて過ごしています。これ
が、息子達が流した血の色で、これが命の色
だと信じているからです。」と小さな紅の花の
髪飾りを外して手にして皆に見せました。
「あの、計画では鐘楼の周りには花を絶やさ
ないように植えることになっておりまして、
それでご勘弁願えませんか。花の管理は第三
セクターの事業団に念入りに怠りなくやらせ
ますから：」すっかり困惑した表情で観光係

長は言葉を詰まらせました。

「わたしは息子達への慰霊の花を咲かせています。あなたがおっしゃっているのは、観光の物見遊山で見える人達の目を楽しませるお花のことでしょう！」風間夫人のまさに衣（きぬ）を裂く悲鳴のような声が室内の空気を震わせました。

私の位置からは風間夫人の眼の色は見えませんが、赤い視線がまっすぐに観光係長の髪が薄くなり広がった俯き加減の額に当たっているような気がしました。前に柳田夫人から聞いていた、風間夫人が怒りを発した時の炎ののように燃える爛々たる赤眼を想像して変てこなことです。

「ええ、すみません。」観光係長はどのように返答するか術（すべ）を失ったようで、崩れるように

「係長さんには高価な盆暮れのお礼も欠かしでいませんし、何度も会津若松のレストランでご接待させて頂きましたわ。わたしに土地

を無償でお借りしている認識はございません。
わ。」風間夫人はきっぱりと決め付けました。
「係長、何を貰ったのかね。」土木課長が渋く
低い声で囁くように訊ねました。
「東京の羊羹やフランスの菓子程度です。」観
光係長は土木課長の顔をチラリと見て、秋の
終わりに衰弱した虫が鳴くような情けない消
え入りそうな声で答えました。「我々に向き合
って座る別荘開発会社の営業マンは一言も発
せず、メモをとるボールペンの手先だけが忙
しそうに動いていました。
「柳田様の方は何かご意見は？」振興課長が
心配そうな表情で穏やかに話を柳田夫妻に振
つて来ました。柳田は『待ってました』とい
う感じで流暢に喋りました。
「私共の娘もその鐘楼の建つ予定地で風間さ
んの息子さんと一緒に崖から転落して死にま
した。私は個人的ですが、その場所に自費で
も良いので慰霊碑を建立したいと思っていま
す。二度とこんな悲惨な事故が起こらないよ

うに祈る気持ちで建てるものですから公共性
があると思います。ここに連れて来たデザイン
ナーの五木君に頼んで慰霊碑の完成図もすで
に出来上がっています。』と一気に喋りました。
私は、彼の頭の中でいつの間に自分の別荘の
玄関脇に建てる予定の慰霊碑が事故現場に移
ったのだろうかと、柳田の急な心移りを変て
こな気分で聞いていました。
柳田が話し終わるのを待っていていたかのよう
に即座に振興課長が諭すように口を開きまし
た。
「ご両家のお子さんのことは誠にお気の毒に
存じています。しかし現場が県立公園内とい
う縛りがあったて個人的なモニメントの類は
一切建てることが禁じられています。例外を
申せば、当該物件に公共性が遍く認められ、
具体的に大勢の賛同人の署名などが集まって、
県がその工作物の設置を許可したような場合
に限られます。あとは県自体が議会の議決を
経て何らかのモニュメントを設置することは

ありえます。湖に響く鐘の音は、希望も歓喜も悲哀も、鐘を撞く人の心々で決まるもので、はございませんでしょ。何卒ご寛大なお気持ちでご理解下さい。」「いかにも優生的な手慣れた答弁でした。」「息子達の血でまみれ呪われた土地にホテルを建てても流行るはずがありません。何より、も最初のホテル建設計画は頓挫しているではありませんか。」「とすかさず風間夫人がソプラノの金切声を浴びせかけました。」「結局、この村側の説明会のようなのは、次の予定が入っていますのでこの辺で打ち切らせて頂きます、と角力の寄り切りように絶たれて、私たちは一方的に会議室から追い出された格好になりました。その終了間際のころ、風間夫人は相当癪に障っていた様子で、前の席でメモばかり取っていた営業マンに「あなた方はどうしてこの席にいらっしゃるのですか？」と八つ当たりみたい詰問してしまいました。

「はい、弊社が中心になって湖畔のホテルの
施工を請け負い、ホテルの経営から営繕まで
全ての管理業務をやることになりましたので宜
しくお願い致します。」と先任者らしい青年の
方がニコリとも表情を変えずに冷厳に言い放
ちました。
役場の玄関先での別れ際のこと、風間夫人
がまだ頬を朱に染め怒り心頭の興奮覚めやら
ぬ様子のまま「わたし達、この別荘を出て
行きますわ。軽井沢かどこかに買い替えます
わ。」と柳田に話しかけ、そばの主人にも相槌
を求めていました。そして傍にいた私に向か
って「確かイツキさんというお名前でいらし
たですわね。わたしの旧姓も齋（イツキ）でし
たわ。でも齋藤の『齋』と書く方ですから、
字が違うと思いますすけど：」と感慨深げに話
しかけて来たのです。
「ああ、そうだったのですか。僕は、五本の
木の五木ですけれど、遠い祖先は齋藤の齋のイ
ツキだったと親から聞いています。」と答えた

ら、夏の午後の目映いばかりの陽ざしに、風
間夫人の大きな黒い瞳がますます光り輝いて
見えましました。私には何か一種の親しみを覚え、
持参していたけれど村役場側の尊大な態度の
せいであつて、すっかり出しそびれてしまつたくだ
んの慰霊碑完成予想図を筒から取り出して彼
女に見せてやりました。
「まあ、素敵だわ。」と二枚のうちの花咲く高
原に立つ風間洋一と柳田亜希子のテニスウエ
ア姿の塑像の素描の方を気に入つて、手に取
つて見入つていました。私が調子に乗つて「良
かつたらあげますよ。」と口走つた途端でした。
私の背後にいた柳田夫人が、つかつかと歩み
寄つて来て、「それはわたしの頂き物ですわ。」
と風間夫人の手から大鷹が獲物を討ち取るよ
うな敏捷さで掠め取つて奪い返しました。さ
すがテニスの腕で鍛えた筋肉のなせる業でし
よう。それまで彼女は風間夫人の方に眼を向
けることさえ避けて、あらぬ方向を見つめて
いたはずでした。私と風間夫人が親しげにし

て いる 様子 を 、 そば で や き も き と 焦 れ て い た
に 違 い あ り ま せ ん 。 私 が あ つ け に と ら れ 柳 田
夫 人 の 顔 を 見 つ め る と 、 薔 薇 色 の 顔 で 媚 び る
よ う に 婉 然 と 紅 い 口 元 を 綻 ば せ た の で す 。 私
は キ ッ と 唇 を か み 締 め て 柳 田 夫 人 の 方 を 睨 み
付 け て い る 風 間 夫 人 が 気 の 毒 に な っ て 「 こ ち
ら で い か が で す か ? 」 と 同 じ く 風 間 洋 一 と 柳
田 亜 希 子 の 顔 を 模 し た 比 翼 の 鳥 の 図 柄 の 方 を
差 し 出 し ま し た 。 「 そ ち ら は 結 構 で す 。 」 と 彼
女 は 白 い 頬 に 隠 し よ う も な く 紅 潮 し た 怒 気 を
堪 え た ま ま 素 気 な く 断 る と 、 さ っ と 踵 を 返 し 、
自 分 の 主 人 が 待 っ て い る 自 動 車 の 方 へ す た す
た と 歩 き 出 し ま し た 。 こ の 間 、 二 人 の 夫 人 が
真 正 面 か ら 視 線 を 合 わ せ た の は ほ ん の 一 瞬 の
こ と で し た 。 直 射 日 光 の 日 照 り の 下 に 急 に 出
て 、 私 は 若 干 朦 朧 と し て い た の か 、 乳 白 色 と
薔 薇 色 の 向 き 合 っ た 女 の 二 つ の 額 の 真 ん 中 で
エ ン レ イ ソ ウ の よ う な 小 さ な 紅 の 花 が 一 瞬 咲
い て 閃 い て 飛 び 散 っ た よ う な 気 が し ま し た 。
風 間 夫 人 の 小 さ な 紅 の ケ シ の 花 の 髪 飾 り と 柳

田夫人の小さな紅の薔薇の花のブローチの残
像のせいかも知れませんが、変てこな気分にな
りまりました。
葉盛りの白樺林の上を夏の太陽がじりじり
と照りつけていました。私は柳田夫人と一緒
に柳田が待っている緑陰に駐めてあった自動
車に乗り込みました。すでにクーラーが利い
ていて鳥膚の立つような身震いを覚えました。
二四
翌朝も真っ青な夏空が湖の上に広がって
ました。私は風間夫人の花壇へ出かけてみ
うと外出の格好に着替えをしていました。珍
しく早起きしていた柳田夫人が部屋をのぞい
て、「五木さん、風間さんの奥様に会いに行く
のですね。昨日の奥様のワンピースのフリル、前
にテレビで流行ったエリマキトカゲにそっく
りでしたわ。」女同士のからかいを越えた嫌味
な言い方でした。還暦はとうに過ぎていま
が、私も男です。から異性の好き嫌いはいま

す。しかし、それがすぐに愛だの恋だのいうものに変化する訳ではありません。声の美しい白樺の肌をした女人の風間夫人に、この高きめきを覚え、心のどこかで白衣の天女のよううに憧憬していたのかも知れませんか。柳田夫人も薔薇色の肌をした艶麗な美貌の持主で、健やかな魅力ある女性です。でも二人とも所詮は人の妻で、私の家庭にも貞淑な妻と子供達もいます。風間夫人と柳田夫人を対象に、自分の惚れ具合を較べても何の意味もないのです。しかしこの前のように、どちらが好きですかのような詰問を受けると、上の辺ではごまかしても心の奥底で、何かとその答を本気で思案している男の性（さが）もまた変てこなものです。私は正直に告白して、清楚で高貴な白い花の香りが匂い立つような風間夫人の方が好みでした。だからと言って別に何をしでかす気もありません。かと言って孔子のようには、心の欲するままに従えども矩

を越えずという神域のような悟りに達したの
でもない只の凡夫なのです。
朝の湖畔の花壇には、鎌で花々を刈り取る
風間夫人の姿がありました。彼女は人が近づ
いた気配で振り返り私の姿を認めると、作業
の手を休めて小道に出て来ました。珍しく帽
子を脱ぎ深くお辞儀して顔を上げ「五木さん、
見ての通りです。」と潤んだつぶらな瞳を見せ
ました。
この湖のように深く深い悲しみに満ちた声
音でした。言われた通りに彼女の顔をじつと
見つめると、ハラハラと涙の玉をこぼし、そ
れが頬をつたって流れ落ちるのを拭おうとも
しませんでした。もう丹精込めて咲かせた力
ンナもサルビアもヒマワリもあらかた刈り倒
されていました。
「ここにホテルを建てるなんて！呪ってやり
たいですわ。」
「自然景観を言うなら建造物なんかいい方が
ましですね。宿泊客が出す汚物や排水の処理

だ　っ　て　浄　化　設　備　を　設　け　る　ん　で　し　よ　う　が　、　徐　々
に　湖　水　を　汚　染　す　る　に　決　ま　っ　て　い　ま　す　よ　。」
「　こ　こ　は　サ　ン　ク　チ　ュ　ア　リ　で　、　人　間　が　お　金　儲　け
を　す　る　場　所　に　し　て　は　い　け　ま　せ　ん　わ　。」
涙　の　涸　れ　た　夫　人　は　少　し　落　ち　着　い　た　よ　う　で　し　た　。
「　村　が　財　源　確　保　の　た　め　に　産　業　を　興　す　こ　と　も　必
要　な　の　で　し　よ　う　ね　。」
私　は　慰　め　る　よ　う　に　夫　人　の　肩　を　撫　で　て　や　り　ま　し
た　。
「　柳　田　さ　ん　の　奥　様　も　酷　い　で　す　わ　。」　わ　た　し　達　の
世　代　は　、　女　は　清　く　正　し　く　美　し　く　あ　れ　と　か　、　強
く　も　優　し　く　も　あ　れ　と　か　、　あ　れ　こ　れ　言　わ　れ　て　躑
け　ら　れ　育　っ　た　の　で　す　よ　。」　人　が　手　に　し　て　い　る　も
の　を　、　い　き　な　り　引　っ　手　繰　っ　て　奪　い　取　る　な　ん　て
レ　デ　ィ　の　な　さ　る　こ　と　で　は　な　い　で　す　わ　。」　お　郷　が
知　れ　て　い　ま　す　わ　。」　き　っ　と　山　奥　の　極　貧　育　ち　か　ら
成　り　上　が　っ　た　方　で　す　わ　。」　そ　う　で　な　い　と　、　あ　ん
な　は　し　た　な　い　真　似　は　出　来　ま　せ　ん　こ　と　よ　。」　わ　た
し　が　も　し　阿　婆　擦　れ　女　で　し　た　ら　、　す　ぐ　に　追　い　か
け　て　行　っ　て　張　り　倒　し　て　や　る　か　、　後　ろ　髪　を　掴　ん

で引き倒し地面を引き摺り回してやりました
わ。」と再び口惜し涙を滲ませました。私は黙
って聞き流しました。柳田夫妻にはお世話に
なっているのです、心の底では風間夫人に同情
していても、柳田夫人への非難を口にするこ
とは憚りました。
「あれと同じものを描いて差し上げましょう
か？」
「もう結構ですわ。嫌な思い出ばかりが積み
重なるだけで、お気持ちだけで嬉しいですよ
わ。」感極まったのか彼女はピツタリと擦り寄
って来ると、私の肩に額を乗せ俯いて泣きじ
やくつたのです。夫人の髪の毛の薫香と青臭い草
花の汁と土の匂いが複合した何とも言いよう
のない香りに、私はいつか酔い痴れたように
風間夫人の背中を固く抱き締めて貰い泣きを
しました。真に変てこなことと心の片隅で自
覚しながら、ずいぶん長い時間同じ格好でい
て、終いにはそつと彼女の片頬に唇を当てて
いました。

私のご先祖様の姓は齋（いつき）に間違いな
く、旧姓が同じ齋（いつき）だったと言った夫
人にいつしか従妹のような親しみを覚え愛お
しく思い、夫人の背中をそっと抱き寄せて時
の経つのも忘れる程でした。そばの草叢で草
雲雀の鳴声がしきりにしているのに、しばら
く経って気がつくほど夢中で抱き合っていま
した。

「風間さんは別荘を売却し、この秋口にでも
この村から引き揚げるようですよ。」私は柳田
の別荘に戻るとキッチンにいた夫人に教えま
した。その日はテニス仲間との試合があるそ
うで、すでに彼女はテニスウェアに着替えて
食事の準備中でした。幾分でも涼しい朝のう
ちに試合を済ませるそうです。筋肉質の長い
お御足が自慢のようで若い娘さんも顔負けの
スカートの丈の短さです。
「昨日、役場の人にもそんな風におっしやつ
ていましたわ。でもご主人の体の具合が良ろ

しくないから、今年の夏の間は避暑で滞在されるのでしたサジを拾おうと豊満な腰を折ったので、白いスカートの中の派手な紅いショールツが丸見えになりました。別に故意に見せ付けようとした動作とは思えません。私が目を逸らすと柳田が起きて来ました。

「風間の奥さんが、折角の花壇の花を全部刈り取っていたよ。」と今しがたの光景を彼に教えました。

「丹精込めて咲かせたのだろうに、あの奥さんがあるね。」

「やっぱ怖い人だわ。クワバラ、クワバラ：。」と夫人が話を継いだ。本当に息の合った夫婦です。

「五木君、俺も何か充填していた気体が抜けてしまったたようだよ。」

「どういう意味だい？」

「あんたの手を煩わせてしまったけど、慰霊

碑建立の気が失せてしまったよ。風間さんじやないけど、俺もこの村を去りたいよ。よくよく考えたら自分の敷地内の慰霊碑なんて一人よがり以外の何ものでもないんじゃないのか。この地には辛い思い出しかないからね。」

「そうよ。娘にはお墓がありますからね。慰霊碑を建てても娘が帰って来る訳でもないですわ。わたし、お絵描きができ、テニスコートがある所なら、どこの別荘地でもいいわよ。すぐにお仲間が出来ますからね。」と夫人が話を継ぎました。

柳田があんなに熱心だった慰霊碑建立の實現をあつさりと自己満足だったと切り捨て撤回しましたので、私もすっかり拍子抜けしてしまい、トーストとサラダとミルクの朝食後に夫人がそそくさとテニスクラブに出かけるのと、柳田にもう自分には用もなくなつたみたいなので帰京したい旨を伝えました。柳田にはこれから東京で折々に会うことで納得させ「奥さんに宜しく言っといてくれ。」と伝え、

とにかく新幹線の駅のある郡山の駅まで車で
送ってもらいました。
二五
残りの夏の日々、柳田は夫人同士の諍いを
修復すべく腐心し、風間洋平氏の別荘を病氣
見舞いがてらに妻と一緒に訪ねた、と私に便
りを寄越しました。それによると、風間氏と
は男同士で意気投合し、私がデザインした、
テニスウェアで草花の咲く高原に立つ風間洋
一と柳田亜希子の姿の小さなレプリカを二個
製作し、それぞれが自宅の然るべき場所に安
置することにしたそうです。デザイン代はい
ずれ両家で相談して支払う、と書いてありま
した。両家の奥様の柳田美代子と風間麗子が
仲直りしたかどうかは何も書いてありません
でした。ただ追伸に、『この頃、女房の携帯メ
ールのチェックが厳しくてな！』とボヤキが
記されていたのが気にかかりました。
九月の彼岸過ぎ、東京でも夏の名残の積乱
雲が消えて、すっきり澄み切った秋空になっ

た日でした。私は昼食後の定番の玉川上水の
岸辺の散歩に出かけ、ついでに髪を刈っても
らいに馴染みの理髪店に入りました。髪をチ
ョキチョキと鋏で切ってもらいながらぼんや
りと目の前の大鏡の中を眺めていたら、窓外
に咲いたピンクのコスモスの花々の上を大き
な黒い蝶々が舞い交っているのが眼に入りま
した。秋の光の中を二匹の黒揚羽が、追いつ
追われつつ何か争っているようにも戯れている
ようにも見えました。私は変てこにも鏡の中
を飛び回る二匹の蝶々の挙動に夢中で目が釘
付けになっていました。が、突如「倒しますよ。」
と床屋の主の声で腰掛を倒され蒸しタオルで
顔面を覆われてしまい、その後の蝶々の成行
きは知りません。
私が散髪を終え帰宅しテレビを何気なくつ
けた途端、ワイドショーのニュース速報でい
きなり肝を潰すほど仰天する破目になりました
た。
「ただ今入ったニュースです。今日、正午過

ぎ、福島県裏磐梯の五色沼の近くで乗用車同
士の正面衝突事故がありました。詳しいことは
は警察が捜査中ですが、目撃した人の話では
檜原湖方面から走って来た車に突然小野川湖
の方からの車がセンターラインを大きく反対
車線にはみ出して衝突した、このことで死傷
者が出ている模様です。』と女子アナが歯切れ
良く喋り始めました。画面は女子アナの顔の
いかにも作ったという、さも深刻そうな表情
からいきなり道路の事故現場の光景に切り替
わり、前部が原型を留めない程見るも無惨に
潰れ炎上した二台の乗用車の静止画像が飛び
込んできました。続報によると、乗用車に生
存者はなく、誰が運転していたかなど詳しい
事故の状況は福島県警交通機動隊が捜査中と
のことでした。車の持主はそれぞれ風間洋
平さんと柳田賢治さんと報道されたのです。
夕方、ニュースまで待ってやっとなったの
ですが、柳田が風間洋平氏の車を病弱の当人
に代わって運転し、会津若松のかかりつけの

病院に入院させ、風間夫人を送って別荘へ戻る途中、前方から来た柳田夫人の運転する車がいきなりセンタラインを越えて突進して来た様子だそうでした。私の個人的推定ですが、風間夫人は遠い千葉の娘婿に夫の病院搬送を頼むより、身近で最近とみに昵懇の仲とになった柳田に、夫の病院送りを依頼したのだと思います。きっと内緒のメールで頼んだのだでしょうが、かねてより内密に亭主の携帯メールをチェックしていた柳田夫人の知る所となり、待ち伏せをされたのでしょう。柳田はゴルフに行つて来るよ、とでも告げて出かけたのかも知れません。運転席と助手席に仲良くアベックでやつて来た亭主と風間氏の奥さんの姿を目の当たりにして、嫉妬と憤怒で自制心を喪失した柳田夫人が、頭に血がのぼったまま反射的にハンドルを切つて、車ごと憎（につく）き風間夫人に体当たりしたのに違いありません。単なる交通事故でなく、自爆的な殺人事件なのです。が、当事者全員が死亡し

ているので、それほど突っ込まない通り一遍の捜査しか行われなかったのだと思います。死人に口無しという言葉通りで、柳田の妻美代子が自爆覚悟でことを決行するほどの、嫉妬しが憤怒すべき不貞の關係が、彼と人妻風間麗子の間にあったのかどうか、私にも判りようがないのです。当事者三人と身近な關係にあつた私への警察の呼び出しや事情聴取はありませんでした。

同じ都内の居住で大学の絵画サークルの相棒だった柳田賢治と妻美代子の通夜と葬儀にはもちろん参列しました。大きなファーマシーチェーンのオナーだった柳田夫妻の不慮の事故死はマスコミに大きく報道され世間に広く周知されましたので、社葬の催行された築地の葬祭場には、医薬品業界を中心に周辺各界や夫婦双方の親類、友人、知人の大勢が参列し、それは壮大なものでした。しかし葬儀場は大勢の人々はいても、私の知っている顔は皆無という有様で、ただ虚しさだけが募

りに募りました。この中で長女の柳田亜希子の若い日の事故死を知っているのは、ほんの親族の一部と古参の社員だけだろうし、ましてこの夏まで彼らがその愛娘らの慰霊碑を建てようといふ画策していたことは、私一人だけが知っていたことではなかったかと思うと、隔靴搔痒のようない悲しみを胸に秘めて憂悶しつつ、僧侶達の読経の声を聞きながら焼香するしかありませんでした。風間夫人の葬祭も千葉の地元で盛大に営まれたことでしよるが、そのちらの方の参列は遠慮させてもらいました。その後の風間洋平氏の成り行きは、事件の翌週に出た週刊誌の記事で知りました。彼は医師の忠告を無視し、無理を押しつけて妻の葬儀の喪主を務めた挙句、腎不全を悪化させ敗血症を発症してしまい、あっけなく後を追うようになり死去していたのです。これで慰霊碑建立のひと悶着は、憂き世の闇の中に完璧に消えてしまいました。人の為すことなど、微塵に跡形もなく消滅してしまふものだと実感しま

した。まるで時間にはパツクリと大口を開け
た亀裂があり、人の世の何事もそこから闇の
隙間へと吸い込まれていくのでしょいか。
死んでしまった柳田美代子と風間麗子を花
に例えるならば、かたや大輪の紅の薔薇の花
であり、こなた清楚な白いくちなしの花だっ
たと思います。私は、柳田美代子が陰口を叩
いた、風間麗子の般若のお面に爛々と光る赤
い炎のような目といった表情は、ついぞ見た
ことがありません。私が見知っていた風間麗
子は、凜冽かつ可憐で慈しみのある女人でし
た。
たまたま新聞で、福島県の観光宣伝の広告
欄を目にしたのですが、その日から数年が経
つて、『道の駅』からくだんの湖まで、白樺並
木の散歩道が出来ていました。しかし湖畔の
ホテル建設は又もや経済不況による村の財政
難から頓挫したようです。それでも風間洋一
と柳田亜希子が事故死した現場には、湖面と
向かい合った山々を眺める展望台を備えた鐘

楼が建っていました。カラー写真で紹介されていたのは、赤い尖塔に白壁の洒落たチャペル風の小さな鐘楼でした。それは西洋風の釣鐘で可愛らしいものでした。かつて柳田美代子が雑誌中に、自分達夫婦と風間夫婦に私を加えたら五角関係で神秘的な感じがした、とはいひださず。その時、話題にした五角形に内接する五芒星、今にして思えば私と両家の夫妻は怪奇で神秘的ともされる五芒星の形を成していた気がします。私は、柳田夫妻とはもちろん、風間夫妻とも老いの坂を前にして懇意な間柄になれるだろう、と楽しみにしていたので、口惜しくも壊れてしまったのでした。しかし決して愛し合った訳ではないのです。が、私とお互いに好意以上のものを確かに感じていた柳田美代子と風間麗子が、二人とも忽然ともろにもこの世から露と消えてしまったのに、より一層と二人の女人が性愛の対

象として夜な夜な私の煩惱の夢枕で迫って来
るとは不可思議なことです。柳田美代子と風
間麗子の肉体の不在が余計に男の情欲を煽り、
そのエロテイシズムで悩ますとは変てこでは
ありませんか。もしや私の心中にエロスの使
徒が棲んでいて、二人の女人が肉体を失った
ことと引き換えに生身の汚穢を消し去ってし
まい、純正の美と昇華せしめ、夜毎の夢で迫
らしめているのでしょうか。
夫に内緒で送ってきたポーターの若く
て美麗な柳田美代子と、アルバム帖で見せて
もらった若い日の雪白の美貌の風間麗子を較
べても甲斐のないことです。私は老境に入っ
た今の今でさえ、若い日の純情さを青臭く持
続しているように、くちなしの白い花のよう
な清純さを秘めて失わなかった風間麗子に、
いかにしても心を惹かれます。彼女が白い額
を載せて私の肩で哭いた時に着用していた開
襟シャツは、家内に内緒で納戸の奥に仕舞っ
てあります。絶対に洗濯をせず、その折に沁

みついた彼女の髪の毛の移り香をたまに内緒で嗅いで懐かしみ、一人喜悅に耽るなんて、やっぱり変てこなことですね。

その一方、大輪の紅の薔薇の花さながらの情熱的な柳田美代子は好きな女性です。彼女が白樺の幹のそばで撮ったポートレートも、

書斎の机の奥底に大事に仕舞い、たまに家族の目を盗んで手に取り、想い出に耽っていることもあります。もしも生まれ変わって彼女と邂逅するようないことがあるならば、是非生涯の伴侶としてみたい女性だと思っています。

学友だった柳田賢治との定年後の慰霊碑建立をめぐる親交で、たまたまごく短い間だけ親しくした、それぞれに魅力的だった二人の夫人に甲乙を付けることは出来ません。もし柳田美代子が惹き起こした自爆的な死亡事件がなく、両夫人がこの先長生きをしていたら、後には神のみぞ知る神秘の五角形の人間模様の運命が展開されていたことでしょう。

私と家内の結婚記念日は中秋の頃でした。
珍しく息子が祝いに行き、自分が車を運転するか
ら旧婚旅行に出かけようと誘ってくれ、お嫁
さんと孫の男の子の五人連れのドライブをし
ました。
行先は福島県の会津若松に近い猪苗代湖
泉でした。会津地方は晴朗たる秋天の日和が
続いていました。着いた日に戊辰戦争の悲劇
の象徴の鶴ヶ城を始め白虎隊の旧跡など市内
観光に精を出した上、夜は息子夫婦の奢りで
結婚記念日の祝いの美酒に酔い痴れてしま
い、翌朝私は少し体調を崩したよう、微熱と軽
い悪寒を覚えました。私は大事をとりホテル
の一室で雑誌をめくったり、テレビを見なが
らうつらうつらと過ごすことにし、家内と息
子達は猪苗代湖畔の紅葉観光に向かいました。
私の身体の不調は単なる疲労と二日酔いだっ
たようで、ルームサービスのレストランを食
べ頃には嘘のようになり、元気が出て少しホ
テルの近辺を行ったり来たり散策するほどに回
復して

いきました。家内と息子達も、身体が不調だった私をホテルに残して心配だったようで、午後一時半頃には部屋に戻って来ました。家内は「紅葉が綺麗でとっても良い景色だったわ。携帯に応答がなかったから早く戻ったのよ。」と口を尖らせました。「あっ、携帯は部屋に置きっ放しにしていたよ。」私は携帯電話を部屋に忘れて外出することが往々にしてあるので。元気を取り戻した私は唐突に家族に内緒で、かつて柳田夫妻と間夫妻の別荘があつた吾妻山麓の湖畔の村に行ってみたりしました。日本スコットランド』が恋しくなつたのでした。ここからは車だと小一時間の距離です。「気晴らしにドライブするから車を貸してくれないか。晩飯までには必ず戻って来るよ。」と息子に頼みました。「携帯電話を忘れないでね。電源も入れておくのよ。」と家内から念を押されました。

高原の秋は更けて、黄色くなつた白樺の森
は地面に落ち葉が散り敷いて、すでに晩秋に
入つていました。『道の駅』に駐車し、人影が
ほとんどない黄葉一色の白樺並木を湖へと足
を進めました。ゆつくりと歩いて二十分位で
青い湖面が見えました。晴れてはいますが雲
の流れの早い空でした。
正しく事故現場には尖がり帽子の形をした
小さな鐘楼が建てられてありました。かつて
の風間麗子の花壇は整地され、そこには桔梗
の花の植わった沢山のプランターが並べてあ
りました。私が展望台から湖水を一望してい
ると、いつの間にか背後にいた禿頭の老人か
ら声をかけられました。
「先に鐘を撞いても良いかな？」
顔中に深い皺がある七十年配の感じでした。
湖に向かつて拝礼し、カン、カンと鐘を打ち
鳴らすと、誰かの冥福を祈っている様子で、
しばらく合掌していました。
「この村の方ですか？」黙つて無愛想なものも

感じ悪いので当たり障りなく訊ねました。
「いや、ずっと以前にこの村の駐在をやって
いてね。昔な、ここでオートバイに乗ったア
ベックが死んだ事故を処理した思い出がある
んだよ。」
「そうだったんですか？」
「私は惚けて話の続
きを聞くことにしました。」
「男の子の親も女の子の親も、きれいな奥さ
んだったね。どっちがどっちの子の親だった
とか忘れてしまったけど、肌が透き通るよう
に色白の母親と、もう一人の母親も血色の良
い顔が薔薇色に輝いていて、二人とも拝みた
いほど神々しかったな。生まれ変わって、あ
んな好い女を抱いてみたいよ。」
前歯の抜けた
口を綻ばせて皺くちやの笑顔を見せました。
「その原っぱだけだな、当時からリゾート
ホテルの予定地だったんだよ。当時は更地で
暴走族や不良の溜り場になっ
ても注意しに行ったよ。それで村役場が更地の
奥の方に貴重なエンレイソウの植生があるか

ら、そっちはバイクが入らないようにして
くれと頼むから、わしの独断で村の若い衆の
手を借りて石屋の廃材を小道に並べたんだ。」
この時点で風間洋一と柳田亜希子の事故のこ
とだと確信しました。が、そのことはおくびに
も出さず、ひたすら聞き役をつとめました。
「それがな、夜中に二人乗りのオートバイの
アベックがふざけて無灯火で遊び回っている
うちに、置石に前輪を乗り上げ跳ね上がって
絶壁から下の岩に落つちて即死だよ。遺体
が発見されたのは翌朝だったね。村の衆が見
つけて、わしの所に駆け込んで大騒ぎになっ
たよ。」
「それは大変でしたね。」私は不知（しら）を切
り通しました。
「そりゃ、本署から交通係や刑事を呼んで検
視やら実況見分やら野次馬の規制やらで、村
祭りの大騒ぎみたいないない忙しさだったよ。前
晩に前照灯も点けないで造成地を走り回るバ
イクがいたという当時の村の年寄りの目撃証

言　　が　あ　つ　た　り　、　置　石　に　付　着　し　て　い　た　タ　イ　ヤ　痕
で　事　故　の　状　況　が　解　明　出　来　た　ん　だ　よ　。」　と　老　人　の
言　葉　に　警　察　用　語　が　増　え　ま　し　た　。
「　人　が　死　ん　だ　の　に　お　祭　り　で　す　か　？　」　と　私　は　風
間　洋　一　と　柳　田　亜　希　子　の　否　運　を　知　っ　て　い　た　せ　い
で　、　思　わ　ず　気　色　ば　ん　で　し　ま　い　ま　し　た　。
「　い　や　あ　、　も　の　の　例　え　だ　よ　。　わ　し　は　、　警　察　を
定　年　で　辞　め　た　後　、　こ　こ　か　ら　自　転　車　で　三　十　分　位
の　土　地　に　退　職　金　を　は　た　い　て　マ　イ　ホ　ー　ム　を　建　て
た　よ　。　と　っ　て　も　景　色　が　良　い　か　ら　な　。　だ　が　な　、
そ　れ　で　自　分　達　が　置　い　た　石　で　若　い　人　が　二　人　も　死
ん　だ　こ　と　が　脳　味　噌　に　こ　び　り　付　い　て　忘　れ　ら　れ　な
く　な　っ　た　よ　。　こ　こ　が　家　に　近　過　ぎ　て　な　、　い　つ　の
間　に　か　二　人　の　命　日　が　近　く　な　る　と　、　仏　心　の　真　似
事　み　た　い　に　一　人　で　こ　こ　に　来　て　、　そ　っ　と　岸　の　フ
ェ　ン　ス　に　花　束　を　括　り　付　け　て　手　を　合　わ　せ　る　よ　う
に　な　っ　て　し　ま　っ　た　よ　。」
風　間　夫　妻　も　柳　田　夫　妻　も　、　高　校　時　代　の　テ　ニ　ス
の　旧　友　達　が　捧　げ　て　い　る　花　束　だ　と　思　っ　て　い　た　よ
う　で　す　が　、　こ　の　村　の　元　駐　在　の　お　巡　り　さ　ん　の　仕

業だったとは、私も内心驚きました。しかし、
今更この老人に自分が知っている内幕を晒し
だしても無意味だと思いましたが、ポーカー
ーフエースを通し切りしました。
一向かい側の岸を見なさい。白波が立ってい
るだろう。この湖はお釜みたいに深いんだけ
ど、あの辺りだけは昔の噴火の溶岩が流れ
込んでいて浅い暗礁となっていているんだ。それ
で秋の終いに季節風がおろすと、あそこだけ
白波が立つんだ。村の衆は『白鳥が騒ぐ』と
言っている、冬支度の目安としているよ。」
「もうすぐこの白樺の森の黄色い葉も散って
しまうのですね。」と私は短日の秋の日暮れが
迫った気配に肩をすくめました。
「ああ、もうすぐ森が裸木ばかりで殺風景に
なるね。この鐘楼が建ったお陰で、それから
花束を捧げる心配がいらなくなり助かった
よ。」
それだけ告げると老人は、傍に停めていた自
転車にまたがり、さっさと秋風に追われるよ

うに走り去ってしましました。
『白波立てて騒ぎました』と柳田亜希子
が書き遺した詩にあつたことを思い出し、い
っそうの侘しさを覚えしました。私は行く秋の
湖畔で一人ぼっちになりました。夕暮れの迫
った湖面には風が渡つて身に沁み入るようで
した。湖の向かい側は、さっきの老人が言つ
たように、白波が立ち白鳥が騒いでいるみた
いでした。不意に、
風が立ち、浪が騒ぎ、
無限の前に腕を振る。
と愛読の中原中也の詩の文句を呟いていまし
た。無限の彼方に去つてしまつたが如き、小
さな紅のケシの花の髪飾りをした風間麗子と、
小さな紅の薔薇の花のブローチを胸にした柳
田美代子をお願い起こしました。麗子と美代子
の二つの額の間に飛び交つた小さな紅の花の
ような火花への思いが、夜な夜な夢幻の淵で
私の身体を溶かし、魂を漂わせて悩殺するの

です。一人ずつ夢に現われる時はまだ良いのですが、二人が一緒に出て来ると仲良く手を
つないでいるかと思えば、突如互いに蛇蝎の
ごとく嫌合い、髪を振り乱して罵り合った
り、激しくのたうち廻ったりの修羅場となつ
たり、そうこうしているうちに、白蛇と紅蛇
の二匹の蛇と化し、紅白の注連縄のように一
本に振れて、鎌首だけがむしゃぶりつき、咬
みつき合っており、私は即座に夢現から覚醒
してしまい、もう朝まで頭が冴えて眠れない
のです。私は、とづくにこの世の人でない二
人の女人への煩惱を打ち払うべく、鐘楼の釣
鐘を百八つ鳴らそうと思いい立ちました。展
望台に上がると、おもむろに一つ、二つ、三つ、
四つ、五つと小声で数えながら百八つの澄ん
だ鐘の音を湖上に鳴り響かせました。魚も住
めない悲しい湖、この湖面の蒼さがそれを象
徴していました。百八つの鐘を鳴らし終える
と、いつしか斜陽が湖水一面に射し込んで夕
映えの気配が濃くなつていました。秋の暮れ

方、私が老境に入ってから好きになっ
てしまった女人達が、思いもよらない
事件で急に現世から不在となってい
し、この湖の蒼さかも知れないと思
うと、死んだ人が行くと思わずに浄土
のある遙かな西空の方向へ自ずと眼
をやっていました。薄い筋状の茜雲が
行くのを眺めていましたら、風間麗子
と柳田美代子への煩惱を断ち切り、二
人を見送る、二人を待たせたい、とし
て、なお二人への想いを募らせていま
「僕ももうじきそっちへ行くから、
ておくれ。」と哀悼と鎮魂と冥福の心
をこめて祈って、はじめて寂寥の色合
い、未練の百八つもの晩まぐれの湖
水に向かい、鐘を打ち鳴らしたことに
気がつきました。私は何だかんだと日
暮れの鐘を百八回も撞いた、ただで
ま、返ってとつくに肉体もない二人
の女人への恋心を膨らませてしまっ
た。その時、私の胸

ポ
ケ
ッ
ト
か
ら
「
チ
ャ
ラ
リ
ー
ラ
リ
チ
ャ
ラ
リ
ラ

リ
ラ
ー
」
と
間
延
び
し
た
甲
高
い
チ
ャ
ル
メ
ラ
の
笛

の
音
が
鳴
り
響
き
驚
き
ま
し
た
。き
つ
と
孫
が
携
帯

電
話
の
着
メ
ロ
を
悪
戯
し
た
の
に
違
い
あ
り
ま
せ
ん
。

「
あ
な
た
、
今
ど
こ
な
の
？
」
と
怪
訝
な
家
内
の
電

話
の
声
に
「
あ
あ
、
白
鳥
が
騒
い
で
い
る
よ
。も
う

じ
き
冬
だ
ね
。」
と
答
に
な
ら
な
い
変
て
こ
な
応
答
を

し
な
が
ら
、
私
は
黄
落
を
深
め
た
白
樺
並
木
の
落
ち

葉
を
カ
サ
カ
サ
音
立
て
て
踏
み
な
が
ら
帰
路
に
つ
き

ま
し
た
。ふ
と
白
樺
の
森
の
黄
葉
の
中
に
、
小
さ
な

紅
の
花
み
た
い
な
も
の
が
脇
目
に
入
り
、
思
わ
ず
仄

か
に
暗
い
森
陰
に
足
を
踏
み
入
れ
て
し
ま
い
ま
し
た
。

そ
こ
に
は
、
す
で
に
紅
葉
を
失
い
裸
木
と
な
っ
た
ナ

ナ
カ
マ
ド
の
木
が
茂
っ
て
い
ま
し
た
。そ
の
小
枝
の

先
の
小
さ
な
紅
の
実
に
、
こ
れ
こ
そ
女
人
の
怪
し
く

燃
え
る
情
念
の
色
か
、
そ
れ
と
も
命
の
色
か
、
或
い

は
魂
の
色
な
の
か
、
と
す
っ
か
り
迷
い
道
に
入
り
込

ん
で
し
ま
い
ま
し
た
。真
に
も
っ
て
変
て
こ
な
こ
と

で
す
。